

—全九州学生青年霧島合同合宿報告—



国民文化研究会



合 宿 参 加 全 員

— 霧島神宮前にて —



講 義



研修館前広場



研 修 館 正 門



討 論



戸 外 合 唱

この書の発行について、はしがきのことばをという御依頼を国民文化研究会の方からいただき、会の方々よりわづかな年令的先輩であるにすぎない私は、その任ではないと思いましたが、この会の方々の強烈且深刻な憂国心と、稀にみる友情に結ばれている協力の際にうたれて、「国民文化研究会」と「会の方々」を御紹介する御役にでも立てばと思ひ、一筆、記すことにいたしました。

この書のどこかに、会員の名簿が出ていますか、この会はその名簿に記されている様に、約三十名の方々、しかも年令は三十五才前後の、社会に出て中堅に働いている方々の集りです。国民文化研究会というその名は、いかにも堂々たるものではありませんが、実はこれらの人々の単なる研究集会に名づけられたものにすぎず、従つてその事務所というのも、会員の一人の方の家、少数の家族が、やつと生活出来るだけの、ささやかな住居の門柱の表に、その表札がかけられてあるにすぎないものであります。云わば手紙の送達のための目印として事務所の表札があるにすぎない会と申せばよろしいでしょうか。

この三十五才前後の三十名許りの人々は、九州及び中国地方に現任する人々で、今は大学教授あり、高校教諭あり、実業家あり、役人あり、農業者あり、医師あり、さまざまに分野に在つて、活躍しておられるが、過ぐる十五年位前、即ち大東亜戦争開始前後の昭和十五、六年から十八年頃の間、当時の大学、高専に学生として学んでおられた時からお互に友人であつた人々であります。即ち当時、国内の思想の不明確化を憂え、正しい学生生活を求めて、相互に学問を研究し、又政治を分析し、或は教育内容の概念形式を友情によつて補う等の努力をしておられました。その中のすくなくからざる人々が戦争に征でて戦死され（内一人は終戦時、福岡郊外油山山上で壮烈な自刃をされましたが）、残つた人々が、終戦以来、時にふれ折にふれ交友をつづけ、時代の動きを注視しつづけて来られたのであります。

戦後十一年の期間は国民すべてにとつて大きな試練期であり、困苦艱難の時代でありましたが、とりわけこの会の人々に取つては経済的にきわめて苦しい時でありました。なぜならば、年令的にも社会人としては初歩の地位にあり、家庭をつくり、子供が出来、衣食住を最低に支えるのに、辛うじて耐えるのが、精一杯のことであつたからであります。学生時代から国家のことを先に憂えたこの方々は、終戦後要領よく世渡りする人々には足許にも及び得なかつたからであります。

しかしこうした間に漸く細々ながらも生活の安定を求め得るにつれて、遂に各地に散在しているままで「国民文化研究会」という一つのグループをつくり上げたのが、今年の一月のことでありました。爾来毎月一回、九州のいづれかの土地に一泊の会合を行い、研究会がかざわれ、その間、今日の大学生が全く思想的に無秩序に放任され、挙句の果は、殆んどこの学生がマルクス主義以外に学

問はないかのごとく考えている現状が指摘せられるに至つたのであります。大学生に対する思想指導の機関は、皆無と申してよいほどの状況で、一番困難な問題であります。マルクス主義思想の宣伝は学内外、放送、言論、雑誌を通じて活潑に行われてはいても、マルクス主義の誤りを正す立場でのそれは、寥寥たる有様であります。この会の人々が、単なる友人同志の交友だけを基礎にして、ただの一人の専従者も事務員も持たずに、この問題に真剣に取組み、遂に今年の夏、九州霧島で約百名近い学生思想訓練合宿の実現にまで到達したことは、深く敬意を表すべき処でありましょう。その成果がここに収録されたことは、併せて邦家のため、また文教政治に心をいたされる人々にとつても、深い意義を持つものと信じて疑いません。

このレポートに収録された内容についての価値批判は、読まれる方々のお心のままにおまかせしなければなりません。こうした合宿事業が自発的に生れ出したこと、云わば三十台の人々が直接二十台の人々の指導にのり出したことなどは、現代の世相と照らして全く味うべき問題を持つていられると思われまゝ。事実、この合宿の準備のために毎月一回、九州のある所に一泊の会合をしておられた当時のことを附記しますと、その間の事情を一層よく汲み取つていただけると思ひます。一泊の会合が福岡で行われるとなると、岡山・鹿児島・熊本その他遠方の人は、土曜日に有給休暇をとつて出発します。そして午後三時頃集合しますと、それから食事と僅かな睡眠時間をさいて、二十四時間殆んどぶつ通して研究と協議がなされます。翌、日曜夕方解散しますと、遠方の人は夜汽車で帰り、月曜の朝の教壇なり職場にやつと間に合うようにして家路につく、という形でありました。勿論三等にゆられ、旅費その他手弁当での会合がつづけられていました。薄給生活で二、三人の子供を持つこの年頃の人々にとつては、この出費さえただならぬ犠牲であつたことは、申すまでもありません。

日教組、その他の労働運動の幹部達が、組合費の裕福な資金の上にあぐらして、多数の専従者・事務員を擁し、運動費に事欠くことなくつづけているのが、彼等の言うプロレタリア運動であつて、ただ一人の専従者も持たず、毎日のつとめの余暇をさきつづけて、階級斗争主義や赤色革命を阻止するために情熱をそそいでいる有様は、余りにも皮肉な対象でなくでありませんようか。

こうした中に営々としていとなまれた「国民文化研究会」の学生指導合宿は、その内容は仮に別としても、この時代におけるめづらしい貴重な足跡であつたことは、言い得ると思ひます。どうかこのレポートの隅々まで御目を通され、力強い御批判、御叱正がこの会のために寄せられますことを祈つております。

尚、明年夏も、九州のいづれかの土地で、更に内容の充実した合宿が行われるやに聞いておりますが、その実現を心から待望いたしたいと思ひます。

真の「独立と平和」を念じつつ本書を
刊行する。

——我々は日本国民の唯一最大の悲願である「独立」と「平和」という至高の言葉
を今こそ革命陣営並びに進歩派文化人から徹底的に奪回して、この二つの言葉
にまことの生命と内容とを盛り込もうではないか——

国民文化研究会

混迷の時代に指標を求めて

—全九州学生青年霧島合同合宿報告—

国民文化研究会

目次

はしがき	1
青年学生に訴う	1
合宿報告	6
一、合宿計画具体化の経過	6
二、合宿参加者の構成	9
三、合宿運営上の特色	10
四、合宿経過報告	10

合宿感想録

合宿をかえりみて

鹿兒島大学 K

24

合宿所感

久留米大学

T

25

決意

早稲田大学

O

25

合宿所感

会社員(鹿兒島)

K

26

K先生へ

福岡大学

Y

26

灼熱せる炎の如く

農業(松山)

M

27

○

我等の進むべき道

佐賀工業高校教諭

末次

祐司 28

A君へ

香椎高校教諭

小林

国男 29

農村雑感

肥料商

小林

栄一 30

一医学徒の所感(合宿に参加して)

都城中央病院長

小川

幸男 31

○

信をもつてつながるもの

修猷館高校

K

32

目次

講義要旨

経済学の考え方と日本経済への適用及び政策の方向……………	石村暢五郎……………	34
二つの世界観（西欧における）……………ヘブライズムとヘレニズム——マルクスと釈尊——	福岡大学法経学部教授	
因縁果の哲学的思考……………経済史把握の方法——長期産業計画の方法と方向	鹿兒島大学文理学部助教授 川井修治……………	39
平和革命論の検討……………	序論・平和革命論の横行・それは厳密な批判を必要とする——フ・ミ演説に於ける平和革命の問題——日本に於ける流行平和革命論の検討——結語・真の平和的改革推進の為に	
世界史の発展……………	外交評論家 広田洋二……………	43
——冷たい戦争と日本外交——	問題の世界史的把握——「世界は一つ」と「冷い戦争」——マレンコフからフルシチョフへ——日本外交はいかにあるべきか	
日米開戦の真相……………	東京電気大学附属高校教諭 渡辺明……………	48
米国の対日挑発政策——米国主脳部の謀議（ビーアド博士の論証）——真珠湾事件の真相——大東亜戦争の意義——「改正論」文献		

ソビエツト第二十回党大会における「スターリン批判」を中心に……………

青山学院大学院教授 日下藤吾…………… 51

スターリン批判の四つの問題点——「集団指導」の意味するもの——スターリンをして罪を犯させたものは何か——マルクスのヒューマニズムにおける人間の肯定と否定——人間否定の行きつくところ——共産主義社会のメカニズム——絶対主義による人間の抑圧

マルクス資本主義崩壊必然論について……………長崎大学経済学部助教授 吉田靖彦…………… 57

事実検証に耐えうるもの——クズネツツの報告——資本家的蓄積法則の誤謬

共産治下国民生活の実態……………笠岡商業高校教諭 名越二荒之助…………… 59

最近のソ聯中共観をつく——

二つの見方、そのいずれにリアリティがあるか——人智によるノルマ計量の無謀——相互批判の恐怖——「理論の真昼」と「人間性の暗黒」

昭和史をめぐる……………熊本大学教育学部講師 森祐三…………… 63

——とくに人間性の問題について——

亀井、和歌森、遠山三氏の主張とその批判——階級をのりこえる全人類的意思——
敗戦虚脱の人心と唯物史観との関連

社会主義文学理論の検討 若松高等学校教諭 山田輝彦 64

上部構造論とは何か——社会主義リアリズムの孕む問題点——無葛藤性理論の笑うべき誤謬——日本におけるマルクス主義文学理論の浸透——階級斗争の歴史としての文学史の再構成批判

民族的抒情の回復を阻むもの 修猷館高校教諭 小柳陽太郎 66

近代における人間像の衰弱——科学的思考による判断の主体の喪失——歴史的生命の涸渇 「鑑賞」ということ——民族的連帯感情の分裂と「私小説」の世界——連帯感情に言葉を与えるもの

短歌 山田輝彦 71

抒情詩論 亜細亜大学教授 夜久正雄 70

——万葉短歌を中心として——

万葉短歌の抒情性——柿本人麿の位置——国民生活の紐帯としての万葉短歌——政治、社会生活を調和に導く短歌の抒情性——今上天皇の御製について

今上御製研究(抄) 夜久正雄 73

日本政治の再建のために……………小田村 寅二郎……………77

——特に天皇制の問題について——

Spirit of Liberty と Liberalism——「真理探究」の態度と「事実の認識」の問題——

「日本人であるよりも先に人間である」ということ——天皇制存立に必要な基本的二要件

——統治者対国民の対面形態と統治者・国民の並列形態——近代天皇制の形態の真価——

天皇制のもつ高度性と悪用化性——天皇制の形式的復活の危険と憲法改正の安易性排除——

——天皇制の課題——保守政党の意義目標を明確にせよ

国民文化研究会会員名簿……………86

国政研究会よりの寄稿

趣 意 書……………2

会 則……………3

発 議……………4

日教組問題研究大綱……………6

青年、学生に訴う

青年、学生諸君!!

我々——国民文化研究会——は諸君に深い関心と大いなる期待を寄せている。何故ならば、諸君は国民各層の中で最も活力に富み、真理と正義に対して最も敏感なるべき青年令層の人達であるから。次代を背負うものは諸君である。混迷に沈倫しつづある祖国の運命を開く鍵を托されたものは、諸君を措いて他にはないからである。

凡そ一国の将来が、その国の青年達の志向の高邁であるか、卑賤であるかに懸つており、一民族の運命が、その民族の若人達の資質の堅実であるか、柔弱であるかに左右されることは、東西諸国民興亡の歴史が等しく実証して来たところである。諸君が置かれた立場ももとよりこの例外ではあり得ない。諸君は外ならぬ我が日本民族の真子として生を享けた人々である。この事は諸君が、仮令環境や素質や思想の差があるとしても、それらを超えて日本国民としての免れ難いつながりの中に生きており、日本の興廢と自己の運命を共にしているという儼たる事実を意味している。だからして日本を興すということは、好むとか好まないとかの理由からではなくて、正しく運命として諸君に課せられた共通の使命である。我々は心から諸君に要望する。諸君は既に生れながらにしてこの共通の重大使命を課せられた人であることを先ず自覚していただきたい。と。そしてこの自覚こそが諸君の一切の思索や行動の出発点であることを、先ず以て心に刻みつけていただきたい。と。

だがしかし、一口に「祖国の命運を開く」と言つても、それが想像に絶する嶮難の道を辿らねばならないことは、賢明な諸君のよく予知されるところであろう。それは「日本人なら誰だつてその自覚を持つているのだから、ことごとしく取り上げる迄もないではないか」というような生半可な意識では絶対に遂行されるものではない。そうではなくて諸君の内なる道德的潔白、真摯な知的探求、献身の情熱と不屈の意志力、それら総べてがこの苦難重畳する途上に於て遺憾なき試練を受け、それを突破してこそ始めて完遂されるものなのである。諸君の中には、或いは頭からこのような堅苦しい道程を嫌う人があるかも知れぬ。何よりも個我の充足を願ひ、一身の安泰を追つて、前述したように自己自身を深奥な場所に於て捉えている紐帯に氣附こうとしない人があるかも知れぬ。而も当節流行の功利主義、

利那主義、享楽主義の混沌たる風潮は、かかる個我迷執の生き方を敢て怪しましめないのみか、凡ゆる世紀末的誘惑手段をとり揃えて愈々助長靡蔓せしめつつあるのが、遺憾乍ら現実のようである。このような風潮に馴れ染み、うつつを抜かしている人々にとつては、凡そ民族や国家の将来等は馬耳東風としか受け取られないかも知れぬ。

しかし考えても見給え！ 若しこのように勝手気儘、したい放題な分裂的傾向が国民の精神を支配しつくしたとすれば、一体どのような事態が現出するであろうか？ そうなれば国家は崩壊し、社会の脈絡は寸断されて、夫子自身が後生大事にとり持つていた個人の自由——かかるものは到底眞の自由とは言ひ難い——と安穩とが、今度は全般的アナキーによつて脅かされるようになるのは、必定と言うべきではなからうか。決してこれは杞憂ではない。現に今の日本に於て、一部ではこれと全く同様の事態がまがまがしくも現出されていることを、誰が否定し得よう。この事理と殷鑑に眼を塞ぎ、今一時の安逸を貪り快楽に感溺しようとする者は、何ぞ知らん、自らの手で自らの墓穴を掘りつつあるのだ！！

個人の自由が国家への奉仕から遊離するのは、太平の逸民に特有な状態である。或いは又全体社会の安危をよそに空漠楽天の思想に酔い痴れ、同胞の苦患を顧ずして矯傲を恣にする迷妄の随伴現象である。このような状態が今の我々にとつて許されるかどうかは、ここで改めて説く迄もなく、諸君がよく御承知のことであろう。實際、今日我が国民が逢著しつつある危局は、底知れぬ深刻さを包蔵している。虚心坦懐に現実の世相を視、祖国の行く手に思いをめぐらす時、我々は文字通り暗澹たる憂愁に胸を塞がれざるを得ない。国際問題にしてしかり。国内問題にして又しかり。東海の四つの小島に逼塞を余儀なくされ、かつがつ生きる資力すら心許ないこの国の岸辺には、国際的緊張の醸し出した狂瀾が容赦もなく打ち寄せ、凡ゆる圧迫、牽制、脅威、詐略、懐柔、侵蝕を伴いつつ怒号咆吼しつつある。しかも国内では自卑自屈の劣弱精神によつて自国伝来の精神を亡失した結果、功利享楽の弊風が遮られることなく吹きすさび、到る処に分裂抗争、不信瞞着、傲慢狂気、奢侈逸楽の種々相をくりのべつつある。まことに言うに言葉を知らぬこの頃である。

このままでは破局に至るのみである。今は未だよいとしても、今のような状態が何の改善も加えられずに推移するとあれば、何時の日か全面的破局に至るのは、火を見るよりもあきらかである。思えば慄然たらざるを得ないではな

いか。しかも巷に満ちる類廃淫逸の狂声は、こうして真剣に考えるその事を頭から狂愚として嘲笑し、戲面化する無神経へと国民を誘いつつある。空疎な進歩主義や平和理論は国民から現実を直視する冷静犀利な眼識を奪い、センチメンタルな口説の綾の中に、国民を溺れさせようとしている。何にもまして悪しき現実主義（打算主義）の蔓延は、卑少な利己心の隔壁の内に国民を分断させつつある。斯くては、祖国が暗々冥々の中に奈落への一途を辿るであろうことは、疑う余地はない。「天下の大患は、大患の所以を知らざるにあり」とは、幕末の先覚者吉田松陰の悵嘆の概言であつた。我々は拱手してこの悲運に甘んずることを肯じない。黙するに堪えぬとはこのことの謂いであるか。今こそ何事かが為されねばならぬ。何者かが燃え上らねばならぬ。今を逸しては機会は永久に失われてしまふであろう。自己自身の問題として祖国の将来に憂いを抱く学生、青年諸君!! 我々が敢て諸君の内心にまで立ち入つて諸君の奮起を要望し、貧しき力をもかき集めて共に共に祖国再興の方途に思念を凝らすと呼びかけるのは、正にこの故からである。

しかし我々がどのような観点から、そしてどのような根拠から斯く迄に深刻な憂いを抱くか、という一々のデータに就いては、報告書所載のそれぞれの論文が、之を明らかにしてくるであろう。唯一つだけ言つて置きたいこと、又置かねばならないことは、仮に国際的紛糾に捲き込まれるとか、或いは又国内に破局的動乱が勃発するとか、予想され得るいかなる難局に遭遇するとしても、国民の強靱な團結と決然たる奮闘の意志さえあれば、その痛手をいかにしても軽減回避できる筈であるのに、そうした国民を共通の意志と方向に結集し、痛苦に堪えつつも心安んじて自己の務に励むだけの国民的基盤が、今日程稀薄なことはない!! ということである。そしてそれが日本の土壌にふさわしい精確な学術的検討を通して正当に価値づけられ、脈々たる情意的連帯感に支えられて生きた力となるには、余りにも程遠い現況にあるということである。

今日流行ジャーナリズムを賑わしている論説の殆んどが、階級史観に立脚して原理的に国家を呪咀し、民族を軽侮するマルクス主義者や、国家と個人は相反概念であるとする前世紀的迷妄を脱却し切れない形式的自由主義者や、更には、ありもせぬ世界国家を夢想して現実的国際単位としての国家の意義を無視しようとする世界主義者―これ等はニュアンスの相異こそあれ、皆アナキズムの国家観に立つ―によつて占められているのは周知の事柄ではないか。

さりとして、我々は唯国家・民族を唱えておればそれでよい、という風には單純に考えたくない。問題はその内実である。例えば右翼と謂われる人達は、恰も自分等の専売特許であるかの如く国家民族のスローガンを呼号してはいる。しかし彼等の唱える国家民族とはフアナティックな感情的盲執の対象でしかなく、又国家の名に於て同胞を排斥し国家の名に於て個人の自立を圧殺するフアツシヨ的独裁の名目であつて、凡そ真正なる国家民族の意味とは縁もゆかりもない空念仏でしかない。奇妙なことに左翼も又最近ではしきりに民族独立の旗印を担ぎ出している。ところがマルクス主義の何たるやを知る程の人ならば、彼等の言う民族独立とは実は反帝国主義——資本主義打倒の窮極目的に従属する煽動戦術のうたい文句にすぎないことを誰でも知つてゐる筈であり、これ又眞実の国家民族の意義を誣る欺瞞の一方略に外ならない。その他国家的要請を名目として党利や私利を貪る者、国民の総意にかこつけて一党一派のイデオロギーを強弁する者、之等もすべて忌むべき僭称者の群である。だからしてこのように口に唱えられ、筆に上せられてゐるからと言つて、決して安心してしまつてはならないと我々は思う。

寧ろ高遠な言葉、嚴肅な原理というものは、えてして空疎な解釈や為にする借口によつて混乱させられるものであり、それ故に眞実の意義や微妙な味わいは却つて歪曲され、見失われ勝ちなものであることを、記憶に留めておかねばなるまい。我々が諸君に呈した国民的協同連帯の基盤確立の問題も、——それは現代日本の最も根本的にして緊急な問題である——今日では完全に蔑視され見失われているか、又それ程ではないにしても、かくの如く濫用され空無化されてゐることを、我々は繰返し訴え且つ警告するものである。

しからば我々は無から有を生み出そうとするものであるのか？ 不可能を望んでゐるのであろうか？ 否、我々はそうは思わない。何故ならば冒頭にも述べたように、国民的紐帯というものは、假令混濁した世相に紛らわされて明確な意識には上せられていなくとも、本来的に運命的に儼として存在する筋道であつて、時至らば必ずや覺醒され発露されずにはいないものだからである。歴史の示すところも亦これを裏書きしてくれる。即ち悲運に見舞われ、危機の蔽頭に立たされた民族にあつては、却つて太平無事の時期には見られぬ程の強い力をもつて民族的エネルギーが爆発し燃焼するのが常である。

我々は今日の時流の表面が右の如き憂うべき傾向に覆われてゐることを臆そうとは思わない。けれども物言わざる

庶民の純朴な心情の中には、尙脈々として国民的精神、民族的気魄の底流が流れており、これこそが敗戦後十年のきびしさに堪えて辛くも秩序を保ち、道徳を支え、伝統を守り、倦まざる勤労生活の力源となつて来た事実をも見落すまいと思う。問題はこの潜みつつある流れをいかにしてかき立て、力あらしめ、確乎たるものに形成するかにあるのだ。そしてこの努力をすることこそ、諸君に課せられた意義深い課題なのだ。

我々は諸君の心奥に湧きつつあるものを信じている。諸君が素直な国民感情を基底として、この課題に応うべく知力と意力の限りをつくして研鑽されるであろうことを信じている。そしてここにこそ、今日の日本を覆う膿み爛れた表皮にメスを加え、新しい生命を産み出す可能性が望まれ得るのである。然り、純真な青年の情意と適正な学問、これを祖国に向けることが、唯一つの日本の黎明をもたらす方途なのである。

斯る意味で我々は利を以て党同する既存の政治勢力、左右のイデオロギー亡者、一身の安泰にのみ汲々たる小市民根性、総じて祖国の全体生命の教令を素直に鋭敏に感受する能力を失つてゐる者に対しては、何をか言わん哉と思つてゐる。我々の希望は、こうした利益や先入主や無関心というような夾雑物を混えない学生、青年諸君の純真性と未来性のみつながつてゐる。そしてこれは又老幼男女を問わず、等しく日本の再興をこい願う凡ゆる階層の人々の、切実な祈念にも通ずるものである。諸君の本有的な清純な資質が、同胞のこの切なる要望によつて内から点火され、精確な学問によつて確乎たる知識的裏付けを持ち、厳密な研鑽と相互批判によつて更に高次なものへと練り鍛えられ、血の通り如き情意の交流によつて豊かに肉付けられて、諸君の未来の実践に揺ぎなき信念と力を与えることとなれば、我々のささやかな祈りにも光明がもたらされることであらう。

重ねて言うが、我々は諸君に限りない関心と期待を抱いてゐる。その故にこそ止むに止まれぬ気持に衝迫されて、我々が共に置かれてゐる現状の危機の様相について卒直に所感を述べたのであるが、かかる危機は外ならぬ青年、学生たる諸君の内心からの奮起によつてのみ突破され得ることを我々は声を枯らして訴えたいのである。

合宿報告

一、合宿計画具体化の経過

九州中国に住む我々二十数名の者が、「国民文化研究会」を結成したのは今年一月であつた。我々が支那事變、大東亞戦争下に別々の高専、大学で学生々活を送りながら尙今日迄友情を保ちえたのは日本のいのちを信ずる心がそのまま友情として結ばれてきたとでもいえようか。参戦と、敗戦と、その後の苦悶の十年が経つた。それぞれの職をもちながら、我々は年に一度、戦死した友人の慰霊祭をかねて集つてはいた。五人の場合もあり、十人の場合もあつた。世界状勢の変化につれて国情も變つていつた。我々は微力ではあつても、このこと丈は我々の力で出来ると信じられる道を具体化したいと念じた。こうして漸く研究会の結成をみるに至つたのであるが、その第一の事業として計画したのは、八月の夏季休暇を利用した全九州の青年学生有志の爲の思想訓練合宿であつた。以来およそ毎月一回、鹿児島から岡山までに散在する我々会員はその中間地福岡又は熊本に於て会合を重ね、充分なる連絡と用意を繰返して、六月下旬、合宿実施要項を作成、九州各地の大学その他に左のごとき案内書を配布したのである。

全九州学生青年霧島合同合宿案内

主催 国民文化研究会

国家の運命が、青年の胸に、その一切を托していることは今更いう迄ありません。あらゆる国家は青年の力によつて興り、その無力によつて亡びました。

しかるに現代の日本においては、「若さ」という言葉は、灰色にぬりこめられた時代への、なげやりな反抗として或は刹那にすぎゆくが故に愛惜される対象として、発言されるにとどまつてゐるのではな

いでしようか。人々はその原因として、外部から様々な制約の中に生きてゆかねばならぬ学生生活の苦しみを訴え、それに一切の責を転嫁しようとしています。勿論それは否定すべくもない事実でしょう。しかし問題は決してそれ文ではない。何かがある筈です。それは何か？

思えば現代には人と人との心のつながりを断ち切ろうとする異様な一種の雰囲気がある。すべてのものを矛盾と相剋の姿の中に把え、憎悪の彼方に栄光を夢みる様な、殺伐な空気が時代の底を流れている。この様な風潮の支配する社会に、一体どうして、豊かな、しかも逞ましい若者の世界が約束され得るでしょうか。

ともあれ我々はこの暗い谷間から、この索漠とした精神の荒野から、身を起さなければいけない。その為にはどうすればいいのか？

私達はこの様な念慮から、敢えてその非力をもかえりみず、国民文化研究会を組織し、更に学生青年諸君の一人々々の胸の中に鬱積したおもいを語り合う機会をもつべく、左の如き要領によつて今回霧島の地に合宿を挙行致します。ここでは日頃膝を交えて話し合う機会の少ない、教師と学生と一般青年が一堂に会して、かくの如く混迷せる時代に生きる、青年、学生のあり方を、そして現代日本の直面せる諸問題を、心ゆく迄語りあかしたいと思ひます。僅か三泊四日という短い期間ではありますが、その間に真剣な討議が交され、若い人々の心の中に、豊かな情感の交流がなされるならば、それは何ものにも、代えがたい力となつて、時代の暗雲を切り開く道しるべとなるでありません。

諸兄の参会を心からお待ちしております。

一、期 日 八月十九日正午より——八月二十二日午後一時まで（開始時刻は厳守のこと）

一、場 所 鹿児島県始良郡霧島村霧島研修館（日豊本線霧島神宮駅下車、バス十五分）

一、参加者 九州の各大学、高校の教師、学生、一般青年有志、約百名の予定

一、研究テーマ 「現代日本の直面せる諸問題」

- (イ) 「社会主義革命」は我々に希望を約束するか？ ——正しい社会改革の用途は——
(ロ) 現代日本人の精神的支柱は何に求むべきか？

合宿報告

一、携帶品 参加証、筆記具類、洗面具 米一升五合(十食分)

一、費用 (イ) 副食費四百円(但し主食は、持参しない場合に限り現地において現金にて換算)

(ロ) テキスト代として百円前後徴収することがある

但し次のものは会の負担とする

(イ) 宿泊費 全額 (ロ) 学校或は郷里の中、合宿地に近い駅から霧島神宮迄の三等片道旅費

※急行料金をふくまず ※学生の場合は学生割引額の片道分とする

一、申込要領 別紙に所要事項記入捺印の上、食費四百円をそめて申込むこと

申込み受付と同時に折返し参加証を送付する

(イ) 申込期間 七月十五日迄

(ロ) 申込先 熊本市池田町九九九 国民文化研究会(振替熊本三一九九)

附記 遠隔地の為前日よりの宿泊を希望される方はその旨申込書に御記入下さい

全九州学生青年霧島合同合宿申込書

氏名	ふりがな	年齢	住所
学校名	大学	学部	科
職業名		出身学校	前日より宿泊希望の有無
乗車区間	線	駅より	有 無
		片道料金	
合宿参加の動機及び合宿に関する希望事項(出来るだけ御記入下さい)			—裏面に—
		円	

合宿に参加致したいと思しますので会費四百円を添えて申し込みます

昭和三十一年 月 日

氏名

国民文化研究会 御 中

これに対する応募者は六十五名を以て募集を打切つたが、申込書の裏面に夫々参加動機や希望事項を記入する欄を設けたところ、そこには次に示す二三の例に見られるように切實な願いに答えてくれない学校生活への不満と、この合宿に対する明るい希望を寄せた文章が多く記されて、我々はその使命の重大さに、今更のように襟を正さしめられたのであつた。

「我々は今どのような生活環境の中に生きているか、そしてどのような事象が我々の回りに毎日起つているか、それは一体どのような影響を我々に与えるのか、ということに対して我々は常に目を向けなければいけないと思う。しかし暴力国会や、社会主義思想の流入等に対して目を向けるだけでは何にもならない。それにどのように対処して行くかとゆうことが重要なのである。しかし私にはそれがよくわからない。私は以前からこういうことで先輩と話し合つて見たかつたし、また話を聞きたいと思つていた。そして今度は又とない絶好の機会だと思つて参加したい。」

「良き時期に若き我々青年の為に、又我々学生生活の為に与えられたこの機会に際して、日常の苦しみや希望を皆で心ゆくまで話し合い、お互いに発展的な心の持ち主となる事を願つて、参加したいと思ひます。」

「過去三ヶ年を顧るとき私は夏休中の期間をすべてアルバイトに全力を注ぎました。しかし愈々来年大学を終える事を考えます時に楽しかるべき思い出として、又数少いかような機会において同世代に生きる青年の共通の悩みを心ゆくまで話し合つてみたいです。」

だが何といつても合宿を計画し実施する為に、第一必要なものは資金であつた。我々は九州中国各地の有識者に賛助を求め、あるいは、全国に散在している、我々会員の戦前からの友人知己に援助を請うたのであるが、その結果予算額を若干上廻るほどの御賛助をいただいた事を心から感謝するものである。

二、合宿参加者の構成

招聘講師 五名
来 賓 十名

合宿参加者の構成

合宿報告

会員（講師）

十六名

一般学生青年

六十一名

地域別内訳……………鹿兒島二十七、福岡十五、久留米三、宮崎二、熊本一

長崎一、大分一、松山二、名古屋一、東京八

合計

九十二名

三、合宿の運営上の特色

- (イ) 三十年代の社会人である会員が主に講師として立ち、二十年代の学生に講議を行うこと。即ち三十年代から二十年代への訴えという性格を強くもつていること
- (ロ) 教える者と教わる者という関係以外に、学生から多くのものを学びとることを合宿の主要目的の一つとすること
- (ハ) 参加青年学生を、十五、六名を単位に班別に編成（地域、学校に関らず任意に配分）会員が二名宛世話人として討論を主宰し、参加青年学生の将来にかけての友人たるべき努力をおしまぬこと
- (ニ) 毎夜学生就床後、会員はその日の学生指導の体験を各自に課せられた問題として真剣に反省討論、翌日の行事でその欠陥を補うべく万全の配慮を行うこと

四、合宿経過報告

三日前、大規模な九号台風が九州西岸をかすめて北上し、その間は国鉄ダイヤがめちやめちやに混乱するなど私共を予期せぬ不安に陥れたが、幸いにも八月十九日は朝からの快晴にめぐまれた。合宿地は高千穂峯の麓、霧島神宮参道の入口にたつ、神殿造平屋建の「研修館」である。海拔四百余メートル、溪流と老杉を眼下に見て暑さをしらない。

私共二十数人が、自らの微力を省みず戦後はじめてこの合宿を計画し準備したのは、今日程青年学生の奮起と、祖国の運命に対するすなおな実感にめざめることを要求されている時代はなく、しかもその為になされること余りにも

少い現状を憂うるあまりであつた。

七月末から始つて既に重大な局面にたたされてゐる日ソ交渉、スエズの国有化を宣言したエジプトをめぐる重苦しい空気が、過ぐる日の参議院選挙における左翼勢力の進出、憲法改正企画の挫折等々、時代の苦難を、漠然とあるいは尖锐に予感しながら、近くからあるいは長途の旅を冒して、参加学生が登山客で混雑したバスの中から一団一団とおりてくる。ダイヤ混乱の影響は免がれず、予定を十分過ぎて午後一時半、合宿は瀬上安正、川井修治両氏の挨拶を以て始められた。これらは、本合宿を一貫する情意と、志された目標と、更に合宿運営の心構へを明らかにしたものであつたので、その概要を示しておく。

「皆さんは九州の各地より台風の余波の中をついて集まつて来られたのでありますが、非常に大変な事だつたと存じます。こうして同時代に生きる青年達が、合宿の大目的として掲げた『日本再建の方途』という如き問題について、徹底的に論じ合う機会をもつという事は全く稀有のことと思われれます。

思えば現代日本の教育には『祖国日本』を口にするを恥じ、国を愛することさえ恥じるような雰囲気を感じられるのであります。この様な時代に教育を受けて居られる学生青年の方々に、特に「祖国愛」という事について徹底的に考へて載きたいと思ひまして、有志の先生方と、此の合宿を計画致しました次第であります。

僅かな期間ではありますが、此の貴重な時間に、同時代の青年学生のもも重大な問題について徹底的に話し合ひをして載き度い。之が私共合宿を開催致した主旨であります。

開会の挨拶を申し上げますに当り、一寸一言私の感想を述べさせて載きます。私が終戦後最も心を打たれた歌を数首紹介いたします。

かくばかりみにくき国となりたれば捧げし人のただに惜しまる。
(前橋市 安藤てる子)

その骨は拾ふすべなしシツタン河の砂の一握を骨にするてふ(遺骨帰還)

夜もすがら灯をかかげつとこしへの名残かなしみ君とひと夜を(納骨)
(以上二首 岡山県 大饗蓮華)

誇らかに吾が母ぞとぞ友に告ぐる吾子よ嬉しもこの母をすら
(奈良市 潮井ゆふ)

此等の歌は、戦争未亡人の歌集「此の果てに君ある如く」の中の数首であります。自分の愛する凡てのものを捧

げて尙悔いない国、かかる国の来らんことをこそ祈り、最愛の夫をも、又最愛の子等をも、捧げて来た母や妻の嘆きの歌であります。

だまされていた等という劣弱な精神ではありません。日本女性の伝統的精神の高き調べこそ、今の日本の愚味な精神の横行する中に、その悲しい、然し何者をも恐れず、高い英雄的心緒を歌い上げて余す所ないものと思います。

学者や先生方は、甚だ勿体ぶつた考えを故意に複雑化して述べて居られますが、その複雑なものを純一なものに統一する生命力がありません。哲学、或は政治学、経済学と申しましても、かくの如く、徹底的に専門分化してそれを統一する生命力を亡くした時は、百万言を費しても、無意味というよりむしろ有害なものとなり、他の人々をも自己の不信不安へと、かりたてる丈であります。しかも一般の人々が大多数之に雷同して居るのが、今の日本の姿であり、誠に憂うべき現象といふべきであります。

立退きを強くも言はる庭先の紅き鶏頭亡夫が植えしもの

王蘭の散るに思へば君の命つなぎがたかるものにありしか

この果てに君ある如く思はれて春の渚にしばしたたずむ

(栃木県 田中とし子)

(香川県 土屋 緑)

(宮城県 円野まみ子)

一輪の花がほろりと散る、その散る花にも偲はるるは夫の生命の果つる日のことであるという。何と云うもの悲しさ、しかも涙も涸れ果つるまで泣き晴らしつてもその愛しき夫の今はのきはをよみ上げて行く強靱な心、そしてつき上げて来る一切の衝迫をつつむ豊かな人間性がここに深々として漂うのを感じしめられます。だが之等の精神の深さは、今日の思想的雰囲気からは到底理解しがたいものになつて居るのではありますまいか。

私は思います。此等名も無き女性こそ、此の迷い、分裂する日本の土台を支えて居るのであると。かく深く高き伝統的精神に従つて、青年学生の皆様が世界史の現段階に日本の運命を拓いて載きたいと思ひます。

御承知の様に、幕末において、此の鹿児島も、山口県の下関も、英米仏蘭四国連合艦隊等で、徹底的に砲撃された。之等を防ぐに何等の武力をも持ち合せなかつた当時の青年達は如何にして立ち上つたか。他のアジアの国々が全て植民地となり果てたにも拘らず、遂に独立を護り通してその運命を開拓したのは、あの維新の青年達であつたのであります。歴史の必然などという如きものにより日本の運命は護れません。

皆様が此の歴史のありのままの姿を学び取つて、当時に劣らず困難な内外の情勢の中で、切りひらくべき祖国の道は一体何か、豊かな青年の情意を以て真剣に論じ合い、語りあかしていただきたいと切にお願いして開会の言葉と致します。」(瀬上安正)

「この合宿は何よりもお互いが心から語り合おうとする場にはかならない。ほんとうに生々とした、自由な魂だけが心から語り、また心から耳かたむけうることを我々は信じている。我々は誤つた概念と独断の緊縛から解放されたねばならない。この合宿がそうした機縁になればと思つて、私共は次の二つのテーマをえらんだ。

「社会主義革命は我々に希望を約束するか？」

「現代日本人の精神的支柱は何に求むべきか？」

前のテーマ「社会主義革命」については今日の社会・人文科学と、我々自身の運命とに直面した問題として、学生青年の関心を集めているテーマだと思ふ。その意味でそれはおのづから後者の問題に関係するであろう。ではこれらを中心としてこの合宿はどの様に運営されようとするのか。——三つの提言がある。

(一) 世代・職員・学校の別をこえて我々はひとしく青年である。今日日本を重大な精神的分裂に陥らしめているこの差別は断じて撤去されねばならぬ。これをふみこえるには大胆に自己を表白する以外にない。

(二) 学術的客観性を維持しつつ真実に迫つてゆこう。低俗談義や感情的興奮はさけない。もとより特定のイデオロギ―に偏する如きは我々のとるところではない。

(三) 青年らしい情意を以て積極的交流の世界を開いてゆこう。そこに友情は生れ共感の結びがもえ上るのである。う。これこそ国民同胞生活のヒナ型に他ならぬ。」(川井修治)

挨拶終了後、全員の自己紹介にうつる。不可思議の奇縁に結ばれて百人に近い青年がここに集つた。何かを求めて集つたのである。学内での、あるいは職場での不満と共に、もつと高い純粋なものへの青年らしい希求をすべての参加者がそれぞれの立場にふさわしい言葉で語つてくれる。片道旅費の支給で、九州南端への旅行をたのしもうと思つて来た等、かざらない発言も出て来て、なごやかな微笑と、全員の切実な期待がみなぎるうちに合宿は開幕されたのであつた。

ここで全期間の主要行事と日程を記しておく。

第一日

午後 開会挨拶——瀬上安正、川井修治 全員自己紹介、学生研究発表

1 鹿兒島大学々生R・S「社会主義經濟の生産能率及び經濟的自由についての省察」

2 鹿兒島大学々生K・S「現代の危機の一考察」

夜 長崎大学講師吉田靖彦「マルクス資本主義崩壊必然論について」

鹿兒島大学助教川井修治「平和革命論の検討」

班別討論

第二日

午前 笠岡商業高校教諭名越二荒之助「共產治下国民生活の実態」

外交評論家広田洋二先生「世界史の發展——冷い戦争と日本外交」

午後 班別討論

熊本大学講師森祐三「昭和史をめぐって」

東京電機大学附属高校教諭渡辺明先生「日米開戦の真相」

第三日

午前 福岡大学教授石村暢五郎「經濟学の考え方と日本經濟への適用及政策の方向」

青山学院大学教授日下藤吾先生「スターリン批判を中心に」

※經濟学者難波田春夫氏に講義を依頼し快諾をいただいていたところ、急な御事情の為に御出席叶わず、

同氏より日下先生を御紹介していたいた。

午後 若松高校教諭山田輝彦「社会主義文學理論の検討」

修猷館高校教諭小柳陽太郎「民族的抒情の回復を阻むもの」

亜細亜大学教授夜久正雄先生「抒情詩論」

合 宿 日 程 一 覽

合宿經過報告

二十三日	二十二日	二十日	十九日	
起床 洗面 清掃 朝食	起床 洗面 清掃 朝食 合唱指導	起床 洗面 清掃 朝食 合唱指導		前 6.30
(政治) 小田村寅二郎氏	(経済) 石 村	(国際状勢) 名 越 (♫)		— 8.00
地域学校別 懇 談	(♫) 日下藤吾氏	広田洋二氏		— 9.00
昼 食	質疑 応答	質疑 応答	受 付	— 10.00
整理 写真撮影	昼 食	昼 食	整 理 昼 食	— 11.00
解 散	(文学) 山 田	班 別 討 論	挨 拶	— 12.00
	(♫) 小 柳		自 己 紹 介	— 1.00
	(♫) 夜久正雄氏		学 生 研 究 発 表	— 2.00
	入 浴 夕 食 散 歩	入 浴 夕 食 散 歩	入 浴 夕 食 散 歩	— 3.00
	班 別 討 論	(歴史) 森	(経済) 吉 田	— 4.00
	全 員 コ ン パ	(♫) 渡 辺 明 氏	(政治) 川 井	— 5.00
	学 生 就 床 会 員 討 論	班 別 討 論	班 別 討 論	— 6.00
		学 生 就 床 会 員 討 論	学 生 就 床 会 員 討 論	— 7.00
				— 8.00
				— 9.00
				— 10.00
				— 10.30

合宿報告

夜 班別討論

全員コンバ

第四日

午前 小田村寅三郎先生「日本政治の再建のために」

地域別学校別懇談会

午後 閉会式

各講義の内容については、夫々別掲の要旨を御参照いただきたいが、それを主軸とし、班別自由討論を歯車として運営された合宿が、どの様に経過したか。主としてその内面的経過を中心として次に記してみたい。

第一日 なごやかな自己紹介のあと、学生二君の研究発表を素材としての討議は、活潑ではあつたが時間の都合もあつて中断されたのは遺憾であつた。つづいて夜、吉田講師は、所謂資本主義崩壊必然論に対し、事実を以て検証するに堪えないものと論じ、川井講師は、同じ革命という言葉を用いながらフルシチョフの「平和革命」、労働党、社会党左派のそれ、並びに社会党右派の「革命」という三者においては、「革命」ということばがそれぞれに異つたニュアンスをもつて使われているかを鋭く解明して、「革命」ではなく「改革」をこそ意志することが正しい国民の感覚であると論断した。

学生諸君は或はもつと具体的な政治方策を期待していたかもしれない。しかし、その前に我々が果すべきものはこの様な意味における正しい政治感覚の確保である筈だ。川井講師の講義は本合宿のテーマに直接ふれた解明であつたが、これが今日の政治的思想的混乱の中心課題として聴講者の心にふれるには未だある程度の距離があつたかもしれない。

その夜の班別討論は、我々は一体何う考え、何う生きたいのであるか、それらが卒直にあるいはためらい勝ちに語られつつ、合宿第一日は幕を閉じたのである。だがここに語られること、なげかけられる疑問、あるいはひとり屈する思い、これらはすべての日本の現状の縮図であると言えよう。類型を求める意味でなく、顕著に耳にふれた

二、三のあり様を摘記してみよう。

(一) 「日本はどうなつてゆくのだらう。卒業と就職の問題がある。かりに就職しえたとして安態であろうか。日頃はふかく考えもしないが、いろいろ重大な問題がある筈なのに、学校ではこれらの問題をきいたり、話したりする機会がない。」

——発見である。人生に対する関心と驚異は自分が直接ふれている。経験から起つてくる。かざらない素朴な疑問の中にこそ真実がある。しかしながらここにのべられた所見は、学生として学ぶ學問と、社会に出てからの生活とが分裂せしめられた国民生活のうちに深くその根因を蔵するのである。自己一人の不滿としてでなく、こうした学生生活そのものが抑々おかしいと気付かねばならぬ。

(二) 「様々の言論が横行している。然し大体のところ日本のとるべき道は、外交的には中立政策、政治経済的には福祉国家の建設。」

——表面にあらわれた建設的方向への探求のかけに、今日の言論のどこからも文句の出様もない方向を求めようとする安易な動機が潜んでいるのではあるまいか。かかる動機は未来の構図を一に知的認識の上のみ求めようとすることに帰着する。日本の将来を如何に考えたらいのか、諸説の議論がある。だがそれらに対する批判と判断の如何は、一に祖先と我々子孫を含める全国民的運命にかかわつていざるを得ない。全国民的運命——祖国日本——と言おう——そこには祖先からの無量の願いがこもつていゝ。その願いを無視して、一片の論理を以て世界を改造しようとする誤りに一刻も早くめざめねばならぬ。祖国日本の運命を自己の運命とする情意的緊張のうちに日本の将来を熟思することこそが、學問をするものに要求されるかけがえのない使命ではあるまいか。

(三) 「資本主義制度下の矛盾のゆきづまりは避くべくもない。放つておいても崩壊し、やがて社会主義制度に席をゆずるのは必然の成行きではないか。」

——革命を積極的に意欲しない迄も、これは今日の根強い常識である。しかしながら現代の社会にはこの二つの抽象された方向しか存在を許されないであろうか。そこには制度の改変に一切の希望を托そうとする硬直した人生観がある。あるいは論理的見透しをたてて自ら満足と安心を得ようとして、分析すべくもない複雑悲痛の現

実を愚劣な鑄型にはめこもうとする劣弱性がある。

四 勿論中には「青年の心の内奥にやどる祖国愛を信ずる。互いによびかけ結ばれて、そこに全青年の連繋を得たい。祖国再興の為の学問も方途もそこから芽生えるのではないか。」——と告白する学生もいた。

ともあれ純真な意欲に燃え、ゆたかな人間観をのぞむ若人の裡にこそ、同胞全体が現在又将来にわたつて直面しなければならぬ艱難辛苦に堪えて、よくその運命を開拓しうる活力を宿すものであろうか。祖国愛という。それは素朴な信仰である。自然の人情である。同時に理性を以て正しく依拠すべき真理である。その為にかこそ祖国の精神的遺産が研究されねばならない。合宿後半の講義がその方途を明示するたろう。

第二日も晴。この合宿地は自然の環境にめぐまれていた。ここから、バスの通う登山道路を歩いて五分のところ鄙びた温泉浴場がある。散策がてらの昨夕の湯浴みは旅の疲れをいやしたであろうか。終日のひぐらしと高地の爽風。この日の朝は、宿舎の中庭で朝露に足をぬらし、「野ばら」と「オールド・ブラック・ジョオ」を全員、宮原貴久先生の指導で合唱した。

つづく朝の講義では名越講師は、ソ連抑留五年間の生活体験に基づく、健康で戦闘的な諷刺を交えつつ、正確な事実指摘を以て、ソ連政権存立の根拠を衝き、広田講師は世界史的視野のうちに、今日の日本がおかれている現状の分析を通じてその自立方策を説かれた。敗戦後の極めて困難な条件の中で日本が小国と雖も国威を失墜することなく、その自立意志を貫かねばならなかつたにも関わらず、事毎に外交上の失敗を重ねたのは何故であつたか。国民として国家として、その自立の原理を固く把持することなき国民精神の弛緩！その広い視野から説き起された精密な現状分析と、それを貫く講師の憂国の至情と、沈痛の気魄に一同は深重の感銘を与えられたのである。

徐々に、何か互いに語りあいたい一つの気分をかもし出したこの日、予定していたプランを全く変更して午後全時間を班別フリートーキングに振りむけ、今迄の各講師の講義を中心とした問題、そこからのおのずからふれてくる生活と人生観に関する問題等について、室内で輪をつくり、あるいは戸外の樹かげや、霧島神宮境内の杉の木の間などそれぞれ場所を求めて語りつつづけることとした。

資本主義がどう、社会主義がどうといった様なイデオロギーを中心としての議論は、或意味で心を勞せずにもものいうことも出来る。しかしながら対立を予想して両説の可否を論じ、そのいずれを選ぶかを決定したとしてもそれは実際に人を動かす生きた思想とはならない。愚直であろうとも、素朴であろうとも、直接自分の経験している世界にたつて真実自分の希求すること、感ずること、思うことを率直に語り、人の心によびかけて、その反応、共感をたしかめた時、はじめてそのことは生きて己に返り、人と人をつなぐ思想となるであろう。

この日の討論によつて生きた思想とは果して何であるか。人を動かす思想はどうして生れるかということがおぼろげながら人々の胸に映りはじめたのである。年令のへだたりや、かつて見知ることもなかつたへだたりはありながら、徐々に心がほぐれ、少くとも現実の日本——殊にわれわれ自身の生き方感じ方が人間として、また国民として屈辱的な破局にふさわしいものではあるまいかとの憂慮を共にしえたとすれば、それはこの様に一人々々が安易にはなく、心を勞しつつ咄々と語つたことばを通じてであつた。希望はどこにあるのか。日本人で真に平和を希求した歴史上の人格はあつたのか、という切実な疑問の如きは求道途上の重大な機縁ともなるべき問題で心をうたれたのであるが、同時にこの様な疑問に示される現代歴史学の愚昧と、誤謬をおそろしい迄に痛感させられたのであつた。

夕刻小雨。夜の講義。森講師は昭和史をめぐる三つの代表的史論の解剖。渡辺講師は、大東亜戦争を開始した責任は、ルーズベルトを中心とするアメリカ側の日本抹殺意志にあつたことを、詳細な史料を駆使して立証された。国際関係の言語を絶する苛烈さを忘れて、「日本の侵略意志による日本の戦争開始」という押しつけられたテーゼを以て史実を覆い、果ては日本人の手による日本の否定を来らしめつつあるのは実に今日の問題である。祖国の歴史地理教育を禁止した占領政策と、軽薄に戦争非協力を宣明する文教人の多数によつて、痛ましくも今日の歴史の断層は形成されたと思ぜられる。提起された問題と分析は、最も身近な世論と意見と反省に対する痛烈な批判であつた。質疑は活潑ならざるはなく、聴講者の疑問は各自の胸中に湧出した様であつた。「アメリカの戦争挑発はわかつた。しかし日本が悪い悪いといわれている。どこかが間違つていたに違いない。最も核心となる問題はどこにひそんでいるのか？どこが間違つていたのか？」

或学生の提起したこの様な真剣な疑問をめぐつて、私共本部長、各班世話人はその控室で講師と共に深夜をすぎる

のも忘れて論議を重ねた。支那事變、滿洲事變、対支二十一ヶ条々約等その歴史的条件を究明すれば、もとより一方的侵略と概括されうべくもないのであるが、問題は敗戦という事態によつて、それ迄に日本が獲得した領土と權益の一切を罪惡視することは、果して伸びゆく民族の正常な考えであらうか。たしかに戦争に敗れたことについて、我々は深重な罪を意識するのであるが、それは世界に向つてではなく、一に多くの犠牲と艱難を経、列国に伍して独立を維持し來つた我々の祖先にこそ、その罪を謝するのが、我々がとるべき正しい反省と懺悔のあり方ではあるまいか。人々のねしずまつたその夜我々の討議は果てることを知らなかつた。

三日目は雨。石村講師は、マルクシズム経済学の根柢を貫ぬく矛盾概念、实体概念を哲學的に批判し、所謂資本主義とは、今日では経済政策が市場機構の上に作用しつつかある一種の計画経済を指向しつつかあるものであるから、日本経済を殊に困難ならしめておる原因としての、絶対過剰人口と、資源の退化現象に対する正しい政策を考えることなぐして、マルクシスト流の如く徒らに革命市場機構の廢絶を以て根源的救済策とする如きは、経済そのものの破壊に終るであろうと鋭くかつ懇切に解明する。日下講師は、最近のスターリン批判で強調された集団指導と「レーニンに還れ」は夫々独裁と權威の支持強化に變らないこと、更にはマルクスの唯物史觀とそこから導かれた理想像としての共産社会が人間否定、或は極めて淺薄な人間觀をその源流とすることを戦鬪的熱情と豊富な知識を以て説かれた。兩講師に対しては職業選択の自由あるいは社会主義生産競争の問題など活潑な質問がなされたが、それは夕食前後の時間を利用して日下講師を囲む座談的討議にひきつがれた。

我々は社会主義を中心とする諸問題を今日に生きておる我々自身の思想問題として把えてきた。我々は更に、生きておることの本質にふれるべき芸術について、日本人として生きておること自体について卒直に考えてみなければならぬ。午後の講義にうつる。

山田講師は、社会主義文学理論を概観して、その索漠たる規範意識、就中、無葛藤性理論の如きわらうべき現実歪曲を衝く。小柳講師は、歴史時間の流れを個人、民族の複雑な緊張弛緩の体験の中に把えるべきものであることを

指摘して、歴史に対する知的認識の高度化は逆に古典における統一された生命の美しさがそのままの姿でうけいられることをさまたげている事実、そこに民族の詩情の水源が涸渇し、一切の豊かな詩精神を阻む根源があると指摘批評した。

つづいて夜久講師。いつの時代にも存する悲劇的な政治抗争にもかかわらず、我が国が民族の統一と調和を守りえたのはその連帯感情であり、日本の抒情詩の伝統は純粹な感情の表白として、外からの統一でなく内からの統一をなした事実をものがたつていと説かれつつ、万葉集のうた、戦国武将のうた、殊に今上天皇の御製鑑賞のうち、一つの精神を持続し来つた抒情詩人の系譜とその意味を明らかにされたのであつた。生命の本能は「守る」ということである。ところが「我々は一体何か守らねばならぬものがあるのか」という愚問さえ今の時代にはあるのだ。講師の平明明晰なことばの展開のうちに感じえられた一すじの祈り、日本のことばでうたわれた日本のいのちをうけつぎまもりたいとの切なるいのりは、合宿参加員の一人一人の胸にしみいり消しがたく刻みこまれたと信じられるのである。

敵しいが明るい、救われた様な雰囲気は、夜の全員コンパのなごやかな歓喜にもちこまれた。鹿兒島名物の焼酎を配して、校歌や民謡、小学唱歌やかくし芸等、にぎやかにうたいどなつた。中でも名越講師の社会主義的リアリズムの演説と称する解説付北鮮歌謡とその舞踊は傑作の一つであつた様だ。心の底からほえる様なうたと笑いを共にすることは、若者としての力強い自己肯定を導く。二日前迄は一度も話したことのない学生と学生が目を交すだけですべてに心うちとけ、或は乱舞合唱し、或は夜の更けるのも忘れて涼々として響く溪流の音に耳をかたむけながら明日への希望を、あたかも百年の旧知のごとく語り合つている姿は消えがたい印象として我々の胸に刻まれた。

最終日。雨はれて快晴。小田村講師の最後の講義をきく。現代の低迷と混乱の要因は、スピリット意志の欠落にある。これを全講の主題として、合宿中にとりあげられた一切の疑問に応えんとされた総合的論議であつた。氾濫している各様の主義、その何れを選ぼうとも、意志独立不羈の精神がなければ何らの建設も出来ないだろう。——卒業——就職——サラリーマン、のコースを空想する程度の学生々活とは、社会全体の中で一体何であるのか。問題は

「學問」への意志であり「就職」への意志である。意志なき学生々活のみじめさに目覚めなければならぬ。更に講師は程度の如何はともあれ全員の胸中にわだかまる政治に対する不信に応うべく、保守党の憲法改正動機に存する、實質的な国民的統一を忘れた、思い上りを衝いて、日本が本来の面目をとりもどした時の政治形態は如何にあるべきかその政治哲学に及ぶ。詳しくは別掲要旨の熟読を請う次第であるが、大東亜戦争必敗の根因は、所謂天皇制の長所即ちスピリットとしての忠誠を政治家、軍人悉く自らふみやぶつたことにあつたと痛論し、「群臣共ニ信アルトキハ何事カ成ラザラン、群臣信ナケレバ万事悉ク敗ル」（聖徳太子憲法）の「信」こそ今日の問題でもあると論じられた。問題を「天皇制」にしぼつた時、質疑は百出したのであつたが、実際に日本民族の統一を持続し來つた一つの政体を否定して顧みないことは冷靜の學問の態度であるか。各国の政体と比較研究したのちに、別の形でその長所を復活せしめる日がやがて來ることを信ずると諄々と説かれたのであつた。

終つて学校別地域別の懇談會。昼食後、国家斉唱を以て閉會としたのである。

思えば今日の学生は戦争の唯中の、極端な不信と偏向の時代に義務教育をうけ、戦後の敗残と欠乏と虚妄の時代に成長し來つた若者である。かかる時代を來らしめたその事に対して、彼らに何の責任があろう。敗戦による悲痛な歴史の断絶を誇らしく解放と称し、亡びざる祖国のいのちへの渴仰を狂信的という一語でふみにじつて、革命に向つて狂奔するマルクシストと、その援護射撃をしつつかある多数の無思慮なる學者、文化人の教導に、青年が翻弄されるがまにまに放置されてよいものであるうか。しかしながらこの様な時代の渦中にあつて生きているのは我々自身であり、青年学生諸君自身である。時代の流れのままに限られた生活圏の中で、隣人更には広く同胞の運命とは無關係に適当來生きすることは出来る。だが所詮それは思想と意志の欠落者であつて生きて甲斐のない人でしかあるまい。そうでなく真に自らの運命を思つて、それを包む國家の運命を深思し、又われわれの祖先が百練千磨の苦闘の中に自立を守つた清新な民族精神に直接にふれて、そこに自らを解放しようとするならば——かく欲することを生活しながら思うすべてのことに貫く以外にはないのである。かくかくすべきたということばに力づけられることはある。しかしそれを覚え知つてもその人の力にはならない。力とは信だ。心からこう信ずるといふ力が一人々々の胸に萌すことを祈りながら、この合宿は行われたのだともいえる。かくしてその「信」は遂には「一人へ自ラ救へ」——一人一人の

勇猛心にこそまたねばならぬのである。

我々は別れてゆく。参加学生はそれぞれの地域で真摯な共同研究をつづけてゆくであろう。或いは下宿を共にして共同生活を営むものもある。友人の短所を互いに許しながら、自立日本の運命を互いに凝視しながら、力を協せて共同研究にしたがうだろう。しかし又必ずやそこでは挫けぬ意志を堅持することのいかに難きかを思うであろう。だが決してそこで思い屈すべきではない。何故ならばその危機感こそが国民的統一の難さそのものの姿だからである。国民的統一それは計画と弾圧と改宗の強制を以て外から迫る統一ではない。それは日本のいのちを破壊しようとする内外の力にうちかち、それを共に守ろうと意志する力の中にはじめてよみがえるものなのだ。

けれども人の心はゆらいでやまぬ、信ずることは次の瞬間に訪れる不信を暗示する。さればこのようなありのままの姿に立つて、己を屈しておもねらず、威張らず、国民の一人々々がお互に心を通わそうと念ずることは正に険難の道程である。しかしそこには生活と思想の力の源泉を仰ぐよろこびがある。こよなきやすらぎの世界がある。祖国のいのちの亡びざらんことを信じてすすむその道は、我々の祖先のあゆんだ道であり、世界の各国民が歩みつつある道である。これは天下の大道である。我々もこの道をゆく、諸君もまっすぐに進み給え！

別れる前に戸外で記念写真をとる。秋を思わず晴れた日に、莞爾と笑いつつ高千穂、韓国の登山におもむくものもあつた。下山帰郷の途につくものもあつた。

(室 辺 正 久 記)

合宿感想録

合宿をかえりみて

鹿兒島大学

K

合宿後一月半を経た今日、静に目を閉じて回顧してみると、あの秀峯高千穂の下で朝の太鼓に始まつた毎日のこと、諸先生の熱烈な講義、夜を徹して語つた友等の顔……それから一切がまざまざと脳裏に再現されてくる。ともあれよかつたと思う。かけがえない機会であつたと思う。マンネリズムに墮した日常の学生々活では体験しなかつた充実した日日であつたと思う。そしてその心の張りを、逆に今度は我々の今後の学生々活の中に、延いては國家生活全体の中に生かして行かねばならないと思う。

いろいろ沢山の講義を聴いた。政治、經濟、外交から歴史、文學に至るまで。そしてそれぞれの印象と成果を私には与えてくれた。間を措いてもそれらが皆、我々が学校で聴く概念的な抽象的な講義とはちがつて、明確な立場から発せられた鮮烈な所論であつたという点に、大きな刺激を受けた。——勿論私の専攻や関心の方向が限られていたので、全部を理解しつくしたとは言えないのであるが——それに概して我々が通常学校の研究会や討論会で発する言葉が、実に概念的な表面的な知識のやりとりすぎなかつたことが、改めて痛感された。大がいが他人の知識の借り物であり、その解釈の上に解釈を重ねて行くだけの空しい論理の遊戯であつたことをつくづく反省させられた。合宿における我々の討論も最初の頃は、そのような傾向の延長たるを免れ得なかつたが、世話人の方の懇切な導きによつ

て、次第にお互の心の核心に触れ合う兆しが現われて来たように思う。私自身もそのような反省に促われて、実の如きようにならぬに発言することができなかつたのであるが、終りの頃には何かそうした卑少な自己のあるがままをさらけ出し、私の心の最後の叫びである「皆手を取り合つて進もうではないか、同じ日本の青年として」という意味のことを絶叫したい気持ちに駆られた程であつた。しかし私の躊躇からそれを為し得なかつたことが、今にして悔まれるのである。

ともあれ生きた思想、切実な体験に発する言葉を自分のものにしよう、というのが同じく参加した私の友人達と交々話した結語であつた。そうした点では広田、石村、日下寺諸先生の話が、判断の広汎な且具体的な資料をあたえてくれる面では役立つたが、特に小柳、夜久、小田村等諸先生の話には最も強い感銘をうけた。それが何か、ということとはできないけれども、とも角私の祖国の精神伝統に対する愛着と憧憬を強めてくれたことだけは確かである。そしてそのような情懷の中からこそ真に生きた思想が形成されると思うのである。日本人としての精神的支柱を何に求めるか、という合宿のテーマの解答は、抽象された国民性や社会的条件の分析からではなくて、この様な憶念と、それに発する鋭しい奮闘の生活の中からこそ、生れ出るものであらう。

更に我々は合宿をして単に霧島だけで終らしめてはならないと思う。これは私達の友人も同じ思いである。合宿後、参加した数人の友人の中に期せずしてそのような声があり、現在何とかしてこの精神交流を永續させようとする策をこうじている。そして今我々の祖先の精神的遺産である古典のあるものについて、共同研究を行ひ会を企画しつつある。この試みが、私合宿において最も痛感させられた祖国護持の信をいよいよ堅固ならしめ、現代の混沌した思想に対抗しつつ真に生きる道を求めてゆく力添えとなることを確信している。

最後に、この会の同人諸先生に心からなる感謝を捧げ、会の今後の発展を祈る次第である。

合宿所感

久留米大学

T

本会議に到着と同時に発病し、その後二日間病床に伏して折角の講義も聞けず残念でしたが、その間小川先生に手厚く看護していただき、感謝此の上もありません。

当地に来るまで博多の大丸で一ヶ月間バイトをし、毎日の疲れが出て、一時でも速く休みたいという様な空白な生活をしましたので、本会場に来聴するに必要な研究材料を持ち合わせず、又講義内容にどの様な課題があるか、又誰がなされるのか、暗中模索の様な状態で、調べ様にも調べられなかつたのでした。

バイトでの経験ですが、多くの社会人は毎日の生活に追い廻わされ、読書はおろか新聞でも見てみようとする努力すらも減退して、ただ生活に疲れ切つていく様に思われした。それに反し小生の如きは、霧島の山麓に各講師及主催者側の親切なもてなしに際し、感謝此の上もない思いがしました。

未熟な者は何か外部から刺戟されると、それによつて一つの方向と進路が開けると申しますが、小生の場合ちようどそれに当る様です。此の会のふん囲気を忘れることなく、これをきつかけとして自分のちようどやりかけの仕事をもう一度検討し、じっくり熟考したく思う、その感激で一杯であります。それで小生に此の様な進路を向けていただいたことだけでも、有難義な合宿だつたと思ひます。

最後に懇親会での男子志を立てての詩吟を思い起し、主催者の皆様に御多幸あらんことを祈ります。

合宿感想録

決意

早稲田大学

O

霧島神宮の袖域で、深山の靈氣を身にひしひしと感じつつ、八十余名の九州健児と共に、互いに心の底から語りあつた日日を今振り返つてみる時、はるばる東京から出掛けて行つた肉体的な疲労や困苦は霧散し、心の中は、新しい意欲と生命力で満ち溢れる。

規律ある団体生活、真剣な討議、諸講師の心からにじみ出る様な講話、楽しかつたコンパ等々思い出がこんこんと泉の如く湧いてくる。僅か三泊四日の短い期間ではあつたが、あたかも十年の知己の如き、先輩、友人が得られたことは何にもかえがたい喜びと刺戟であつた。難を言うならば、全体としてもう一層の盛り上りがほしかつたと思う。

合宿における二つの大きなテーマ、即ち「社会主義革命は我々に未来を約束するか?」「現代日本人の精神的支柱を何に求めるべきか?」のうちで私は後者の方に焦点を絞つて参加した。それは、私が常に対決を余儀なくせしめられ、悩まされ、しかも解決をせまられている重大な問題であつたからである。この悲しい、はかない人生に於て、私は何としても生命の歡喜を味わい、真の生き甲斐を感じたいのである。それは勿論物質的な快樂に求めらるべくもなく、それを超越した精神生活の中に求められねばならぬものである。

「精神生活の最も高度な表われは、宗教生活と芸術生活にある」ということ。しかもそれは祖先から受け継いで来た国民的な歴史伝統の中に、個の生命ははかないけれども、真の永遠の生命は民族的精神の中に、究極するところそれは国民同胞との、過去、現在、未来を通ずるつながりの中に天壤無窮に生成発展するということ。等々私はこの合宿から、万葉集のうた、今上

合宿感想録

天皇の御製を通して直接に体験せしめられた。

現在、世界の二大陣営の一方を指揮する国際共産党は、階級的唯物史観に立ち、歴史の「鉄の如き必然性」を妄信しつつ我々にたたかいかいをいどんできている。国民の同胞同信生活を分裂に導こうと躍起となつてはたらきかけてきている。我々は断乎としてこれを折伏せねばならない。しかしこの場合、敵に対して発する戦力の主体は常に己の側にあるのであるから、己を磨き、己の信を確かめつつ進むことが必須である。殊に学生時代は、かかる目的のために切磋琢磨を行う時期ではなからうか。内なるマチガイ精神との掬まぬ、しかも沈痛で継続的なたたかいを我々はたたかいかい抜かねばならない。その様な真の内なるものとのたたかいかいの過程に於て、止むを得ず成される外とのたたかいかいこそ最も威力あるたたかいかいに違いない。九州の友よ、たたかいかい進もうではないか。

x x x
私達東京から参加した数名は、度々会合して合宿の思い出を語り合つている。関係諸団体には合宿の様様、成果が報告され、近く在東京有志が集つて、今後の運動方針について新機軸を打ち出すべく懇談を行う予定である。

合宿所感

会社員(鹿兒島)

K

日日が不安の連続である現在の日本にあつて、何か新たな強力な拠り所がないものかと求めているのであるが、種々な年代のものが一堂に会してフランクに自己の意思を発表し合うという此の研修会に大いに期待していた。

そして結局個々の人間の精神革命というものが大いに要求されてきているのだという事を時代の要求として痛烈に感じた。日々

の仕事に忙殺され学究的な時間をもたない我々ではあるが、此の機を期して今後とも大いに社会の人の為にならなくても役立つ様な仕事をしたいと思う。

宗教的なものに自己完成を求めて(既成の宗教観のみでなくもつと逞しく力強い行動力のあるものに)、とにかく安心立命の日を送りたい。私は青白きインテリにはなりたくない。現在の日本に要求されるものは果敢なる行動力だということも、色々な政党的無気力や指導的立場にある学者(所謂学者)の態度より推して痛感した。

今後此の若さ溢れる研修会のメンバーを中心に大いに動いて行きたいと思う。

K 先生へ

福岡大学

Y

拝啓

朝夕など、めつきり涼しくなつてまいりましたが、先生その後お変わりありませんか。合宿から帰り、早速お話を伺いにお邪魔しようと思ひながら、つい急がしくて機会を逃がしてしまいました。今は就職のことで少しノイローゼ気味なんです。学校の試験は、昨日で終つたんですけど、卒論も控えているもんでですから仲々落着きません。

今あの合宿での数日間を思い浮かべるとき、全てが走馬燈のように思われます。イデオロギーとか、考え方とか一応抜きにしても、免に角榮しく過せた事は事実です。まして自分というものをあらためて再認識する機会を得たこと、そして今迄の自分の物の考え方に少からず誤りを発見した事をとても嬉しく思つています。恐らく学生生活の最大の思い出として残るだろうと思つています。

○君を始め数人の友人を得た事も僕にとつて最大の收穫でした。先生たちから見れば、僕等の物の考え方に随分幼稚さや、又危険性をお感じになつたと思います。そして或る意味で全然反対の考えをお持ちだろうと思ひます。でも僕等としても学びつつある現在、全てに結論をもつ事は出来ず、常に二つの対立する物の考え方にはさまざまり、より正しい方へと近づこうと努力はしている積りです。少し落ち着いたら是非お話しを伺ひにまいります。では呉々もお身体に気をつけてお過ごし下さい。

九月二十九日

K 様

Y 生

敬具

写真を同封致しました。良ろしかつたら焼増し致します。

○先生のお手紙とても嬉しく読みました。その後お元気で何よりです。合宿のことでまだ仕事があるなんて、随分大変ですね。先生のお手紙のこと、良く解ります。僕等が毎日、新聞を読んでも、例えばスエズ問題など、事実がこうであるという事以前に、その本質は何かという事で色んな事を考えるわけです。相対立する考え方二つの世界観と申しましようか、スエズの問題でも、日ソ交渉の問題でも、その他如何なる問題にも、その裏にある本質を見極めようとする、この二つの考え方は、ささまれるわけなんです。

だから僕も、ドグマテイズムこう云う考え方は問題にはしないつもりです。僕たちが例えば只共産主義理論を学んでも、又資本主義の理論を学んでも、それらが、それぞれ絶対的に正しいものだという風に信じこむ事はできません。そうなるには余りにも未熟です。人間社会の究極の形態を考え、その最善の形態を決定するには、余りに無知なんです。でもこの問題はどこまでもつきとめたい衝動にかられるのです。

合宿感想録

写真が出来ましたので同封致しました。僕も残された数ヶ月の学生生活、有意義に送りたいと思つています。先生どうかお身体に気をつけてお励み下さい。

十月六日

灼熱せる炎の如く

農 業(松山)

M

研究会設立趣意書を要約すれば、左の一点に尽きるのではないかと思われれます。それは全く地を払つた国民的同胞的統一感情の喚起と云うことです。

実に今日の言語に絶するあらゆる意味での混沌の最中にある祖国を防護する最後の力源として民族的精神交流を取上げ、更にこれを裏づける真実の文化感覚並びに學術理論の振起とに依つて、いやが上にも民族情愫の共感の世界を沸き立たしめ、個々の統一拠点を求めんとした正しさは全く同感と云う外はありません。

民族個々の胸中に気付かずとも眠る伝統と云い、歴史と云う名に依つて、何時とはなしに築きあげられた、ゆるがない歴史生命の流れを、次代の若者をして実感せしめよ。進じる正しい民族行動の原動力は、唯此の一点の実感のみにある。そして其の実感のみが、よく明日の祖国を防護し得る最後の、そして最大の文字通り力源となるであります。

今日静かに合宿の経移を振り返つてみる時、合宿という一つのレンズを通して、民族の歴史生命の流れとも云えるものを一点に凝集し、個々の胸を燃え上らせるには、正しく容易ならざる意志と、忍耐と、協力の必要なることを心より痛感するものです。勿論左翼理論の誤謬の根底を衝かんとする正確なる學術を展開するのは必要です。しかしそれは何の爲であるか。次々に

掘起される現実の問題を深く洞察して誤れない道を求めるのは大切です。しかし、それは何故行われなければならないのか、その根源ともなるべき正しくゆるがぬ立場は一体何か？それを等閑に付すならば一切は虚妄に終るでありましょう。

ではどうすればよいのか。

私達は今こそ嚴肅に此の問題を取上げて見たいと思ひます。前進の爲には、常に私達が直面しなければならぬ此の苦悩の母の胸を如何にして開くべきか。

先ず云えることがあります。此の様な大会の性格を決定づけ、個々の胸中に仮令かすか乍らも趣意書にある様な民族的精神交流の親喜を与えんと欲するならば、それは詩に譬えるならば、叙事詩ではなくて叙情詩の力強い展開こそ必要ではなからうかということですが。

今日の暗黒とも名づけられるべき混沌の客観状勢の中にあつて、それら乗り越えた共感の世界の現出は、前述した様な歴史生命の流れに立つて躍動する、抒情詩的形態によつてのみ為し得るのではありますまいか。其の様な共感の世界醸成への、終始総べての力を集中した真剣な努力なくしては、如何なる論議のやりとりも、精緻なる理論の展開も、単なる言葉或いは智識として空転せざるを得ないであります。

では其の様な共感の世界を呼び起さずにはおかない抒情詩的形態は、何に依つて招来されるでありますようか。

私をして云わしむれば、それは究極するところの言葉々しきかないのではないかと思われまふ。見るに忍びない祖国の現状に直面して、吐露される言葉の一語一語に、渾身の情熱と、燃え上る民族生命のありつたけを冷静に打込み続けるとき、意は言外に溢れ、精確なる學術は灼熱せる炎の如く一切のものを溶かし去らずにはおかぬであります。

要は正しさに裏打ちされた々活きた言葉々です。勿論、其の様な命のある言葉は、決して偶然に生れ出るものではありません。

ん。痛烈な自己への内面的反省、歴史生命への魂消ゆる様な実感、血みどろの學術的考究、或いは其の他様な生活の中ら、そしてひたむきな一筋の意欲の中から、意識せずとも湧然とわき起るのではありますまいか。

以上、極めて簡単な前進への結論として云ひ得ることは、常に自己を振り返つて見たい、そして民族の個として祖国の現実を正しく見極め、眼前に展開される自己の生活と火花を散らすが如く取組んで行きたい、ということですが。

我等の進むべき道

會員 末次祐司

非常な真剣さで過した三泊四日の合宿をかえりみて、今尙私の耳に残つている言葉は、某高校生の次のような討論会に於ける發言であつた。

「私は今の日本の現状には全く希望が持てない。国会の乱斗、政治の腐敗には目を蔽うものがある。これにかわる新しい希望として、社会主義社会にあることが、これに達する革命のみを唯一の若い私の生き甲斐であると思つて今迄生きて来た。革命のもつ罪悪については色々聞かされたけれども、それでは一体私達はどうすればいいのですか。」

虚飾のない真面目な發言だけに私の心を打つた。敗戦の罪を深く自覚する時、私は現代日本の青年をここまで追いつめた責任を深く痛感する。彼らは我々の住む日本に信が置けず、希望も見出すことが出来ず、迷つてゐるのである。そして危険とも思える新しい、理想的社会にあることがれてゐるのである。果してこれで良いものであろうか。深く此の問題を掘り下げる時、まさに戦慄を覚えざるを得ない。

敗戦後、すべての日本の過去を抹殺し、伝統を捨て、全く新

合宿感想録

うちに終つてしまつたというのが大体の推移ではなかつたかと思つたか。やはり貴兄の最後の日の感想だつたと思ひますが「自分は今までこれ程自分の考えを他人の前にぶちまけたことはかつてなかつた。そういう自分が何だかおそろしい様な気がする」という意味のことをもらしていたことを思い出します。が、生命をかけて相手にぶつかり、相手も又それにびしびし応じて来るといつた、所謂火花を散すという形容語を実感としてこの合宿に於て体験出来たといふことは本当に得難いことであり又尊いことだと思ひます。これは恐らく貴兄も経験のあることと思ひますが、今日私共が他人と議論する場合、特にそれが所謂進歩的の社会主義者との場合よく経験することですが、意見の対立はそのまま保守革新といふ動きのとれぬ人間の対立関係といふことにしてしまつてとりつくしまもないといふ、ある冷さが生ずるといふこと、しかもそれが反転して自己批判とか戦術とかいふ名目のもとで妙に妥協的態度に終つてしまふことに対して、私共は心から嫌悪の情を感じないわけにはいかないので。その点今度の合宿はお互の意見の相違は相当にあつたと思ひますし又それだけ討論も激しさを増していたと思ひます。けれどもその火花がはげしければはげしいだけ、それだけ私共の心のふれ合ひは、心の結びつきは、感々深くなつていつたと云うのが本当ではなかつたでしょうか。

前述しましたように今度合宿は各種の緊張した雰囲気がありました。実はその雰囲気皆の心に通つていたからこそ、意見の対立がそのまま冷い人間の対立分離にならないばかりか却つて基本的に人間関係を固く結びつける原因をなしていたと思つたのです。それではその緊張した雰囲気とは何かと問われた場合、私はただそれは、信の世界々だといふより他に言葉を知りません。又それは合宿に参加される真剣に討議された人々の皆の力によつて生みだされたものであるといふことも疑いなき事実であります。

私達はその日その日を本当に充実して生きてゆきたい。それは人間の自然の欲求でもあります。そうした人間の本源の立場に立つた場合、対立分離の人間関係は決して正常ではない筈です。そういう意味で皆が今度の合宿で体得された全体的雰囲気といふか討論の場に於ける私共の心構えといふものは、ゆめおろそかにはならない重大な事のことと思つたのです。その緊張の中からは無限の将来への生きゆく力と方途を感じることが出来ると思ひます。特に混乱の極にあるともいえる現代日本に於て、しかもその日本の運命を切り開いてゆくべき学生諸氏にとつて、今度の前述の如き合宿の体験は必ずや一筋の光芒となり、将来大きく強くその真価を発揮することを確信するものであります。(香椎高校教諭)

農村雑感

会員 林 栄 一

残暑とはいへ暑い炎天の中を、夏大豆を買付するため一軒一軒と部落を廻る。私が今自転車で廻つている部落は、水田が少く、畠の多い土地である。従つて生活もさほど良くない。まだ家族の帰つて来ない家では、お爺さんが風呂飯を炊きながら孫達に麦飯をついで、朝の味噌汁をかけて食べさせている。私はいつものように、先ず農村の貧しさを考えさせられる。農村の家庭の貧しさは、人口の増加と共に、土地の面積の分割によつて、長い間の習慣となつてゐるが、人々はこの習慣の中に自由に明るく暮らしてゐるようには見受けられない。しかしこの淋しい田畑の向うには、荘厳な高千穂の峰がそびえて、我々の部落をあたたく見守つてゐるようだ。この峰を仰ぎ見ると、四五日前の霧島の学生合同合宿において、社会主義か資本主義かの討論により、現実社会への不満と其の対策が真剣に論争されたのが

物である政治経済歴史文化等々に於ても認められる。不可分の全体である事象を概念的に知ろうとする所に過誤を生ずる。しかしして複雑に交錯する現実の種々相があるがままに全体として把握する事が出来ないが故に、矛盾相剋の中に図式化して解決を求めんとする。そこに生れるものは怨悪と憎嫉と呪咀であり更にその結果の闘争であり又、空虚な理想を讚美する歌声である。概念に対する過信の止むを得ざる所産であらう。

されば科学の如く概念的に知るといふ立場は、内から直接に感じるといふ「立場なき立場」と相補足すべきものである。すでにのべた如く人間の良知に対する過信は、良知により知り得た一面の性質を無反省に全体としての人間生活そのものに適用する事が出来ると妄断した。左翼の人の依つて立つ基礎である。(しかしながら左翼に対し批判し又反対する人の立場が良知に対する迷信に立つてのみなされるならば所詮同じ誤をくりかえすにすぎないであらう。)

我々は統一ある豊かな生命を欲する。良知への過信はそれを阻止する。

我々は草や木のようにすなほな気持に立返つて、冷静に眞面目に謙虚に物を考へて行こう。そして念願するところは郷土の隣人相和し祖国の同胞相はげます時代の一日も早く来らん事である。(郡城中実病院長)

信をもつてつながるもの

修猷館高校

K

(この一文は同君が合宿参加以前に教師に提出した所感文であります——編者註)

商人と客とは金でもつてつながり、両親、兄弟、親戚とは血で、教師と学生とは学をもつてつながり、友人は「信」を以つ

合宿感想録

つながっている。ところが「信」を以つてつながる管の友人関係は受験期が近づくに従い自己中心の独善主義と化してゆく。そこには信頼も信義もない、まして両方遠慮なく、共に喜び、共に悲しみ合うという事も次第にうすれてゆく。私はよき友は得た。しかし友は離れてゆく。否離されてゆく。

私は今始めて、社会に不満と反撥を覚えるのです。この強い不満と反撥をいつまでもしつかしと握りしめておきたい。

かかる時「信」の対象を誰に求めるか。我々の十の眞実さに、十の眞実さで受け答えてくれる人は誰なのか。

先生「？」だが思い思いに黙想し、思い思いに感想を述べようか。先生が思い思いにそれを批評してくださるのはいつてして下さるのはいつてしようか。

私は今悩んでいます。

如何にして、如何なる情熱の対象を発見すべきか。これさえしつかりつかめば、死物狂いに精魂を傾けつくして追い求めるだけです。

深遠、広大な、抽象的な物を弱く持つてうそぶく者よりも、どんな小さな事でもよい、現実を身を以つて、それをしつかりつかんで、命がけでとりこんでいる人の方をどれだけ尊敬するかしれない、私はそのような人になりたい、と思うのです。

講
義
要
旨

経済学の考え方と日本経済への適用及び政策の方向

福岡大学法経学部教授

石村暢五郎

一、二つの世界観（西歐における）——ヘブライズムとヘレニズム——

経済学をどのように新しく打ち立てるかについて、その根本になる哲学思想にまで遡つてこれを考察した時、私は次のように考えることが出来ようと思つております。それは今日まで主として西歐哲学において考えられておりますことは、一つはヘブライズム（猶太思想）の流れを汲む思想と、ヘレニズム（希臘）の流れを汲む思想との二つがあると思ひます。

A ヘブライズム（猶太思想、基督教思想、マルクス思想）

この思想の根源は主として小アジア地方、セミチツク族の考えがそれでありまして、要約致しますならば、それは神本位、全智全能の唯一神（エホバ）が全世界を創り賜うたとする思想であります。すなわち神さまが人間世界を創られたものであるとする考え方、従つて人間の方がするならば、神への絶対服従、従属主義がその哲学の根本問題となるものであると考えられます。そのことは要するに神という一つの中心概念があつて、その中心が世界を創つたとする思想になるわけです。そのように常に哲学の始めにおいて、絶対的な神の想定をなさねば始まらないとする考え方は、これを自然的な思想あるいは規範的な哲学とも呼ぶことができるのではないかと思ひます。だから人々はただ神のまにまに従属してゆけばよいという結果になるのではないか、そこに西歐における神の概念、これが後程考えられます神が觀念論的な存在となつたものと考えることが

できるのではないかと思ひます。

しかしいま一つのことがこの考え方にある。それは現実の地上がそのまま天国になるのではなく、未来社会において天国が到来するという**未来天国思想**がまたその中心概念となつていくというのであります。このことは同じ神を転倒して唯物史観を打ち立てたと伝えられてはマルクスの思考の中にも、はつきりとそのことが言えるのではないかと思ひます。すなわち神に代る労働がやはりあらゆる経済学の初めにおいて中心概念となつていくことでもあります。すなわちこれは**価値実體概念**としての労働が考えられる。その労働が世界のあらゆるものを作つたと考えるところに思考方法は全く同じことであるといふこと、このような価値実體といふようなことがあつて東洋哲学との対比において考えられますが、やはりヘブライズムの根本的な概念思考の産物であると思ひます。また未来天国思想にしても、やはり資本主義社会の否定の後にのみ社会主義が到来するという**未来救済の経済学**が打ち建てられたといふことは全く軌を一にしていふと思ひなければならぬと思ひます。マルクスは「宗教は阿片である」と言つたにも拘らず、自分自身において一つの**未来救済的な概念思考**を優していたのではないかといふ考え方が浮んでくるわけでもあります。

B ヘレニズム（希臘思想）——人間本位自我中心の主義

しかるに一方そのような神の絶対性を主張する考え方に対して、ギリシヤにおいては「いや人間が中心である」「自我が中心である」といふ、いま一つの考え方が勃興しているようです。ギリシヤ哲学のターレスは「汝自身を知れ」と呼び、ピタゴラスは「人は万物の尺度である」と申しております。このような自我中心の思想とヘブライズム的な神中心の思想の二つがローマに落ち合ひ、ここに永い宗教戦争が続いた歴史を見るこ

しかるにそれは中世においては一応ヘブライズムの思考が勝利をおさめ、教会中心の時代が永く世を支配致しました。かくてそれは再び人間本位への主張、ルネッサンス(文艺复兴)によつてこれが打ち破られたと考えられたと思います。かくてルネッサンスは哲学においては自我の主張、政治においてはデモクラシー、経済においては資本主義を生んだわけであり、ここに華やかな近世の資本主義経済の發展を見たわけであり、再びヘブライズム思想の機頭が起つたのでありまして、それは経済の面においてはマルクスの思考による資本主義の否定、社会主義社会への移行、政治的には全体国家が個人を征服せしむる、社会主義社会への移行がそれであると、このように私は西歐の歴史を見ることのできるのではないかと思います。

二、マルクスと釈尊

しかるに東洋においてはいささか趣きを異にしているように思われます。東洋思想は二つの主張にははまらない。いわゆる絶対概念に対して空思想、自我に対する無我の思想がその哲学の根本精神になつてゐると思われ、

ここに歴史的には時代は異なりますが、釈尊とマルクスの比較を致しますと、両者の共通点が一つあるようです。それは釈尊はそれまでのバラモン教徒が「宇宙の本体は何であるか」というような実人生にとつて無用なる論争に明け暮れた、すなわち形而上学的な概念の思考に止まつたに對して、もつと真剣に人生をいかに見、いかに生くべきかという根本問題にふれて追及したということ、このことは同じようにマルクスがプロレタリアの生活苦をいかなる原因によるものであり、それはいかにすればよいかを考えたこと、すなわち現実足下の問題に取り組んでいつたことが一つの共通点と考えられます。

しかしその人生の見方についてはいささか違つていたよう

経済学の考え方と日本経済への適用及び政策の方向 (石村)

す。釈尊は

人生を苦と見る

生老病死……生物苦
四苦八苦
愛憎離苦
怨憎会苦
社会苦
普遍苦
所求不得苦

しかるにマルクスはプロレタリアの生活苦(経済苦)を資本主義的搾取機構の結果と見た。このことは釈尊にとつては所求不得苦の中の経済苦のみを指すものである。釈尊はその意味においてはマルクスよりさらに広く全生物の苦しみを苦としたようである。

またその生き方においては、釈尊は苦の原因を欲と見、欲すなわち無明(アビジヤ)愛着(タナハ)の解脱こそが解決策であると考へた。しかるにマルクスは資本主義機構の否定、社会主義の建設において生活苦が解けると考へた。しかし人間は元來欲のままであるので、社会主義社会において、ただ機構的に人間欲望の否定、利潤追求の否定をなして、果してうまく生活苦が解けるかどうか疑問であります。この点釈尊は欲望の否定ではなく、欲望のままにまにまに生きてゆくか、経済学的に考へれば私欲の欲望を公的欲望に直せしむること(ここに解脱という意味がある)、そこに両者の重大なる相違点があるのではないかと

思います。さらには哲学の根本問題として、これはヘブライズム、ヘルニズムを通ずる哲学思考の中において西歐哲学は、神があるいは人間が中心であつて他を規定してゆくという考え方に對して東洋哲学においては、そのようにあるものが中心となつて、あるものを規定してゆくというようなことは考へない。存在が意識を決定してゆくと考え、あるいは常に下部構造が上部構造を規定してゆくという考え方を取らない。なぜとらぬかという立場は、これは因果論の立場であると考へられる。しかるに東

西洋哲学、特に積尊の考え方の中には因と果の中に縁がなければ因は果にならないという因果縁の理論がその中心となつてゐるということである。

西洋哲学における因果論は常に因が果を生むものであると考へる。すなわち神という因が世界という果を創造すると考へる。また資本主義という因が社会主義という果を齎すというように考へてゆく考え方に対して、東洋哲学の考え方は種子という因は、太陽・水・空気というような縁があつてこそ芽(果)が生えてくるのである。種子を机の上においていたのでは永久に芽は出ない。従来因果論の立場の考え方によると種子には矛盾があるから必然的に芽が出ると考へられてゐるが、そうではなく縁というものを忘れ去つて、あたかも因が縁を生んで果を齎すと考へてゐるようです。ここに西欧哲学の根本的な錯誤が存在してゐるのではないかと考へられます。飛んでゐる矢がいかに矛盾に充ちたものといへども引力と空気の抵抗という縁なしには落下しない。試みに成層圏を飛ばしたロケットは地球をぐるぐる廻つて落下しない筈である。このように因果縁の立場から言えば、種子が因となれば前云つたようになりますが、今度は花を因とすれば蝶・蜂は縁となり種子は果となる。また蝶を中心に見れば、蝶は因、花の蜜が縁となつて蝶は生活をしてゆく。このようにあるものは常に因ともなれば、縁ともなり、また果ともなつてぐるぐる廻り、どこが中心であるということが決して云えないものであるということが解る。このことを仏教では十二縁起觀と申しております。

そこでこのような縁起觀においては二つのことが言へる。第一はあるものが中心であつて、あるものを規定してゆくという事は間違ひである。これこそ観念論的な思考の産物であつて、宇宙はあるいは人間社会は互いに相持ちつ持たれつ結びつき、経済学的にこれを言えば相関関係、産業連関の中にある。あるいは一般均衡論の中に営まれてゐるということがで

きるのではないかと思ひます。いま一つの意味は弁証法哲学に見られるようにテーゼがあれば、必ずアンテーゼ・テーゼという果が生れるのではなく、それは縁の関係においてどうにでもなる。ましてや必然的にジジテーゼになるといふようなことも言へない筈である。そこには必然の哲学、先に述べたヘブライズム的な「一であるべし」といふ規範哲学の形態があると思へます。そのようなことは特に社会科学においては断言出来ないのであります。

例えば資本主義社会は矛盾によつて社会主義社会になるといふが、同じ搾取機構であつても蟻や蜂の世界の方がよほど大きな搾取機構である。しかるに未だ女王蜂を喰ひ殺したという生物学を聞かない。要するに資本主義社会が搾取機構であるとするのは労働者の自覚(縁)によつてしからしめられたものであつて、もしその縁が欲によつて解脱されるならば、例えば資本家はその得た利潤を働いた者のために分け与え、また労働者も分相応の報酬にあずかるならば至極円満なる解決運行を見るのではないか。今日はそうではなく労働者の側においては一匹でも多く取ろうとする、これを賃金斗争と呼び、資本家はこれに對してなるべく与えまいとする。これでは決してこの世にはうるわしい仏国土の建設は行われぬ。要するにあとで述べますように今日の機構そのものの欠陥というより、その中における意識の転倒、あるいはそれに加ふる国家的な政策的な政策の欠除が今日のやうな結果になりつつあるのであつて、これを根底において改善するならば現実のままに於て我々は幸福なる生活が出来るのではないかと思われまふ。私は二宮尊徳の報徳経済をいま一度読み直し、国土建設計画の指標とすることを諸君におすすめ致します。

三、因果縁の哲学的思考……経済史把握の方法

そこで以上のような哲学的な思考の中において、我々は経済学を(一)因果的な経済観の打破、すなわち絶対的な価値実體

概念—労働が価値の実体であると考える—を打破致します。労働のみが価値を生んでいるという考え方は今日のマルクス経済学をやつた人の信念となつているかも知れませんが、人間は何等価値を生むものではなく、自然に対してただ変形をしているにすぎないということを我々は第一に考えなければなりません。価値があるのは実は自然そのものの中にあるのであつて、人間労働はそれに手を加えて加工するにすぎない、だから自然の変形としての資本そのものの中に価値を生むのが考えられるわけでは、これについて詳しく展開するといひけれども時間がありません。今日労働価値説的な立場より純粋に経済学を打出すことはいささか無理をしているようです。これらについてはポール・スイジあたりの研究その他の学者においても発表されています。また日本では山口大学の柴田敬博士などは資本価値説ということを云われていますが、これなどは面白いと思ひます。

(二) 次には経済史を把握する立場において、従来はつねに資本概念を中心として考え、資本主義・社会主義という言葉を使用しているが、これはマルクスの考えた唯物史観の考え方に乗つておるのでありまして、私はそのようにただ資本の所有という観点よりのみ経済史を把握するということは確かに一つの経済史把握の方法ではありますが、まだそれは一部分に過ぎないと考えます。資本の所有ということはあくまで生産の立場よりでありまして、経済とは物を生産して消費に向うまでの過程がいらなければならぬ。しかも生産と消費の間には交換流通がはいつてくるわけです。だから私は本当に経済史を把握するならば、生産の所有関係の変化、生産の形態の変化、生産の方法の変化をまず見、さらに流通の形態・方法・変化ひいては消費の変化について、個々別々に見るとともに全体的立場より見ることではなければならぬと思ひます。

しかるに唯物史観の立場はただ単に資本の所有関係が中心と

経済学の考え方と日本経済への適用及び政策の方向(石村)

なつて、全経済社会が一方的に規定されると考えているようですが、私にはそれは思いません。生産は何のためにするかという消費のためであり、消費が中心とも云えるからです。生産が中心とか消費が中心とかという中心概念ではなく、生産と流通と消費は互いに因となり、縁となり、果となつて結びついているということですから。そう考えないから消費の面においては労働者は常に消費だけを行ひ貯蓄を行わず—現実はそのではない—、資本家はつねに貯蓄すなわち利潤を資本蓄積に向けるのだという仮定を設けなければ経済学が進まないわけです。ここに階級の経済学が打ち建てられているわけですが、その階級というのは資本の所有関係を中心にもつていつて、流通も消費もこの生産関係がすべてを規定してゆくものだと考えているのです。しかし現実の貨幣経済における現象は必しもこのような階級概念のみによつてはすべてを規定できないものがあるようです。超階級の必要要素が余りにも経済社会においては大きな力を示しているようです。例えば貨幣とか、投資・貯蓄・消費などすべて超階級的なもので、今日近代経済という巨視的立場の人々はこれを取扱つていふと思われまます。

しかも現実の貨幣経済、市場経済においては、価格という縁を中心に、生産と消費はうまく結びつけられているということ、これを私は市場機構と呼んでおります。このような市場機構の上に経済計画をなす。これが今日西ドイツあたりで盛んに言つている、ところで市場経済(Market Wirtschaft)の上でこそ経済計画が最も能率的に行われようといふことを言つていられるわけがあります。だから私は資本主義が必然的に社会主義になるというような必然史観に乗つた概念規定ではなく、あくまで経済史はこのような市場機構と経済計画の結び付きについて(実は因果関係において)把握することが出来るのではないかと考えております。

このことは今日近代経済学においては産業連関論、国民所得

の循環という表現を用いて、着々その成果をおさめつつあります。マルクスのな経済学者がこのような市場機構を資本主義機構と呼び、すべて搾取機構であると簡単に割り切っておりますが、この市場機構こそ取りも直さず生産と消費を自動的に決定してゆく場であるというのを忘れてゐるからであります。そのような自動調節作用も今日のような工業製品が大量出来るようになり、しかも一方で長期にストックに耐えうるようになつてからは、アダム・スミスの云うような自由放任だけではいけません。ここに経済計画が大きく全面的に採用せられるようになるわけがあります。その政策のやり方は金融・財政政策をはじめその他の形において採用せられてゆくわけがあります。

従来社会主義社会が、計画経済とは市場経済の否定の上のみなされうると考え、生産手段の公有を断行してきておりますが、今日ソビエツトのスターリン批判、農業政策としてのマレンコフ批判、及び中共における最近の市場経済の復活などに見られるように、やはり市場経済の良さが漸く認識せられ、やはり経済計画には市場機構を最大限に利用することが必要であるという氣運が起りつつあるということが何よりも雄弁に物語つてゐると思われます。

四、長期産業計画の方法と方向

そこでこのような市場経済の上に経済計画を行うことは果して可能かという問題が起つて参りますが、今日世界各国を眺めて参りますと、多くの西欧自由諸国やアメリカなどにおいては、いままですに統計的な数字を扱つてそれらの適確なる数字、すなわち政策の変数をハジキ出して計画を進めている段階に到達してゐるようです。

その基本的な原理というのは、先に一寸述べましたが、産業連関表を揃えて、各産業間の因縁果の關係を基盤の目のように組み合わせる事によつて、そこから国民所得の循環を見、そこに具体的な政策の決定を図つて行こうとしてゐるようです。

今日日本においても、このことの計算が急がれております。今日企画庁あたりはこの表の作成に懸命になつております。私も今日国家予算作成のために微力を尽しておりますが、もしこのような新しい計画予算が出来ますならば、今後の経済計画の上に大きな光明を齎すものがあると考えられます。

例えば一年間にどの位の仕事をやるのか。それに要する金はどの位か。だから予金と貯金と租税はどの位が適當か、公債はどの位発行して、物価はどうなり、賃金と利潤と資本蓄積の關係はどの位にするか、その結果何人の新しい失業者が救われるかなどの計算が出来ますならば非常に前途に光明を見出すことができるようです。今日私の見たところではオランダと西ドイツ、ノールウェ、イタリー、イギリス、アメリカなどにおいては相當の進歩が見られてゐるようです。

これから先の経済学は、単に大言壮語や、臆測をすることではなく、實際の統計に基いて実証的に証明し、計画されなければならぬ時代が来つつあるようです。産業の固有が是か否かなどの問題についても、単にイデオロギイ的に定めるのではなく、現実に立脚して各産業毎にその解答をなしうる時代がもう出来そうに私は思つております。

これから先の日本は社会党とか、自民党とかと云うのではなくして、どうしたら最も能率が上り、資源の合理的配分が出来るとかの問題について、学者も政治家もその解決に向つて共同して力を注ぐべき時に來ていると私は考えております。(文責在記者)

(後記)時間がなくて述べませんでした。私は先にマルクス経済学もケインズ経済学も非常に特種の条件の中における経済状況を対象として書かれたものであるということと述べ、これらを日本経済に適用する場合には、かなりの制約があるということを発表しております。——三十一年日本経済政策学会発表(於横浜大学)その要旨は、

- 1 福岡大学経済論集 一卷一号、三十一年九月刊「隘路下における経済政策」
 - 2 「やさしい経済政策」昭和三十年十月 飯松堂刊
 - 3 「近代財政学の研究」昭和三十年九月 飯松堂刊
- なお東洋思想については江部鴨村著「仏教概論」（昭和二十四年刊百華苑）を参照しました。

平和革命論の検討

鹿児島大学助教授 川井修治

一、序論、平和革命論の横行、それは嚴密な批判を必要とする

先般の参院選挙で予想以上の進出を示した社会党（左翼労組）勢力を背景として、今や社会主義革命の到来に対する関心と希望が、広い国民層——就中青年学生層——の心理を捉えつつある事は、否定すべくもない現状である。そしてその際一般的に言える事は、今では露骨に暴力革命を唱える者は影を潜め、平和革命なるスローガンが時を得顔に横行している、という事である。人はこの暴力と替置された平和革命なる言葉の甘さに眩惑されて、革命の持つ動乱の苦烈さを忘失してしまっている。この好例が石川達三氏であつて、何をどう判断したのか知らぬけれども、「ソ連のような革命は困るけれども、もつと緩慢な形でうまくやつて行けばよい……」等と放言して憚らぬ有様である。石川氏の様な素人はとも角としても、社会党の綱領等にも平和革命という用語がふんだんに使われており、事実彼等が政權の担手として我々國民に臨む可能性の濃くなつた今日、言う所の平和革命のコースに対しては特に嚴密な学問的検討が加えられねばならぬと考えられる。

平和革命論ブームの今一つのきつかけは、言わずとも知られ

ているブルシチョフ・ミコヤン演説の当該箇所である。これが発表された時、社会民主主義者達が恰も鬼の首でも取つた様に担ぎ廻つた狂態振りには、今尚我々の記憶に新しい。この声明以來「来るべき革命はいつ頂上に登り、いつそこをすぎ去つたか解らない程の、浅間山のようなゆるやかなカーブを画いて行われることが、可能だと考えられるようになった」等と、驚くべく先走つた楽天的解釈が施されている向きもある。（社会主義講座第三卷、岡本清一）しかしブルシチョフやミコヤンの言つた革命の平和的發展とは、果して浅間山を昇る様な平坦穏やかなプロセス——それ自身が通例の「革命」の用語法に合致しない——を意味したものであろうか。又我國の社会主義勢力の素質や動向に照らして見て、果して斯の如き手放しの楽観が許されるものかどうか？ 之等の点については、單なる我田引水の解釈や希望的観測によらず、夫々の文献に則した検討が必要であらう。

二、フ・ミ演説に於ける平和革命の問題

1 それは階級革命遂行の手段の面における部分的消極的讓歩にすぎない。

フ・ミ演説の真意が暴力の絶対的否定ではなくて、單なる消極的部分的否定である事は、これを一読すれば直ちに了解される。これは唯、暴力革命が唯一の方途ではないことを暗示的に述べただけのものである。しかも革命的マルクス主義の本道は飽く迄固守すると言うのであるから、社会發展の必然的帰結としての革命、生産力と生産関係との矛盾の爆發としての革命という大前提は依然不動で、唯その手段方式の面における若干の讓歩を示したに止まると見てよいであらう。あり態に云えば、革命遂行に有利な条件が揃えば、敢て流血を冒して暴力的

手段に訴える必要はなく、平和的に政權を握り、それを固めればよいという程の意味に過ぎない。

そしてその条件として彼等は、民主主義の徹底とか、平和陣營の成長とか、愛国勢力の結集とか、耳触りのよい言葉の数々を並べ立てているが、これは一般的用語に特殊の内容を含ましめるという彼等の常套手段に則つたもので、そのまま受け取ると大変なまちがひになる。言う所の民主主義の徹底とは、階級斗争に革命運動に無制限の自由を与える事であり、平和陣營とは反帝・反米陣營に他ならず、愛国勢力とは人民革命国家に忠誠を誓う勢力のことなのである。平和革命という言葉自体が、一般に解される如き人間性の相関や国民的紐帯を基盤とした真の合意と協調による革正を意味するものではなく、一に階級斗争の激化を通じて達成される社会革命の断行のカモフラージュに他ならぬのである。

この事は、フ・ミが挙げた平和革命の実例を史実に検討しに行けば、一層明かになつて来る。

2 四月テーゼに関する牽強附会

先ずレーニンの四月テーゼが平和革命を指向したものであつた、という言分であるが、苟くもロシア革命史の真相を知る程の者ならば、その牽強附会に呆れる他はない。レーニンは四月テーゼで臨時政府の即時武力の転覆を唱へなかつたのは事実であるが、これは「国家が階級対立の非和解性の産物であるならば、奴隸化された階級の解放は暴力革命なしには不可能である」(国家と革命)という有名な根本命題を変更したものである。更々ない。自派の勢力が弱い場合には平和的スローガン(人民戦線的共同作戦)を掲げ、全般的混乱の発生に乗じて相対的に自派勢力が強くなると、暴力革命の方式を採用するのは、既に一九〇五年以来の彼等の常套作戦であつた。此の場合レーニン

にとつては、最強の革命的武装集団たる労兵ソヴエートを自らの手を握る事が焦眉の問題であつた。しかも当時ソヴエートは公式に臨時政府を支持しており、ボルシエヴィキはソヴエート内に於いては完全に少数派であつたから、いきなり臨時政府打倒の線を打ち出したならば浮き上つてしまふ恐れがあつた。だからこそ強硬策を一応引つ浮めて、搦手から宣伝、暴露、誹謗、煽動の限りを尽して臨時政府への信望を断ち切り、絶望的な厭戦感情と度外れた解放感に充されたソヴエートのボルシエヴィキ化を策したのであつた。そしてこの策略は臨時政府の無能によつて程なく成功を見るに至るのであるが、これをもし平和革命と強弁するならば、正確には一時的戦術としての平和的方式と規定すべきであつて、一貫した念願としての平和革命とは完全に異質のものである。

3 暴力への転機—七月事件の真相

次にニコヤンは暴力革命への転機を七月の平和的デモが射撃されたせいに歸しているが、これも明かに事実の歪曲である。七月のデモは水兵、陸兵及びプロロフの労働者三波より成る歴然たる武装デモで、政府軍の射撃の前に無辜の血を流して雲散した様な弱々しいものではなく、驚く勿れ十七日の午後から夜にかけて三度政府機関を占領する程の猛威を奮つたのが真相である。(但しボルシエヴィキはその組織化に失敗した)のみならず既に六月下旬ボルシエヴィキはこれと同様な武装蜂起を計画し、未遂に終つた事実がある。(勿論官製版党史にはこの事は触れられてない)余りにも秩序を無視した暴行に対し、政府はレーニン以下一部の首脳に逮捕令を出したが、これとても後のチエカ(デービーウーの前身)の行実に比すれば殆んど弾圧とも云い難い程手ぬるいものであつた。そのおかげでボルシエヴィキは組織を温存し得、コルニロフの叛乱に幸されてケレン

スキー政府の息の根を止めたのであつた。

4 山川均氏の阿諛的ロシア革命観

面白いのは、山川均氏がこの十一月革命を平和革命だと弁じている事である。即ちこれが「流血を伴う内戦」によつて達成されたのではなく、「ソヴェートという民衆の組織を通じての大衆の圧力」によつて成し遂げられたから「より平和的に行われた」と言うべきであり、ロシア革命が暴力革命の典型の様に見られているのは、資本主義諸国の干渉による国内戦の激化の爲だ、と言うのである。(社会主義への道) ミコヤンでさえもこんな無茶な事は言つていないが、後段は同様で、十一月以後ボルシェヴィキは平和的發展を志したにも拘らず、これを国内戦に導いた張本人は英仏米日等帝國主義国だ、ときめつけている。山川氏の妄説を反駁する資料には事欠かないが、十一月七日に死傷者の数が予想外に少なかつたのを理由として平和革命を云々するのが、余りにも子供じみた暴論である事は誰の目にも明かで、これが四十年の斗争経歴をもつた社会党の理論的頭腦の言葉かと思ふと情なくなるのは、豈私独りではあるまい。

5 所謂平和革命トチエコのクトデターは何を物語るか。

更にミコヤンが現時における平和革命の典例として、チエコ以下東欧人民民主主義國を挙げたのは、正に語るに落ちたと言

平和革命論の検討(川井)

うべきであろう。チエコが解放直後に、共産党以下四党の連合政権(国民戦線)によつて事態を收拾したのは事実であるが、これは革命の始めであつて終りではなかつた。爾後進駐ソ軍を背景として、共産党が如何なる暴圧と誣略を用いて他党を蹴落して行つたかは天下公知の事実で、外相マサリクの自殺、大統領ベネシュの強制辞職を含む所謂「無血クーデター」が、事が表面化しなかつただけに一層陰惨無気味な暗影を瀰ませたかは、これによつて西欧諸國をNATO結成に驅つた一事を見て、容易に推察される。ブルガリヤ、ルーマニヤ、ハンガリヤ、ポーランドに於ても事態は同一の経過を辿つた。ソ連軍共産党の暴圧と独裁に抵抗した者は、例外なく処刑か亡命の二つに一つを選ばねばならなかつた。先年米朝した元ハンガリヤ首相F・ナジの痛切な訴えは、この悲劇の真情をまざまざと物語つていた。仮に一步譲つてこれが平和革命であるとするれば、流血の反抗はおこなふけれども、プロレタリアイデオロギーの下に息もつかぬ程がんにがらめにされた国民大衆を、意の儘に編成し動員する奴隸化の過程と斯く言う、と断してもあながち過言ではあるまい。

以上がフ・ミ演説の内容を、主として史實的に検討した結果であるが、少くともこれによつて、彼等の言う平和革命を安易に文字面のみで受け取つてはならぬ事だけは、了承しただけのものと思う。しからば次の問題は、日本の社会主義者達が如何なる意味合いから平和革命論を唱道しているか、ということの検討である。

三、日本に於ける流行平和革命論の検討(摘要のみ)

1 暴力(平和)の意味とゼネスト是認論

島崎謙氏は、暴力革命とは「人民が武装し人民の軍事力によ

つて、云わば物理的な強制力によつて既存の政權を打倒する事（社会主義講座第三卷）と定義しているが、ここには武力行使の流血を伴わなければ、どんな事をやつても平和革命だといふ言外の意味が仄かされて、現在向坂逸郎氏は「内戦」又はこれに近い暴力を用いる階級斗争に對して、労働者階級が物理的な力でなく主として組織の力（ストライキ、ゼネストを含む）、その意味での社会的な力を用いて闘う場合は平和的と考えられる」と言い、旧左社綱領を繞つて物議をかもしたゼネストは認論を公然主張している。更に島崎氏は、ゼネストは暴力であるどころか、憲法に保障された爭議權を行使する合法的正当的行為であるとさえ極言している。

理屈はとも角として、先般の春季斗争にもその片鱗を示した総評等左翼労組のストライキが、国民の利益を無視した組織労働者の手前勝手な横暴として指弾された事は、未だ我々の記憶に生々しい。そして文字通りゼネストが執行されたとすれば、いかなる混乱が生ずるか誰しも予想し得る處であり、暴力行使のきつかけになり得る可能性が充分にある。そうした場合、暴力行使の責任を政府に転嫁し、目には目、齒には齒の論法をもつて大衆の武力抵抗が正当化されるは必定、流血の前に画した一線が造作なく崩れ去るのは火を見るよりも瞭かである。問題は死を賭しても合法性を守るという自制の念力——その背後には国民協同体への忠順という不易の人倫がある——であり、階級斗争を至上化し、その激化が人類進歩の行程であるといふ前提に立つ以上は、所詮は暴力革命の劫火の中に沈落する他はない。向坂氏等が上品ぶつて、暴力には訴えないと力んで見ても、その役割を果たしてくれる勢力（日共）には事欠かぬのが実情である。階級斗争至上主義を一擲せざる限り、平和革命を口にする資格なしと断言したい。

2 民主主義の発達度合と平和革命の可能性

「平和革命が行われる為には、民主主義が政治上の制度としても、一般国民の行動の訓練としても少くともある水準に迄発達している事が、絶対的な条件である」という山川氏の言は、その限りに於て正しい。しかし問題はその民主主義の言葉に含蓄される実内容である。この点同じ山川氏が「民主主義が実現されているという事は、労働階級が暴力以外の實力によつて、ブルジョアジーの政權を覆えし、それと共に資本主義制度そのものを根底から覆す事が、労働階級の合法的な民主主義的な当然の権利として承認されており、しかのみならず現実にそれを実行する政治的自由が保障されている状態の事である」と言っているのを聞けば、正に羊頭を掲げて狗肉を売るの感を禁じ得ない。島崎氏の如きは民主主義とは民衆の政治だ、という素朴な前提から出発して、民衆労働階級、反民主ブルジョアなる百年前のマルクスの分析をう呑みにしたまま、民主主義とは政府打倒の自由と放言して憚らぬ有様である。

民衆労働階級（正確に言えばプロレタリアイデオロギイの把持者）という様なアジ的文句が、いかに現実的根柢を欠いたものであるかは、現在の日本の階級区分、階級意識の实体を見れば一目瞭然である。民主主義をプロレタリアの独占物と見做すことが、いかに詭弁的仮構であるかは、プロレタリア独裁下のソヴェト・ロシアが我々の目前に実例を供して下っている。私は労働階級の権利を無視せよと言うのでもなければ、ブルジョアの恣意を見逃せよと呼びかける訳でもない。唯労働階級の権利の主張は、国民協同体の調和的脈絡の内部において調整されねばならぬとこそ考えるものである。この階級を超越した理念の下に於てのみ、民主主義の発展が可能であると考えられるのである。さに非ずして民主主義を階級的利己主義の道具化し、階級的独裁の偽装網と化する如きは、逆に民主主義を破壊して、二十世紀の囚獄プロレタリア独裁を招来する以外にない事を、繰返し警告したい。

3 議会議主義と平和革命(省略)

4 プロレタリア独裁と平和革命(省略)

四、結語、眞の平和的改革推進の爲に

「革命」とは、少くとも現段階に於ては階級革命の意味にか用い得ない。(国民革命とか人間革命とか言うのは、いづれも比喩的語法である)階級斗争主義、マルクス・レーニン主義に貫かれる限り、戰略用語としての平和革命はあり得ても、一般に感得されている念願としての平和革命はあり得ない事を今まで總説して来た。それ故私は、我々の辞書から「革命」を抹殺し、「改革」をもつて置き換える事を、茲に提言したい。

従来の改革の方向(改良主義と通称)には、確に非難ざるべき脆弱性の存した事は覆うべくもない。しかしそれは、一見華々しい革命的方向に比し、停滞優柔妥協の譏を免れ得ぬ如く見えるものの、実は国民大衆の内部に社会正義と連帯感を浸透せしめ、着実な社会改革の施設を形成する上で、地の塩としての働きをなして来た事が顧られねばならない。特に社会的脈絡の緊密化した今日、その果すべき役割は大なりと考えられる。社会の实情に則した不断の改革、資本主義対社会主義という概念化された二者択一(安易な善玉悪玉主義)に非ずして動きつつある社会に即物的に対処する行き方、ここにこそ自在無礙な大幅の更新が約束され得るのである。

そうした行き方を支うべき要諦として、私は次の三項を列挙したい。

一は、眞の人間性の確立、徒らに自己解放的ヒュマニテイの謳歌ではなくして、自己の凡愚と生の痛感に徹する事。

二は、人間社会の連帯感の確認、前述の凡夫感に発する同情同胞感への発願。

世界史の発展(広田)

三は、以上の二つの心的契機を歴史的に綜合せる生活単位としての国民的基盤の形成。

私の言葉は抽象的に響くかも知れないが、諸君が概念的思弁の係縛を脱して自己の内心に諮問される時、必ずや応えるもののある事を信するものである。

世界史の発達

——冷い戦争と日本外交——

一、問題の世界史把握

広田 洋二

現在共產主義国家ソ連が最も頭を悩ましている問題は、数多くの復員者が指摘し、批判しているように、労働能率が極めて悪いということであつて、これは社会主義国家における最も根本的な問題であると思われれます。特に農業において、いかに非能率のなことが行われているかということは、先程の名越君の御話にもあつたように、幾多の事例がそれを証明しております。

一九五四年、フルシチョフ自身も、一九一七年の農業生産高と、約四十年を経過した今日と比較して見た時に、その生産高は全く上昇していないことを確認している。しかも家畜の数においてはむしろ減少したことを報告しているのであります。かくの如きソ連の直面している問題は決して単なる海の向うの話ではない。それは我々が参加している国際政治における共產圏のはらむ一つの問題点であり、幸か不幸か現代国際政治の一切が共產主義との対決から出発しなければならぬ以上、かかるソ連の現状の分析を外にしては、我々自身が政策をもち得ないことを銘記すべきであります。

最近日本の外交には基本的政策がないということを屢々耳にするのでありますが、そうであるとするならば正しい外交政策の基本線はどこに求めらるべきであらうか。単に政府と政府が、交渉をもつことが外交関係であると考える時代は過ぎ去りつつあります。今や国民自身が遠大な世界的視野の上に立つて、凡ゆる問題を真剣に考えてゆかなければいけない。現代における外交政策の基礎はそこに置かれなければならないのであります。

例えれば日ソ交渉の問題を考えるにも、両国間の民族性の問題を歴史的に考察すると共に樺太、千島の領有の歴史をにつきりさせなければならぬ。又アジア復興の問題を考えるにも、コロンブスがアメリカ大陸を発見した時迄さかのぼつて考えなければ、その本質を把握することは出来ない。コロンブス以前においてはアジア人がヨーロッパ人を侵略した歴史的事実が数多く見られ、アジアのヨーロッパに対する関係は対等、若しくはそれ以上のものがあつたのであります。即ち紀元四世紀半、アジアに猛威をふるつていた匈奴(フン)が東欧に侵入し、これをきつかけとしてゲルマン民族の移動が始まり、ゲルマン諸族がそぞくローマ帝国領に侵入したために、約二百年間ヨーロッパにおいて民族移動の嵐が吹きすさんで、ここに新しいヨーロッパ人が形成されたのである。更にウィーン迄侵入したトルコ民族、スペイン、フランスを席捲したアラビア民族、というように当時のアジアの力はむしろヨーロッパを凌駕しておつたと申しても差支えない。しかも西欧の文化的背景は、すべてアジアからヨーロッパへと流れてきたのであります。現在アジアの諸国を単に後進国という名前で呼んでおられるけれども、この様な概括の仕方では決してアジアのもつている潜在的エネルギーは理解されないし、それ故にアジア復興の基本的性格も亦、打ちたてることは出来ないであります。所謂進歩史観、或は唯物史観などとらわれないで、歴史の実態をありのままに把

握するところから真実の政策は生れてくるのであります。

第一次大戦後の最も注目すべき事実はソヴェト同盟の出現と目覚ましいアメリカの擡頭であり、更に民族自決主義がパリ講和条約にうたわれ、旧オーストリア、ハンガリー等バルカン諸国、アラビア諸国の独立が認められたことであります。ところがかくの如き第一次大戦の国際状況の中に現われた問題が、実は現代、第二次大戦後の中心課題になつて注目に注意していただきたい。即ち第二次大戦に於ては世界の民主主義国家は東西日独伊の新興勢力を完全に屈服せしめたのであるが、これによつて東西の反共勢力の支柱がたおれ、共産主義勢力は急速に増大してきた。ここにおいて資本主義国家の先頭に立つアメリカはソ連と正面から対立して世界政治の主導権は完全にこの両国、即ち第一次大戦後の新興国であるこの両国によつて握られることになつた。又インドをはじめアジアの諸国が次々に独立をかち得て、ヨーロッパに対して隠然たる勢力をもち出したのも、その萌芽はパリ講和条約の民族自決主義の中に生れていたのである。

現代は単に現代を以て理解すべきではない。それははるかな歴史的背景をとらなつてはじめてその真相が立体的に浮彫りにされるといふことをよくよく考へていただきたいと思ひます。

二、「世界は一つ」と「冷い戦争」

さて現代における世界状況の著しい特徴を考えてみると、次の二つの点があげられると思う。その一つは世界各国内の国際関係が非常に緊密化されたことであり、他の一つは所謂「冷い戦争」の事実であります。前者の特徴について言へば、今や世界の各国家が世界的統一意識をもち、世界は一つの社会であるという考えが生れていふことである。戦後の通信機関、交通機関の発達には各国の距離を縮め、それより世界国家、

世界連邦の意識が高まり、一方國家經濟が大でなければ國家としての軍備は維持出来ないということもはつきりわかつてきた。即ち戦後において増大した生産力をまかなう為、いきおい大市場を必要とするし、且國家戦力も又龐大な經濟力を背景としなければならぬ。このことは必然的に國家間の連合の問題を惹起したのであります。例えばフランスと外相シューマンの提案したシューマン・プランによつて一九五一年四月、六ヶ国によるヨーロッパ石炭鉄鋼共同体条約が結ばれた。これは参加諸國の石炭と鉄鋼の生産と分配を各國政府の代表よりなる共同機關によつて管理しようとするもので、これは参加國の競争を防ぎ、価格を安定し、西ヨーロッパの經濟的統合の實現にむかつて一歩を進めたものであります。其の後國家連合体制の發生を見、ヨーロッパ國家連合、アラビア連盟、ソ同盟、南北アメリカ國家機構、英連邦、等一連の國家集團を中心に現代の世界は動きつつあります。アジアにおいては國際連合の中にアジア、アフリカ、グループがあるもの未だアジア國家連合への具體的動きはなく、一部の人々の叫びに終つてゐるのであるが、かくの如きことも世界史の動向に照らして緊急に解決すべき問題であるうし、特に日本にとつては一刻もゆるがせにしてはいけなない使命であるとさえ言えましよう。

次に所謂「冷い戦争」がいつから始つたのかというと、一九四六年三月、前英首相チャーチルが Fulton における演説で、はじめて「鉄のカートン」ということばを使つた。實は連合國側は戦後も引續いて國際連合などを通じてお互にソ連を含めた全世界の協力關係が保てるとあまり考えをもつていたのであります。その意に反して、一九四六年にはソ連の英米仏に対する反抗が露骨化し、来るべき対米戦争への準備工作が公然と行われるようになって、ここに冷い戦争が開始されたのであります。ソ連は戦争が終つてもバルカンより撤兵せず、蕭々と赤化工作の手をうつつてきた。かくしてソ連の勢力がバルカンを席捲

世界史の發展（広田）

してギリシヤ迄及んだ時、ドイツ、オーストリア講和条約問題を討議するためのモスコ四ヶ国外相會議（四七年三月）は米ソの意見対立のままに終り、まもなくアメリカはギリシヤに対して積極的な經濟援助を強行して、ギリシヤの共產化を喰ひ得た。更にその年の六月、アメリカ國務長官マリーシャルの提案になるヨーロッパ經濟援助計畫一所謂マーシャル・プランをヨーロッパ諸國は受け入れてソ連への防禦体制は愈々強化されていつたのであります。

さてソ連はギリシヤにおける失敗によつて、次に翌四八年四月通貨問題とドイツ統一問題に起因してベルリン封鎖の手段に出た。御承知のようにベルリンは米英仏ソの四ヶ國の共同管理の下におかれていたが、東独逸内に位置してゐる為、英米仏地区は全く孤立し、三国は空輸によつて之に対抗、辛うじて之を守り抜いたのであります。しかしながら一九四九年、中共の支那大陸赤化が成功するや、同年五月ソ連はベルリン封鎖を解除、目を東方に転じて、翌五〇年には中ソ友好条約の締結、朝鮮動亂の誘発となる。此の戦亂については開戦の責任に種々議論があるけれども、戰闘開始と同時に北鮮軍が、海上輸送によつて南鮮海岸に上陸した事實を見ても、共產國北鮮よりの戰爭誘発の事實は明らかであります。

かくの如きソ連の侵略意図に対して、一九四九年四月、ヨーロッパ連合と、アメリカ、カナダとの間に北大西洋條約が調印された。これは共產主義の進出を防ぐために締約國の一国が侵略をうけた時の、相互の武力援助を規定したもので、ここにアメリカは世界各地に基地を設けてソ連に対する布陣を堅固ならしめんと躍起になつてゐるのであつて、それに対してソ連は相手の弱点に自己の勢力を浸透してゆく鈍重な作戦を柔軟に展開してきたのである。日本における現在の基地問題の背景も勿論ここにあるのであつて、それは狭い視野の中で解決すべきものではないことは言う迄もありません。

三、マレンコフからフルシチョフへ

しかしながらかくの如きスターリソの武力拡張政策も之を無限に強行することは出来ない。それはソ連の武力的進出がかえつて相手国の武装を強化させる結果となり、又自国内の重工業を圧迫することとなつたからであります。この圧迫に次第に耐え得ないことが明らかになつてはじめて、ソ連は政策の転換を決意せざるをえなくなつた。即ち一九五二年、第十九回共産党大会において「共産革命の達成の為に必ずしも武力革命を必要としない。自由諸国は自ら自己に内在する矛盾により自然に崩壊する。」と発表し、ここに武力政策より平和攻勢への一大転換を認めたのである。かくてスターリソの死後、穩健派に属するといわれるマレンコフは、五年三月より五年二月迄政権掌握の時期に、消費経済の充実を第一眼目とし、軍備の拡張を抑制した。この消費経済の充実は自然重工業の停滞をもたらす為に、一方朝鮮の戦乱を停止せしめ、他方永きに亘つた印度支那の抗争をも打ち切つて平和外交を推進してきたのであります。

しかしながらマレンコフ政権は西ドイツの再軍備計画を阻止することが出来ず、ソ連の重工業の負担を軽減せしめることに失敗したのみならず、国内の農業消費経済面に対する圧迫はますます増大して来た。他方このころ中共の周恩来首相は印度は提携を強化し、アジア人のアジアという線を強く打ち出して来たため、中共とソ連との間には稍離隔を生じてきたのであります。ここに強硬派のフルシチョフの政策が之にとつて代る経緯があるわけで、マレンコフを行政能力の未熟と、農業政策の失敗という理由によつて政権の座より降し、フルシチョフ自らが政権の実体を握るのであります。

強硬派フルシチョフは、一九五四年、中共の国慶節に出席した頃から彼独自の外交政策を開始している。即ち先ず自国の重

工業の負担を軽減せんが為、その前提として平和を確認するという政策をとつた。こうして相手国からソ連の国力が充実するまでは戦争をしかけないということを、自分の目で見、耳で確かめるためにジュネーブにおける四巨頭会談を提唱したものである。果してその席上、米大統領アイゼンハウアーの口から平和を確約する言質をとり、当分戦争をしないという事実をつかんで此の四巨頭会談は終つたのであつて、正にソ連側の思う壺であつたと言えましよう。ジュネーブ会談以前にソ連はオーストリアの中立を認めたり、今迄のチトー排撃より一八〇度の転換を行つてチトーとの親密化を計つたり、様々の宥和政策をとつて来たのであるが、それがまぎれもない平和の単なるゼスチャイにすぎなかつた証拠に、ジュネーブ会談後はソ連は手のひらを返すように俄然強硬政策をとり、弱少国を強圧的態度で威嚇しはじめた。エジプトへの武器援助等もその一環といえよう。その後に関かれた四ヶ国相会議におけるソ連のうつつて變つた冷淡な態度も亦、これを裏づけるものだと申してよろしい。

このようなフルシチョフの外交政策を仔細に検討してみると、革命後四〇年を既に経過し、革命当時十五才の青年が今や五十五才となつて最もソ連の中核的な存在となつてゐるが、そのゼネレーションを反映した政策であると言えるのであります。スターリンが一国社会主義であつたのに対し、フルシチョフは国際社会主義を目指し、その背後に共産圏九億の人口を誇つておる。傍ら共産圏の単一性を強調し、各民族のニユアンスを捨てしめ、単一なる共産人のすむ世界を標榜し共産圏九億と、印度、アジアの六億を加え、十五億の人口を平和地域と自稱して、積極的に自由主義国に挑戦してまいつております。而してかかる平和勢力を作りあげる為、(一)組合組織の内部に党の勢力をより上げ、労働者と協力して平和闘争を展開し、(二)諸圧迫民族に開放の助言を与え、(三)議会制度を利用してその中に多くの社会主義勢力をうえつけて革命に導くという共産主義移

行の多様性を示し、飽く迄武力革命の方針を堅持しながらも平和的手段によつても最後には共產主義が資本主義に勝つという柔軟な戦法を巧みに使いわけながら濟々とその布石を打つているのであります。

四、日本外交はいかにあるべきか

以上見てきた如く、一國の外交は歴史的、又國際的に広大な視野に立つて一つの現象の意味を適確に把握しない限り、その堅実な方策を打ち擲てゐることは出来ない。ところがひるがえつて現下の直面せる日本外交をかかると見れば、あまりに歎かわしい状態であると思わずにはいられません。例へば領土問題についても、それに処する政府の態度を見ておると、問題の本質が曖昧にされたまま事が進められてゐることを誰しも認めるであらう。

即ちエトロフ、クナシリの諸島はもとより南樺太、全千島は日本固有の領土であるから、國際正義の立場から、ソ連の植民地主義、帝國主義を破砕すべき覚悟を先ず第一に固めなければならぬ。又それと同時に桑港条約を至急改訂しなければいけない。即ち第二条の樺太、千島放棄に関する条項と、第三条の沖繩に関する条項は是非其訂正を急がねばならないのであります。その上で我々はこの問題を全世界に訴へてゆかなければいけない。全世界が日ソ交渉の問題に対して冷淡であるという声を聞くが、訴へるべきものを訴へないで、世界の輿論が湧く筈はないのであります。日本は今自らの国力の不足を必要以上に卑下してゐるようであり、勿論國際政治においては力關係に相當の重きが置かれるのは当然であるが、例へば力なくとも、獨立の氣運に燃える弱小國は、堂々と正義の理論をふりかざして全世界に向つて己が眞情を吐露しておるし、世界の輿論も亦、之に答へてゐるではないか。

しかしながら日本外交の現状はあまりにも消極的であり、卑

世界史の發展 (広田)

屈であります。沖繩の問題にしても、先般の霞光、アリソン会谈において日本側から單なる善処方の要望が提出された丈であつた。事態はかくの如き態度によつては決して解決されぬ。例へば土地問題に関しては、十分に見透しがつくと思われるので飽く迄四原則を貫徹すべきであるし、又領土の問題に関しては米國も永久に占領する意志はないと言明している以上、最終的領土権が日本にあることを桑港条約に明記すべくその改訂を前述の如く米國に要望し、領土、住民が明らかに日本に屬することを中外に表明すべきであると思ふ。先に述べた千島の問題はこの沖繩の問題は相關聯して解決すべき性質のものであるから従来のように一部關係者のみの運動ではなく、全國民の統一ある輿論の結集によつて、速に運動を展開する必要を痛感します。

一昔前迄は二つの大國の間には生まれ小國がそのいずれに味方するかということとは單なる方便であつた。しかし現在、米ソ兩陣營の間はその活路を見出すべき日本外交の問題は、決してかかる方便を以て策を立てることは出来ないものである。今や我々は共產主義に基づき國を建てるべきか、又は自由主義を立國の条件とするべきか、その原則を明確にする必要に迫られております。その原則を確立し、立國の立場を明らかにしてから、どちらの側に協力すべきかを決すべきであつて、單なる感傷的中立主義は勿論のこと、日和見的態度をとりながら、あわよくば漁夫の利を得んとする考え方や、中立のままで適當に兩國を繰りながら生きてゆくマキャベリズムのごときは断乎排斥すべきであります。そして又かかる政策は決して永續性のあるものではない。換言するならば國是を定めること、これが外交政策を樹立する最大の前提である。現代の日本には國是がない。従つて外交戦略を樹立すべき中核体を我々は持つていない。このままの状態ではかかる外交の貧困は永久につづくのではないかと憂慮されるのであります。

日米開戦の真相

東京電機大学附属高校教諭

渡辺 明

(一)

未だに大東亞戦争を、日本側から米英諸国に挑戦した侵略戦争なるかの如く考へてゐる者が、わが国に圧倒的であるが、これは、為にする者は別として、驚くべき無知、卑屈の沙汰と云はねばならぬ。

國際關係は、現在だけを見てゐては理解できない。これには、当然數世紀に亘る歐米の、東亞侵出の歴史を顧みねばならない。

北から我れに迫るはロシアである。一五八一年、コサツク隊長エルマツクが、ウラルを越えて、その足をシベリヤの天地に踏み入れるまでは、一坪としてアジアに領地のなかつた国が一七世紀一杯にシベリヤを蚕食し終り、南下して黒龍江左岸で清國に接觸し、引續いて沿海州を清から奪取、ウラジオを構築、更に東進を続ける一隊は、カムチャツカを強奪、南を指せばわが千島、樺太は、同じき運命に曝されるに至つた。そして本隊は、清國の弱味につけこんで、滿洲を竊取し、朝鮮を狙ふに及んで、遂に日露戦争となつたのであつた。しかもこの、スラヴ的領土拡張慾は、ツァーリスムの批判者たるスターリンによつて、見事に受け継がれて行つた。今次大戦末期の非道な参戦は、最も完全にそれを証してゐる。

革命後のソ連は、極東侵出をレーニンの作戰に従つて執拗に續けて行つた。一九一九年結成されたコミンテルンが、主としてこれに當つたのである。中共はこれより二年の後に結党され、第一次国共合作によつて、反日運動のヘゲモニーを米國か

ら奪ひ、第二次国共合作によつて、国民党を完全に抗日に指向せしむるに成功した。そして一九三五・八・一の、所謂八・一宣言は、現中共によつてなされた、まがふことなき対日宣戰布告であつた。芦溝橋事件の如きは、西安事件によつて、国民党を掌握したへたコミンテルンが北・中支における全面戰闘開始の準備なつて、その指令一下、一斉に火蓋を切つた支那側からの挑戦に外ならない。

西からはイギリスの勢力が迫りつつあつた。シンガポール、香港、上海を扼した彼は、暮末には、わが長崎さへ頻りに窺ひ始めてゐた。然し外交には、一張一弛をまかれぬ。日英同盟は、一時的に両國を結びつけたが、英國が永年に亘つて築きあげた、揚子江を中心とする英財團の權益は、國民政府をして、一旦放火された抗日戦より、独り離脱することを得しめなかつた。蔣介石抗戰の財政的基礎が、一九三五年、英系ユダヤ人フレデリック・リースロスによつて行はれたる貨幣改革にあつたことは、既に世界周知のことではないか。

この時、ひとり米國のみ例外である筈がない。今に算へて一八〇年前、建國未だ浅き新參國でありながら、資源と財力にものを言はせ、米西戦争によつて比島を制するに及び、彼の太平洋國家たるの構へは成つた。彼は日露戦争に好意的立場を選んだが、固より北方ロシアに備ふるに、日本を使役するの考へに於てしたことは言ふまでもない。新興日本を抑へんとの方針は既に早く日露戦後に現れたこと当然である。爾來、英國と結び、支那を使役し、わが国防の生命線、經濟上の活路たる滿洲に折ある毎にことごとく辱害の策動を計つた。

清末から、漸く激化しつゝあつた民族運動を、二十一か条問題を契機として、排日運動にまで仕上げたのは、実に駐支アメリカ公使、ラインシュを中心とする一団であり、この頃既に米海軍部内には、対日開戦を唱ふる者すら現れた。其後のワシントン會議は、或る著名な米國評論家に言はしむれば、正に「米

国の対日最後通牒に等しいもの」であつた。

支那の門戸開放が、実は米国の対支干渉の正当化のために、共和党の帝国主義者が作つた言葉であることは、米国内ではよく知られてゐた。一九三一年当時、スチムソンの対滿政策は、フーバー大統領さへ拒否した程の、対日挑発政策であつた。其後日本が、国際連盟に対する期待を失ひ、他方国際的孤立と、コミンテルンの謀略から自国を守るために、独伊と接近を始めたとしても、右の事情を十分考慮する限りに、当然の措置として首肯されるであらう。事柄を単に勝敗の結果のみから速断することは、慎しまねばなるまい。

(11)

大東亜戦争はおろか、日本の歴史そのものまでを裁かんとした、極東国際軍事裁判所で、一顧をも与へられなかつた少数判決がある。フランスのベルナール、オランダのローリング判決の意見の中には、多くの傾聴すべきものを含んでゐるが、中でもインドのペール判事の判決書は、堂々日本の無罪を説いた光彩あるものであつたことは、既に広く知られてゐる。その中に多数引用されてあるアメリカ歴史学者の言葉こそ、実にブーア博士のものである。博士はコロンビア大学教授、アメリカ歴史学会会長たりし人。終戦前より国内にやまよかつた真珠湾事件の真相について、政府側発表に重大な疑問を抱き、総て公正な公文書、関係首脳者の日記、談話等を根拠とし、五九八頁から成る大著を発表、日米開戦が、日本側の共同謀議によつて挑発された結果ではなくて、実はルーズベルト、スチムソンを中心とする米國首脳部の爲した仕業であり、米大統領は、表面平和を装ひつつ、裏面では、一九三九年夏より以前に、日米戦を決意し、政府首脳部間の周到な謀議の結果、日本をして開戦に至らしめた事実を論証した。

博士の説く所によれば、ルーズベルトとチャーチル両巨頭が

日米開戦の真相（渡辺）

戦争に関する両国の計画について通信を交したのが、一九四〇年以前であることは、人々周知のこととされてゐる。一九四五年四月、ルーズベルトの追憶撰説においてチャーチルは、ルーズベルトとの交渉が一九三九年以降に始まつたことを述べ、又一九四六年、当時の國務長官補、アドルフ・パールは大統領が一九三七、八年頃戦争の可能性を信するに至つたと述べ「ルーズベルト伝」の著者、アルデン・ハッチは、多くの権威者との会話の結果として、大統領の戦争決意の時期は、一九三九年八月二三日のヒットラー・スターリン条約の時であると記し、国防長官スチムソン日記にも、ルーズベルト内閣の臨戦準備を明記してゐる。曾て國務次官であつた、サムナー・ウェルズは、その著(Where Are We Headed? Harpers & Brothers, 1946)において、ルーズベルトにとつて緊要なことは、「一九四一年の夏までに、米国民と議会の十分な支持を得ることであつた。」と書いてゐる。

真珠湾攻撃に先立つこと四ヶ月、一九四一年八月の、大西洋上における米英両巨頭会談は、戦争への最後の打合せであり、開戦までの時間を遷延する策戦が協議された。この結果、日本に関する宣言書が出される策になつたが、その時ルーズベルトは、「結果として、戦争勃発の事態は、少くも三〇日は延期されると確信する」と、ウェルズに語つた。これは、彼が八月一日より一ヶ月後に、戦争が起ることを、單なる可能性以上に考へてゐたことを示してゐる。

会談後チャーチルは米國參戰を前提とする陸海空軍の配置と軍需資材の移動を行ひ、米國首脳部は孤立主義者の反撃と反戦的輿論の指導とに全力を挙げて行つた。

日米交渉は、実にこの様な背景を持つた国を相手に、長々と続けられてゐた。グルー大使の「滯日十年」、アメリカの「兩院共同調査委員報告書」、「近衛公回顧録」等によれば平和のための両国最後の好機會となるべき「洋上会談」が、グルー

やクレイギー等米英大使の現地判断をよそに、近衛の誠意にも拘らず、ルーズベルトによつて斥けられてしまったことを明示している。ビーアド博士は言う。

「当時のイギリスは、アメリカの協力こそ求めてゐたが、一九四一年においては、却つてアメリカ極東政策の緩和を求めてゐたのである。このことは一月二六日にハル・ノートが手交されるまでは勿論、それ以後もさうであつたと思はれる。」

太平洋会議の論議は、近衛内閣退陣と共に消えた。そして遂に一月二六日が来る。

(III)

一月二六日、ハル國務長官から、わが野村大使に手交された、所謂「ハル覚書」は、日本側がなほ必死に、和平を希ひつゝ交渉を継続しつゝある最中に突如、投ぜられた最後通牒であつた。このことは、それを受けた来栖大使が、直ちに看破した所であつた。ハルの官邸で覚書を受取つた時、来栖は次の様に語つた。「アメリカのこの提案が、日本政府に伝達されれば、日本政府は恐らく手を挙げる (throw its hands) であらう。日本側の提案 (註、五日前に為された案) にこの覚書をもつて応へることは、結局交渉を決裂に導くものと解釈されるであらう。」

しかも、この時日本人の記憶すべき事実は、次の如きルーズベルトの言明である。

前日の二五日、閣議の席上で「我々は若しかすると次の月曜日 (註、二月一日) に日本の攻撃を受けるかも知れない。」と言ひ、「我々の安全を保つといふ問題は、今や陸海軍の手中にある。」と断言した。(「スチムソン日記」越えて二七日、米陸海軍前線基地司令官は、戦争勃発の危険性について警告を受取つた。これによつてみれば、二六日のハル覚書が米首脳自身

によつて、最後通牒と見做されてゐたこと明瞭であらう。

然るにこゝに不思議のことがある。では一体真珠湾の奇襲は何故に出現したのであらうか。これこそ、既にローバート調査団によつて、ハワイのキンメル、ショート両将軍に全責任が負はされたにも拘らず、再度、上下両院真珠湾調査委員会が作られた原因である。調査の進捗は、次のことを明かにしてしまつた。

(一) 一月二五日、大統領は、ハル、ノツクス、スチムソン、マーシャル、スターク等首脳会議の席上恐らく早ければ二月一日に、米国は日本の攻撃をうけるであらうと述べ、出席者は、いかにして大損害を受けることなく、日本に最初の発砲をさせればよいかといふ方法につき討議した。

(二) この際、メツセージを議会に送るのをせず、一月七日まで、日本軍が最初の砲火を発するのを待つ策をとつた。
(三) 國務省、陸海軍の情報局には、日本の外務省からの暗号電や、戦争計画について、詳細な知識が獲られていた。そして傍受電や暗号電は、二六日以降特に戦争の危険が増大しつゝあることを教へてゐた。

(四) しかし前記の最高首脳者たちは、右情報を、統一をもつて正確適切な積極的な命令として、ハワイの司令官に伝達しなかつた。そればかりか、最高権威者は、国防上必要なりとして、ハワイの司令官から要求されていた資料を送付しなかつた事実すらある。

かくて委員会報告は結論した。真珠湾事件の最高責任者は、ルーズベルト大統領であり、以下各長官、といへども、その責をのがれるものではないと。

こゝに想起されるのは、一九四一年一月九日、スマッツ將軍宛のチャーチルの書簡である。それによれば

「ルーズベルトは、自分 (註、チャーチル) に、『私は宣戦を布告せずに、戦争することになるかも知れない。国会に宣

戦布告を求めるといふ段になれば、国会は三ヶ月も議論をつづけるだらうからである」と語つた。」と記されてある。言論の分れる米国民たちを、如何にして戦争にまでつれ込むかは、蓋し大統領の、最も腹心した所であつたらう。

(四)

以上、概略ながら世上一般の論の、全く謂はれなき所以を究明したが、最後に本「大東亜戦争」の意義について、二・三の卑見を記して置きたい。

(一) 本戦争は、久しきに亘る欧米の東亜侵略の魔手より、東亞諸国の独立・自由を実現せんとするの、積極的意義を有つ。この点よりも、旧敵国の称呼たる「太平洋戦争」なる語は、厳正に排除されねばならない。

(二) 本戦争は、前述の如く、日本側が自存の最低限にまで追ひ込まるゝに及んで止むなく武力に訴へざるを得なかつた、自衛戦の性格を有つ。

(三) 本戦争は、米国側にとつて、その極東政略上より、大局的に判断の誤謬があつた。共産勢力の太平洋進出の事実は、雄弁に之が批判を行つてゐる。しかもソ連の場合、それはツァーリ以来のロシア民族の本能的南下政策の現れに外ならなかつた。

戦争開始の責任を、日本側に負はせる一般論に対して米首脳部の責任を追求するものを、米国では「改正論」と呼んでゐるが、参考となる若干を列挙すれば、左の如くである。(一) 内は刊行年。

- (1) ラドハ・ビノド・パール著「日本無罪論」(一九五三)
- (2) R・グレンフェル著「日本勝利の記録」(一九五三)
- (3) チャールス・A・ピアード著「ルーズベルト大統領と一九四一年の開戦」(一九四八)

- (4) チャールス・C・タンシル著「戦争の裏口」(一九五二)
- (5) フレデリック・C・サンボーン著「戦争計画」(一九五二)
- (6) ジョージ・モーゲンスターン著「真珠湾の秘密」(一九四七)
- (7) ジョン・T・フリソ著「真珠湾の真相」(一九四四)
- (8) ロバート・A・セオバルト著「真珠湾最後の秘密」(一九五四)
- (9) ハズバンド・E・キンメル著「キンメル談話」(一九五五)

ソビエツト第二十回党大会における「スターリン批判」を中心に

青山学院大学大学院教授

曰下 藤 吾

今までは神の座にすわつていた、スターリンが二月ソビエツト第二十回党大会において、人民の敵とまで烙印を押されたようですが、いつたいこのスターリン批判がどこから何故におこつたのであろうか。などについて話をしつつ或は話をレーニンさらにはマルクスの共産主義に対する批判にまでさかのぼつてゆこうとするのが今日の話であります。論点は四つあります。

(1) スターリンによつて、かつて個人指導がなされて来たのでありますが、個人指導というのは共産主義の原則であるところの集団指導とははつきり逆なもので、きわめて、非共産主義

的なものであるということを明かにしようとしたこと。

(2) スターリンの資本主義に対する(特に戦後の資本主義)分析が間違っているということ、スターリンは戦後の資本主義はそれが本来もつている矛盾すなわち一般的危機がいよいよ激化して世界の市場が崩壊して資本主義の商品に対するマーケットが異常に狭くなったということを一つの有力な理由としてあげているが、現実にはスターリンが言つたように目前の没落が迫つたとは言えない、今日ではかつてない好景気が戦後十年間つづいてきているということは共産主義社会もこの事実を否定出来ない。こういうことが新しくモスクーにおいて取り上げられたということ。

(3) 次は革命の問題ですが、資本主義というものから社会主義に移っていく革命は、レーニンや、スターリンのいう暴力革命ではなく、この移りかたは国により時代により民族によつていろいろの移りかわり方がある。今日のように世界的に労働者の力が総体的に強まった段階にあつては、昔のような暴力革命をやらなくても、平和的方法によつて革命をやる可能性が非常に増大したということ。

(4) 戦争論、戦争不可避論ですが、従来帝国主義の戦争は避けられないといわれたことは今度の党大会においてはどうも言えないのじやないか、勿論絶対的に戦争は起らないということとは断言出来ないが、それかといつて戦争が必ず起るとはいえない。なぜ言えないかという平和革命の論拠と同じで世界的に見て労働者の力が総体的に強まったため、今日資本家が戦争をやろうと思つても労働者階級がこれを押えることが出来る。だから今までのように必らず起るといふ可能性はなくなつた。これがスターリン批判に対する第四点であります。

以上が大体表向きスターリン批判ですが、まだこのほかに秘密になつているものがあるらしいのですが、一応公けにされた四つの批判点については、これが一体スターリン一人に対す

る批判にとどまるのか、或いはこれはさらにレーニン批判にまでいくのか或はさらにマルクス・エングルスまでいくべきものであるか、又このスターリン批判はスターリン自身の間個人の間個人に欠陥に対する批判か、それともソビエツト社会そのものの中に、ああいう行きかたをさせる何ものかがあるかどうかの疑問がここにつづて来る訳です。公けにされた四つの批判点の中最初集団指導の原則ですが、集団指導ということは何か私もこれはソビエツトも性根を入れ替えて民主主義の方に乗りかえるのかと思つても、どうもそうではないらしい。集団指導とは言つても、どういう集団が指導するの、やはり依然として共産主義が指導するとなればこれが第一おかしい。いま一人の軍司令官がいたのを今度では三人の司令官にする。すなわちジウコフ、ミコヤン、フルシチョフとしたのでしようが一体本質においてなにが違うのか。一人では間違つた場合詰腹を切らせられるが合議でやつたのだということになると腹を切らんでよい。ソビエツトもだんだん命がおしくなつたのだ、などという人もあるが、しかしどうもおかしい。どうもソビエツトがスターリンを批判する場合特に注意しなければならぬのは、集団指導という正しい共産主義の指導理念を確立したのはレーニンであつて個人指導にこれを引下げたのは、スターリンである。個人指導すなわち個人崇拜は悪い習慣であると批判した。ミコヤンは結局のところレーニンの権威においてスターリンを批判しているようです。ここに一つの問題があるようです。スターリンを批判しているがレーニンは批判出来ない。それならばこれはレーニンの個人崇拜ということにならないかという問題が起つて来る。

私はごく最近都内である共産党の学者の人と話をしたのですが、スターリン批判はいい、しかしどうも分らん点がある。第一は今申しました、スターリン批判が結局レーニンの権威にすがつてはいはないかということ、第二点はスターリンの個人

崇拜の誤りに対してソビエツトにおいては、いまや国論にまでなつてゐるが、このスターリン批判に対して、ソビエツトの国民は更に批判をする自由はあるだろうかという点です。それにはその共産黨員も答弁に窮したやうでした。

すこしまじめに、ものを考える人はこのような気持を持つてゐるようですが、たとえば六月頃イタリ共産党のトリアツチがこのスターリン批判に対し疑問があると言ひだした。(世界週報八月十一日号参照)

一今度のスターリン批判はスターリン個人の欠陥から来たのではなく、ソビエツト社会の中にこういうことを引起す、なにか原因があるのではないかとトリアツチは言つた。このことに対してモスコフの答弁が日本の新聞に出たのですが、肝腎のトリアツチの批判に対しては答えていない。ただ「おおむ」の如く共産主義の理論に間違ひはない。間違つたのはスターリン個人であると繰返えし言つてゐる丈である。そこでトリアツチもあなた方の答弁には納得出来ないからスターリン批判に対する批判は撤回しません。以後我々はモスコフ共産党の指令は受けないといつてしまつた。少し繰返えし弱いがフランスの共産党も大体同じ事を言つたやうですが、言わないのは日本の共産党だけです。今日モスコフ共産党の首脳が何か言葉をまぎらさねばならぬ理由が何かあるのではないかと。それは私の考えではそれもその根源においてスターリンの悪政を必然ならしむるものでなくマルクスの唯物史観、更に社会体制の中にみとめられるのではなからうか。こういう問題がひそんでゐるのではないかと思はれます。

そこで問題をもつと根本的なものにもどして見ますと、それは「共産主義の社会改革をやる場合、資本主義としてではなく新しい官僚制度が出来て来るのではないか。この官僚機構の中で新しい一つの支配階級がその中から出て来るのではないか」トリアツチもこういつてゐる。実はこの議論は古いもので

あつてトロツキーがすでにスターリンのああいうやり方に対しては新しい官僚主義である一つの支配階級が出て来るということをつたため、とうとう追放され一服もられたいきざつがあります。ソビエツトの共産主義が新しい官僚主義と結びついた新しい支配階級の権頭、さらにこれと結びついた政治的独裁といふこと。これが根本に横たわるところの一つの問題ではないかと思ひます。

私共が聞いたところでは二月の党大会で黨員の中でこういう問題も出ております。スターリン批判と関連して、スターリンのああいうような個人独裁が行われたのは、共産党ただ一党でやるからソビエツトのような体制の欠陥が現れたのではないかと。もしこのようなことが行われんようにするためには、ただ頭の意識だけではなく、政治機構の方で個人独裁の起り得ない何かそこに防波堤を作らねばならぬのではないかと。それは取りも直さず共産党と違つた他の政党を認めるといふ複数政党の議論が出たということがフランスの新聞記者によつて暴露されたのですが、この問題についてもやはり将来とも共産党一党でやつていつて結構であるということにしたやうです。なぜ共産党一党でソビエツトはいいかというと、ソビエツトは資本主義社会とは違つていろいろな階級がない。違つた経済上の利害を持つた階級がないから、利益を代表するものはいつていいと考へたのであるがこれは実におかしなことなんです。今日のソビエツトにおいて農民と労働者の階級、農民の中の下のプロレタリアとスターリンあたりより勲章などを貰う上層の労働貴族、賃金でも十倍以上も貰つてゐる人々とか、文学者、哲学者、科学者というやうな資本主義的な自由職業者のような人々が利害が完全に一致してくるということとは有りえないはずで、それならばやはり違つた政党といふものを認むべきではないか。そこまで行かなければ個人独裁を根絶することは出来ないと思はれる。

しかしこうも言われる。そこまで行かなくてもいいじやないか、共産党一党にしておいて、その中でいろいろ意見が違つていいぢやないか。相互批判を通ずればいいぢやないかと言う人があるが、それならばその相互批判というものがあつたならばスターリン独裁ということはなぜ起つたかと反問せざるを得ない。相互批判が行いえないということを事実が実証しておるのではないかと私は思います。

民主主義というのは一つの手続きです。しかるに個人指導はいかぬ、集団指導だと言いつつ、第二政党は必要でないということは一たいこれはどうしたことなですか。これではスターリン批判はわけのわからぬものになつてしまふ、スターリン批判が単にスターリン個人批判だけでは駄目で、レーニン批判まで行かねば、いやマルクス批判まで遡らなければ私はいかぬと申す。今日スターリン批判を余儀なくされたものは、スターリン一個人ではない。スターリンのあの驚くべき独裁を余儀なくされる場所があるような共産主義的な計画経済のやり方の中に含まれているということが大切な眼目であると私は思つております。

では次にはマルクスをどう見るかという問題に移りますが、結論的に言いますならば、マルクスの中には本来二つのものが含まれていると思われまふ。一つはヒューマニズム特にマルクスが若い時に書いた、例えば一八四四年の「経済学哲学草稿」なんかを読んで見ますと、マルクスは唯物論者ではない。ヒューマニズムの立場から資本主義に対する批判、人道主義の立場からの資本主義の批判がなされているようです。ところでその考え方は途中で消えたかという、そうではなく、このようなマルクスのヒューマニズムが一貫しておることは事実である。しかしマルクスのヒューマニズムそのものにあやまりがあつたことを見落してはいけない。もつとも晩年に書いた「資本論」を読んで見ますと、そこには人間の自由だとか、人格だと

かというヒューマニズムの概念は出ていませんが、しかもマルクスのヒューマニズムと云うべきものはやはりあるのであつてこの本を近代経済学と同じような気持で読んでみるとよくわかりません。しかしそうかといつて、マルクスのヒューマニズムの名ものが首尾一貫したヒューマニズムであると錯覚してはならない。

マルクスは資本論第一巻の価値と商品のところで、経験的に与えられた経済現象、経験的に与えられた交換価値が何でできるかを説明しようとしている。経験的に与えられた交換価値の最後において、人間がどのような生き方をしているかということを見ようとしているのであつて、交換価値はどうきまるか、物の値段の経験的な経済法則は何かというように、それを彼は研究しているのとは違ふ。近代経済学とは次元が異つている。そこに重点になつてゐるのは人間の生きかたに関する問題である。

価値の実体が労働であるということは、論理的に考えれば考へるほど疑問が百出すること、既にベーム・ヴァウエルクと十九世紀の終りにその論争はなされたことです。しかしそのままやつてもマルクス経済学は倒れない。なぜかという、マルクスにおいては伝統的な経済現象それ自身が問題ではない。その背後においては人間がどういふような生き方、実存の仕方を資本主義社会でなしているかを問題としてゐる。マルクスの「経済学哲学草稿」において資本主義といふものは言換えれば、人間が人間でなくなるような生き方をしていると言つておられます。これはマルクスはヘーゲルの言葉の自己疎外という言葉を使つて自己疎外の中で労働の疎外、労働者が資本家に雇はれて労働するほど、労働者は人間でなくなつていく。資本主義は物の世界と人間の世界が離れて、人間が疎外されている。人間の作つた物が却つて人間を支配して、逆立ちした世界となる。こういうことをマルクスは言つておる。この考え方はその

根底から人間の人格に理念を求めなければならぬもので、これはヘーゲルが歴史哲学で言つておる人倫のイデーが実現されるような、そのような人倫的な自由の実現をめざしているのであつて、この限りにおいてマルクスはヘーゲルの立場を承認している。これがマルクスの若い時の立場であります。しかるに「資本論」においては、人間疎外という言葉は出てこないが、例へば剰余価値の搾取という言葉が出ております。剰余価値の搾取は、本来労働者は自分の生産したものは悉く労働者が所有すべきであるという道徳的立場を認め、労働者を権利の主体として考えなければ認められないものであります。このようにマルクスの中には人間肯定がある。すなわちヒューマニズムの精神が若い頃の作品にはつきりしていたのですが、中期以後の作者を見ると、人間の人格と自由というようなものが隠れて、いわゆる唯物史観の世界になる。そこには人間の自由・人間の人格といったものは歴史の上では発言権はない。すべてのものは物質的な生産力、生産関係のいわゆる弁証法の遊戯によつて動かされてゐる。歴史のコースが恰も人間の意志でもつては曲げたり縮めたりすることは出来ないような自然史的な必然史的なものになつてしまつてゐる。

ところがマルクスのこういう考え方は人間は結局のところ、物によつて支配されるということであるが、この考え方はずつと突きすすむとマルクスの無神論になる。マルクスの大学の卒業論文である「デモクラチスムの自然哲学とエピキユロスの自然哲学との相違」においては神の否定、哲学の否定がなされてゐる。こういう宗教というものは結局人間が神というものを頭の中で作つたという、即ち「宗教は民衆の阿片」だという無神論がずつとマルクスの思想体系において示めされてゐる。これが晩年の唯物史観というものに連なつていつております。

しかしこういう風にマルクスの中においては、一方では人間が肯定され、人間が救われるのは共産主義であるとする。しか

しいまつ、無神論から出てくる一つの極がある、人間否定という無神論から出てくるものがある。マルクスが折角人間性の肯定の上に立ちながら、卒直にはそれを言うことは出来ないで遠廻しに言つてゐる。それは一方において人間の否定があるからで、人間マルクスの謎を解くためにはマルクスをここまで追及せねばならぬと思ひます。

今日フランスでベストセラーになつたピエール・ビゴ（Pierre Bigo）という人が「マルキシズムとヒューマニズム」(Marxism Et Humanisme) という本を出してゐます。この本においてビゴは「マルクスは人間の偉大さは人間が労働によつて自然を征服することである。人間の労働、即ち意識的に計画される人間の労働によつて自然を支配してゆくこと、これが物質的な生産力である。マルクスの場合には物質的な生産力が発展することが人間の進歩である。物の生産が豊かになる、このことが社会の進歩だと考えた。ここにマルクスの人間、ヒューマニズムの致命的な危険がある」と言う。

「共産主義の中では手足になつて動く一個の独立した人格ではなく、そこには、共産主義社会という一つのメカニズムがあつて我々個人は全体の手である。働らく手や足になつてしまふ。ここにマルクスの驚くべき人間性がこの中に含まれてゐるのではないか。ここでは、社会は全智全能の力をもつてすべての政治的な、経済的な権力をもつてゐる。個人は単なる動く手足にすぎない。そこに一体個人というものがあつたらうか。個人というものは元来インディバイディング (Individing) 分けることの出来ないものであるが、マルクスは考へてゐるような将来社会である共産主義社会では個人というものがいわば社会の中で無力になつてしまふ。資本主義の場には守る手がある。財産の自由、個人の財産の何がしかがある。自由を守る防壁があるが、すべての経済力というものが社会に掌握されるならば、社会の手足になる以外には、生きてゆくことは出来ない。

フランスはヒューマニズムの立場から、マルクスの経済学に対しては同情をもっているが、最後の点において、マルクスとたもとを、分かつたねばならぬ」という。マルクスはヒューマニズムを説いたというならば、その見方は正しいと云わねばならない。しかし先に見たように一方ではその結論として人間の否定が強く押し出されている。私はこれは結局のところ、人間というものをただ、単に生産の面においてとらえ、人間の偉大さを労働において抱えた物質的な生産力においてのみ人間を扱えたことが、マルクスがいかに浅かつたかということが言えるのではないかと思う。

マルクスの危険は問題をただ経済的な次元だけで考えていたということ。しかもそれは資本主義はこういう欠陥がある、失業、恐慌というものがある。これは何とか合理的にしなければならぬということに止るならば、問題は起らぬが、その次元を越えて人間を救おうというメシヤニズムがある。(実はマルクスの理論が魅力があるのはこのため)即ち経済学の次元において人間の救済を説いたのである。そこにすべての悪が地上より消滅する、すべての犯罪がなくなるという、ここまで行けば宗教である。ここに人間の救いを説くというマルクスの致命的な弱点がある。人間の開放を説きながら窮極において人間の否定に終らざるを得ない。

ビゴアの説を更に結論的に要約いたしますならば、元來革命の理二は人間を個人的権力の横暴から解放することであつた。理論の上ではあらゆる政治権力を国民にもたらしした。しかしその革命は一つの絶対主義の危険を作り出してゐる。すなわちそれは、個人の権力を政治の分野において廃止しながら、経済面においては、資本主義生産のあらゆる発展によつて多くの欠陥をつくり出してしまつた。しかしマルクス主義の中にもフランス革命の理念とは裏返しの関係ではあるが、同様なあいまいさが含まれている。今度はフランス革命とは反対に、その資本主

義的な経済生活を集団化して、あらゆる権力、経済的権力までを一切適切プロレタリアートの国家に持去つてしまおうとする、すなわちマルクス主義は個人主義の完成を求めると同時に逆にそれへの反対立として社会主義を標榜している。ここに大きな矛盾がないであらうか。そのことは同時に自由の問題を全く反対の仕方で提出することになる。もし個人がその同胞の間で最小限の個人的な力をすら、享樂することが出来ないならば個人にとつてもはや、自由というものも存在しない。生産手段の所有を廃止することによつて、社会主義は資本主義のもとに於ける個人自由の不完全を、再び不完全なものとしてしまふ。すなわち新しい権力は他の自由を危険に曝すことになる。それは社会主義においては、また、職権の名において、それに全く同じ結果をもたらしている。理念の名に於て命令が出され、その職務の絶対主義によつて冷酷な論理が開陳される制度、その絶対主義は嘗つて資産の名において支配をほしきままにした所有者のそれと同様に、個人を脅かすものとなる。このような政治権力と経済力の恐るべき結託が組織された時こそ警戒しなければならぬ。個人が集団の前にあらゆる生活の場を奪はれ自由が最大限抑圧されるという大きな危険をはらむということ、そこに人間の危機が訪れるともいつてゐる。

マルクス経済理論の覆の中に含まれてゐるのは、実はこのような絶対主義であつて個人にはその経済的権力からする何等かの抵抗を許すようなところが全くない。

かつてブルジョア革命が自由の絶対化にみちびいたごとくに、プロレタリア革命は又集団の絶対化をみちびくものに他ならないとビゴアは言つてゐる。

今度のスターリン批判も、二億のソビエットの人民の心が徐々に動いてきたことを意味しています。スターリン批判をしたのも一つの戦術と思われませんが、もしあの時しなければ民衆の間からのスターリン批判が出、さらにレーニン批判にまで遡る

という危険が感ぜられたので、下よりの革命を予感し逆にかからの批判をなしたと見ることが出来ると思います。

このことはただちに良心的自己批判がモスコフで行われているとは思われませんが、やがて民衆の下から起るヒューマンズムの運動はスターリン批判を一つの契機として、例えばボズナン暴動、スターリン工場の暴動のように、次々に批判を生み、あるいはやがてレーニン批判、マルクス批判にまで発展せざるを得ないのではないかと思われます。(文責在記者)

マルクス資本主義崩壊

必然論について

長崎大学助教授 吉田 靖彦

マルクスの資本主義崩壊論については、我が国でも既に高田、小泉博士等のマルクス主義批評家によつてその理論上の誤謬が指摘されているが、ここでは主として、実証的側面から、マルクスの資本主義崩壊論の命題が事実検証に堪えうるものかどうかを検討したいと思う。

若しも理論が事実検証に堪ええないとするならば例えその理論が論理的に一貫性を失わなかつたとしても、それは現実の経済を分析する武器としては無力である。例えば、完全雇傭の前提にたつ新古典学派の経済理論が現実の非自発的失業の存在をその論理から説明しえず、ケインズの「一般理論」の出現によつて著しく色あせた如きはその適例である。

ところで、経済学で事実検証とは経験にもとづく事実観察と統計的検証である。云わば、自然科学に於ける実験に相当するものであるが、社会科学の場合、事実検証がきわめて困難である。それは云うまでもなく、過去に生起した経済事象を、自然

マルクス資本主義崩壊必然論について (吉田)

科学、殊に物理、化学の如く実験室に於いて、隔離し、再現することが不可能だからである。

然し、経済学では最近統計資料の整備、統計測定方法の顕著な発達によつて特定の理論仮説の正否の検証がかなりの信頼度をもちうるまでになつた。かくして経済理論は事実検証による条件吟味を経て、益々精密さを増し、かつての哲学的形而上学的色彩を払拭し、実証科学としての性格を強くする様になつた。要するに事実検証に堪ええない経済理論は、その前提が誤つてゐるか若しくは理論構成の仕組自体が誤つてゐるからである。このことを銘記した上で、マルクスの資本主義崩壊論に事実検証のメスをあてて見よう。

マルクスの資本主義崩壊論に就ては今ここで詳細説明することは省略するが、参考迄にマルクス経済学の正統的解釈をもつて任ずるソ同盟経済学教科書ではこの点どの様に述べて居るか、必要部分を抜萃して置くこととする。

「資本主義的蓄積の一般法則は、資本主義の基本的経済法則——剰余価値の法則——の作用を具体的にあらわしたものである。剰余価値をふやそうとする慾望は、搾取階級の側での富の蓄積と無産階級の側での失業と貧困と抑圧との増大をもたらすものである。資本主義が発展するにつれて、プロレタリアートの相対的貧困化と絶対的貧困化とはすすんでゆく。プロレタリアートの相対的貧困化というのは、ブルジョア会社で搾取階級のとりがたえず大きくなるのに反して、国民所得の総額の中の労働者階級のとり分がたえず小さくなることである。プロレタリアートの絶対的貧困化というのは、かれらの生活水準そのものがさがることである」(教科書第一分冊二四四頁)

さて以上のマルクス学説の見解が正しいか否か、事実によつて検証しよう。

先ず、相対的貧困化、これは国民所得の分配の問題である。アメリカに於ける国民所得研究の梅威クツネッツは最近一經

「成長と所得不平等」(アメリカン・エコノミクス・レビュー誌一九五五年三月)と題する論文に於いて、精細な統計資料の吟味の後、次の様な報告をしている。

「示唆される一般的な結論は、稍々幅の広い階層に於ける年々の所得の帰着を基準として、測定された相対的所得分布が、均等に向つて変化してきている——これら二回の趨勢はとくに一九二〇年代以後認められるが、おそらく第一次大戦以前の時期に始まるものであろう——ということである」。更に、この統計資料が直接税控除前のものであり、直接税を控除し、政府の無償給付を含んだ所得分布では、更に不均等が減少するのであろうと述べている。

少し面倒であるが、実際の数字をあげると「合衆国では家計間の所得分布に於いて、二つの最低五分層(所得者層を五階級に分ち、その最低のものと次のもの)の所得者の分け前は一九二九年の一三・五%から第二次大戦後の一八%に上昇している。これに反して、所得者の最高五分層の分け前は五五%から四四%に下落し、最高五%の分け前は三%から二%に下落している。イギリスでは、所得の最高五%の分け前は一八八〇年の四六%から一九一〇年乃至一九一三年の四三%、一九二九年の三三%、一九三八年の三一%、そして一九四七年の二四%にまで下落している。低位所得者八五%の分け前は一八八〇年と一九一三年の間、四一%と四三%の間にかなり不変にとどまつているが、しかし、その後、一九二九年の四六%、一九四七年の五五%にまで上昇する」と。以上は先の一般的結論を数字によつて裏付けたものであるが、要するにこれで、資本主義経済発展の高度な国にはマルクスの相対的貧困化の命題は全く妥当しない事実が解つた。クヅネットの前記論文では後進国に於てはマルクスの命題はかかなり真実性をもつてゐることを示している。従つてマルクスのみだ十九世紀の経済は、現代の近代的残骸を著しくとどめた後進国の経済に相応するもので、

マルクスはその推理の誤りから、前世紀の労働者の貧困という経済事実を経済発展と共に強化されると考へた。ところが経済の事実はこれと逆に進行していつたのである。

更に、マルクスの絶対的貧困化(「教科書」によると、これは具体的には実質賃金の低下、失業の規模拡大とその期間延長、労働条件の悪化、勤労者の栄養と住宅条件悪化等を指す。)についても、統計ではむしろ逆の反証があげられる。

アメリカに於ける平均時間賃金、平均週労働時間

	平均時間賃金 (単位ドル)	平均週労働時間 時
1909	0, 193	51.0
1914	0, 223	49.4
1919	0, 477	46.3
1925	0, 547	44.5
1930	0, 552	42.1
1935	0, 550	36.6
1940	0, 661	38.1
1945	1, 023	43.4
1950	1, 465	40.5

	失業率 (%)
1929	3.2
1931	19.5
1933	24.9
1936	16.9
1941	9.9
1946	3.9
1948	3.4
1950	5.0
1952	2.7
1953	2.4

右表は、14才以上の就労可能人口に対する失業者の割合上に、米国の場合の時間賃金、労働時間、失業の趨勢を示したが、数字の語るところは、マルクスの説くところと全く逆で

あることが理解されよう。

以上、マルクスの資本主義崩壊論の前提である資本家的蓄積法則は米國、英國の高度資本主義國には全く妥当しないということが、事實検証によつて明らかに示された。

この事實検証に対して、マルキストは本國の經濟の發展は植民地の搾取によつて可能であるとする修正見解をもつてするのが一般であるが、これは、資本主義の高度化した國に革命が起るとするマルクスの基本命題を根本から覆す自己矛盾に陥る。

最近のソ同盟では、スターリン批判以後、今迄の「教科書」を含めた資本主義認識が公式的教条主義的偏向を犯した事實についての反省が漸々になされつつある。これが、今後如何様に展開するかは興味あることである。

共産治下国民生活の実態

——最近のソ聯中共觀をつく——

岡山県笠岡商業高校教諭

名越 二荒之助

ソ連には貧乏人が居ない。失業者も居ない。生活は完全に保障されている。しかも働かさずすればその能力と実績に応じていとも合理的に報酬が貰えるから、皆んないそいそと希望に満ちて働いている。

これは招待されてソ連を見て来た長田新氏の言葉の一節だ。長田氏の見たとソ連は正に地上天国の觀がある。その五年の経験を持つ私には長田氏がどこを見て云つてをのこよくわかる。たしかに或視角にカメラを据えればこう云う結果が出る。併しこう云う言い方は現在的一般ソ連人だつたら毎日聞かされて

共産治下国民生活の実態(名越)

いる事だから疑う人も少いだらうが、複雑な思考法の中に生きている日本人にはとても脱得力はない。長田氏の見方は全般にホリも陰影もないから常識ある者は信じようにも信ぜられない。長田氏にはどうしてそう云う者が云えるのか、納得出来るようにこの平面的な見方に一つ逆光線をあてて、も少しソ連をウキボリして見よう。

ソ連の肉体労働者は全部固定ノルマで働くのだから、ノルマを消化する能力のない者は貧乏をまぬかれる事は出来ない。だからノルマの脱落者は乞食になる事もあり得るのである。この場合ノルマ修正の為の団体交渉やストライキは許されず、ノルマ超遂行の為の協力運動があるだけだから、かの國に於ける社会主義的貧乏はナマケモノとシノニムになつて来る。その上人民は身体も國家管理されているから所屬医師の診断なく作業を休む事は出来ない。作業中怪我をしてもそれが労働忌避の為に怪我したかどうかを検討される程だ。遅刻も度重ると刑罰の対象となる。況んや失業する事も転職する事も政府を批判する事も許されない。思想もマルクスレーニン主義と云うイズムがチャンと与えられるし、文學も音楽も國定の配給品だ。國民の生活はこのように精神生活に至るまで「完全に保障」されて、皆んな五ヶ年計画に基く大建設に參画している。國民全部がこのように自己を捨てて共産主義段階への夢を持つようになる。ド外れた社会主義的樂天主義が誕生して「いそいそと希望に満ちて」働くようになるのだ。

このように長田氏の一面的なソ連觀に逆光線をあてて見て、果してそのどちらによりリアリティが出て来るか。私はこの問題を更に具体的な事例で説明してゆきたい。

二

ソヴェト社会は勤勞榮譽觀に裏づけられた生産の躍動的な寒困氣の中に明けられている。労働者は口を開けばプロツェン

ト(ノルマの%)の話である。

これはソ連抑留中ハバロフスク日本新聞社で日本人の一啓蒙活動」に専念した作家山田清三郎氏の言葉である。山田氏が云うようにツヴェトの労働者が勤勞榮譽観に燃えて、生産の躍動的な雲雨の中にて明けてくれていたのであつたらノルマなんか作らなるともよい。生産能率はほつておいても上昇して仕方がなくなるはずだ。それをソ連では困疾者や散髪屋に至るまでノルマを適用して作業内容を計量する。元來質的な作業内容を量的なノルマで計算するのだから、合理的な結果を出す事は與に困難な話だ。土堀り作業と云う比較的単純な作業をとりあげて見ても、砂の混つたやわらかい土があるう、粘土の多い固い土があるう、根ツ子のまつわり乾いた土があるう、石ころの多い土があるう、根ツ子のまつわりついた土があるう、零下二十度の時の土、十度の土、零度の土、更には作業時に貸与される事になつてゐるスコップや十字鍬がそろつて優秀な場合、そうでない場合と条件は様々に變つて来るのだ。それらを全部正確に經濟計算の中に盛込んでゆくには一人の労働者に一人のノルマ係が必要になつて来る。いやノルマにとられ出すとそれでも不合理になる。私は在ソ五年間色々の作業に従事して来たが、その間ノルマを一応計量出来た仕事は、毎日大凡同一条件で働ける煉瓦工場に於る製品搬出の仕事だけだつた。その他建築作業の如きでは全部ノルマ係がその時の印象で評価して呉れた。だから労働者は作業そのものより、ノルマ係がどんなパーセントをつけて呉れるかと云う事の方が先に心配になつて来る。だから彼らが口を開けばノルマに対する不満か、パーセントを誤魔化す話だ。ノルマ係をうまくたしなめてパーセントを多く貰つた時には、ノホホンとしたり顔してオシヤベリなんかやしやしない。

以上のように私の体験は長田氏の場合と全く逆の結論となる。このように共產主義國の生活は理論に心酔して表面を見た

場合と、實際に生活を経験した場合では雪と墨程の違いが生じて来るのだ。

三

石川達三氏は最近ソ連中共を廻つて来て、共產主義諸國が巨大な國家の意志のもとに着々とあげつつある成果に驚嘆して色々の發言を試みておるが、それらを可能ならしめてゐる統制組織の内裏には思ひを致してないようである。

元來共產革命は農業を協同化し、全産業を国有化する經濟史の大変革だから、國民生活の末端に至るまで革命の推進力を徹底してゆかねば成功はおぼつかない。ナチスやフアツシヨのような單なる上部構造の変革をもたらす政治革命の爲の統制力では、到底その実をあげる事は出来ないのである。國民全部を政黨の一員の如くに組織化して、人間革命をも行わしめる政治テクニックが生み出され、そしてそれが維持されねば、ソヴェト組織は安全を保つ事は出来ない。その為にとられたコミュニズムの最も特長的な方策として、私は相互批判をあげたい。果せるかなジユダーノフは「批判と自己批判なくしては真に革命的な鉄の規律のもとに結集せられたプロレタリアートの黨を創造する事も、プロレタリアートを政治的に育成する事も、自己自身の隊伍の中の敵を摘発する事も出来ないであらう。」「批判と自己批判は社會主義的建設に於ける欠陥を見出し、それを除去して前進する爲の鉄輪である。この真理は泉の水の如く透明である」と強調してソヴェトデモクラシーに理論的基礎を与えている。即ち共產國にあつては國民相互が常時批判斗争をやるように仕向けてるのである。だから自己批判だけではすまぬのである。自己批判してその自己批判の事実を吊しあげざる實際に於て示さねば、その自己批判の事實は認められぬのである。警察權による國家統制なら、嘗ての地下共產黨のようにのがれる事が出来るし、のがれられないまでも最初から洗滌し

ておれば別に罪を問われる事はない。併し共産国では沈黙しておれば一沈黙は敵に通ずる」として摘発される。相手を摘発しなかつたなら自分が摘発される。機先を制して摘発した者が勝である。作業を通じ生活を通じ常任坐臥が斗争である。正にコミニズムの国では国民相互がコップの中に入れてられたサソリの運命に置かれるのである。こう云う意味に於てコミニズムには批判の自由がない所か、實際は相互批判に於て支えられていのである。誠に批判と自己批判と云うソヴェートデモクラシーはこれを適用する側にとつては、ネジや油がなくても永久に廻転し続ける鉄輪の中に人間を投げ入れる事が出来る。併しこれを適用される側にとつては、四六時中何時摘発されるかも知れぬ恐怖感情に悩まされ続けるのである。

郭沫若氏が谷崎潤一郎氏との対談でも云つているように、自分の親でも反革命とあれば摘発して大衆裁判にかけるのである。宮本百合子が「新しきシベリヤを横切る」の中で、タモスクワを立つ前こんな事件があつた。何処かの工場でアメリカ技師を招聘した。技師は職工を何人か連れて来て中に黒人労働者も居た。白人職工が何かの事で議論する間なくいきなり手をあげて黒人の仲間を殴つた。その時周囲に目撃していたのはソヴェートのプロレタリアートだ。直ぐその場で一般集会——同僚裁判が開かれた。その白人職工はその工場労働者の決議によつてアメリカへ送還された。と云つて「生産者同志裁判」の事実を紹介している。即ち黒人をなぐつたと云う、人間の常識からすれば個人の倫理感情に関する問題のだが、その事ですぐ職場に於て同僚裁判を開き、その決議が法的効力を發揮して本人はアメリカへ送還されてしまうのである。罪刑法定主義と云う刑法上に於けるヒューマニテイの原則はキレイにふみにじられて(ソヴェート刑法十六條)切捨御免と云う封建時代に近い行為が集団の名に於て何の疑もなく行われているのである。

中共から蠅や蚊が居なくなつたのも、中国共産党が天下をと

共産治下国民生活の実際(名越)

つたから忽焉として蠅や蚊が雲上霧散してしまつたのではなくて、結局はこの相互批判活動の成果であつた。この場合は町の委員会が活躍した訳である。町の委員会は生活の末端細胞で、特にその青年部会の活躍は目ざましく、各家々を廻つて蠅や蚊の有無を点検して行つたのである。一匹でも居れば「この家には蠅が居ります」と云う立看板を立てて帰る。又不意に廻つて行つて居なくなつたら御丁寧に「この家には蠅が居なくなりまして」と云う立看板を又立てるのである。それでも協力しない場合は町の委員会と批判が行われるのである。革命直後各町村に於て大衆裁判による銃殺刑が行われたり、強制労働收容所に送られたりした戦慄が今尙残つている民衆は、無条件的に協力をおしまなくなつているのである。

併しながら生活の末端に至るまでこのような相互批判と云う神経の消耗と、一種の恐怖心をあふり続けると云う事は至難の事なのであるうか。僕の見たソ連のホルホズではどこでも相互の批判斗争を放棄していた。ジャガイモの收穫にあつてもは茎だけを先づ抜いてゆく。そして転り出たジャガイモだけを拾つてゆく。多くの手が地中に埋つていても、それはニ・チエオー(俺の知つた事じゃない)である。何ヘクター收穫したから何ペースントと云うようにノルマの算定基準があるので、農民に見ればノルマ係に收穫したように見せておけばよい訳である。このような行為は反革命行為として完全にソ連刑法五十八条に抵触させる事が出来る犯罪であるが、相互批判を放棄した多くのホルホズでは要領よく相互妥協ですましているのである。

こう云うホルホズの腐敗(?)をフルシチョフは知つてか知らずでか、二十回党大会では共産党員を各ホルホズに新に二万人派遣すると言明している。この言明に慄然としたのはソ連農民であろう。この言明は党員指導による相互批判斗争の再開を意味するからである。即ち新に犯罪者を大量に摘発するぞ

と云うフルシチョフの警告に他ならないからである。

誠に共産主義の前途は多難と云うより他ない。農業の不振は云わずもがな、国民の生活に最も直結した商業に於ても、スターリン死後ミコヤンやマレンコフによつて、その配給の不円滑、品質不良、横流しの横行、行列長い、サービス精神の欠陥等、数度にわたつて指摘せられたが、今尙改善向上の余地は見られぬ様子である。これらソヴェト国民生活に直接関連を持つた諸難問を、ソヴェト機構の本質的改変なくして打開せんとするならば、今とりあげている相互批判自己批判の尙一層の強化より他ない。それはやがてオーツェルのユートピア小説「一九八四年」を上廻る人間性の弾圧となつて現われよう。然も共産党の指導者達は共産主義社会実現の夢はいささかも捨てないようである。共産主義への狂信は遂にとどめる事が出来ない。イデオロギーの囚になつた信奉者達は、いたましくも人間性の破局にまで盲信(猛進)してゆくのである。

四

ドイツの碩学ワントは、自然科学の基礎が物理学であるように、精神科学の基礎を心理学に置くべき事を説いて、人間擁護の爲の社会科学的方法論的基礎を提示している。このワントの方法論に脈絡して経済学を展開しているのがアダムスミスである。スミスは欲望と云う人間本能から説き起して、現実の経済を自然的秩序と呼称した。彼の体系は心理学に基礎を置くから人間性の自然なる反映社会を追求する結果となるのである。

これに対してマルクスは、階級対立と云う結果論から解き起して、原始以来の経済機構の破壊をねらつた。そして彼はその結果招来せられるであろう地上天国を夢見たのである。マルクス主義を建国の神話と仰ぐ限り、人間性は巨大なる共産主義社会建設と云うオペリスクの下に犠牲になり続けるより他ない。

果せるかな地上天国の実験国家ソヴェト同盟では、ソヴェト的男女同権が女性に重労働を課す結果となり、恋愛と結婚の解放が大眾討議による愛情の人民管理となつて実現されてゐる。失業がないと誇らかに語らるながら、自らの意志で職業を開拓してゆく独創的精神は封ざられ、中間搾取をなくすると云う理論の影に商業精神は全く地を払い、農村の社会主義的發展を約束しながら、社会主義的所有の土地は私有地の半分以下の收穫高しかない状況である。

搾取と貧富の差をなくすと云う言葉のもとに、ケタ外れた豪華な地下鉄やモスコウ大学が誰の反対もなく、そして消費生活の貧困をよそに建設されてゆく。全人口のわづか二・三パーセントに満たない黨員は凡ゆる階層に浸透して、幕府的目的役としてふるまつている。

更にあげるならば労働者農民の利益を代表する労働国家とは名ばかりで、労働者から団体交渉権、罷業権さえも奪い、人民の意志を反映させるはずの人民政府は自由選挙さえ廃止しているのである。

そして何より特筆せねばならぬ事は、人間性の解放を約束しながら、国民全部が画一的なイズムの妄者に改造されてしまつてゐる事である。ツァー時代のロシア文字に画かれた個性の強いロシア人の独立不羈の精神は奪われて、国民全部が順応と盲従の奴隷根性に墮し去つたと云う事である。

このように次々と指摘してゆけば際限なく理論の真昼と人間性の暗黒とが対照されるのである。それが「永久の白昼」と「二十五時」を同時に運命づけられた変らざる共産国の姿であるのだ。

「昭和史」をめぐつて

——とくに人間性の問題について——

熊本大学講師 森 祐三

最近、唯物史観の立場に立つて書かれ、且つ広く読まれた「昭和史」(遠山・今井・藤原三氏共著)に関して、亀井勝一郎氏の批判(文芸春秋三月号)があり、更にこれに対して和歌森太郎氏・遠山茂樹氏の論文(中央公論六月号)が現われて吾々の関心を集めた。それは正に唯物史観の歴史解釈と人間性の問題に関するものであつた。

亀井氏は、歴史を学ぶ二つの欲求として、「自己の生の源泉を民族や時代の流れのうちに確認したい」「史上において典型的人物と思われる人と邂逅し、新しい倫理的背骨を形成する上での根拠を発見しよう」という欲求を挙げ、「歴史家とは共感の苦悩に生きる人」のことであり、この意味での「復原力の強弱が歴史家の真價を決する一条件」である。とされる。然るに「昭和史」にはこれが表現されていない。それには戦争を強行した軍部や政治家や実業家と、それに反対して弾圧された共産主義者、自由主義者との双方だけがあつて、その中間にあつて動揺した国民層の姿は見あたらず、「階級斗争」観念による類型化が行われており、しかも上層者や共産主義者に対する人物描写さえも貧しい。更にそれは死者の声がひびいていない。今度の戦争には「きけわたつみの声」の様に戦争を疑い呪つて死んだ若い学徒兵だけでなく、戦争を聖戦と信じ、天皇陛下下歳を叫びながら死んで行つた無数の兵士がいた筈である。その気持をなぜ真剣にとりあげないのか、平家物語の作者は死者の声に実に敏感であり、万感の思いに胸がふさがれているという感じがあるのに、と云われている。

昭和史をめぐつて(森)

和歌森氏は、亀井氏のいうところの「主体としての人間の回復」に賛成されつゝも、「すべての人の行動はその時代の人としての条件を背負つての行動であつて、そのまゝでは時代条件の違う今日の人の道徳基準にならぬ」とし、又唯物史観の説く歴史法則については「過去のいろいろな事象を生み出した原因は、その時代固有の諸条件としてそれそれ可能性を与えただけであり、決定的因子というわけにはいかず」、「その因子の相互運関が決定しているのである。」と否定し、従つて人間の問題としては、人がその時代のどんなからくりの中でどう生き、次のからくりの中でどう生きたかを次々に見とおすことが重要であるとされている。

これに対して「昭和史」の筆者の一人たる遠山氏は、文学においては、人間およびその生活がいかに個性的なもの、偶然的なもの、かけがえない特殊において存在するかをえがくに對して、歴史学においては、個性の差をふくみながら人間が階級として存在すること、偶然を貫きながら必然性が実現されてゆく過程を客観的に明らかにするのである、とし、歴史の養長は基本的に支配者と被支配者との対立斗争にもとづくと考えらるならば、被支配者即ち歴史を变革するものゝ立場に眼をすえてこそ、その批判は内在的であり、客観性をもつことが出来るのである。

こゝで我々は三者とも夫々内在的客観的把握を積極的に主張されているが、かくも異つた結論が導かれているという事実注目しなければいけない。然らばかゝる相違はいかにして生ずるのであろうか。蓋しそれは夫々が問題の一面のみを強調されるからであらう。即ち亀井氏の立場は、人間の「生命感」を重視する点大なる示唆は受けるが、人間に影響を与える社会的経済的環境に対する顧慮が薄いために、単なる文学的批評として歴史学から締め出されている弱点がある。「復原力」も亦この点の顧慮なくしては完全ではないからである。和歌森氏のそ

れはあらゆる因子を広く考慮に入れた総合的把握である点学ぶべきものがあるが、やはり人間性についての深い洞察、即ち時代性を背負つた人間そのものの中に見出される生命に対する共感において物足りない。更に遠山氏の場合、法則性の強調のあまり人間性に対する軽視は覆うべくもない。更に歴史発展を基本的に支配者と被支配者との対立斗争と見、被支配者の立場に立つた場合主客観的内在的批判が可能であると概括することには大なる独断が含まれるであろうが、しかし支配者の側にも反省者、変革者が出、被支配者の側にも一部の利害だけしか見ない批判が存在する事実は何と考えられるであろうか。

例えば「己の如く汝の隣を愛すべし」(マタイ伝一九ノ一九)というキリストの言葉の中に見られる深々とした慈愛の心や、「われ地に平和を投ぜんために来れりと思ふな。平和にあらず、反つて剣を投ぜんために来れり。それ我が来れる人をその父より、娘をその母より、嫁をその姉嬢しゅうじょうより分たんためなり」(マタイ伝一〇ノ二四)という言葉に漲る烈しい意志の出来燃焼は、遠山氏の階級史観の論法では到底説明することの出来ない、人間のもつ最高の威敵ではあるまいか。或は又「一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり」(歎異抄)と告白した親鸞に見られる豊かな同胞意識も亦、遠山氏は一つの階級にのみ結びついた発言として捉えられるのであろうか。

勿論現実においては、人間の精神は社会的経済的諸条件に制約され、野心、愛憎等の人間の弱点によつて動揺する。我々はその悲し現実を目を蔽わんとするものではないが、さりとてかかる次元を乗り越えて生きむとする意志の中に、人と生れたよるこびをしみじみ思うのは動かさない事実である。意志は階級的に働くものではない。むしろ階級の制約をのりこえようとするとところに意志は働くのである。この事実を遠山氏は何と考へられるであろうか。

階級史観の中では階級相互の反撥し合ひはげしい戦鬪の意欲を捉えることは出来よう。しかし階級をのりこえる全人類的な視野に立つ崇高な人間の姿を描くことは遂に不可能である。それは物質的欲望のままに動かされる人間の衝動を描くことは出来る。しかしその欲望を制御して、高い次元に生きようとする人間の意志を説明することは出来ないのである。昭和の歴史を、天皇と共産党の両極に焦点をしばつて、その間の葛藤によつて描こうとする幼稚な態度はすでに歴史とは言い難い。否歴史以前のこの様な思考の粗雑さには、亀井氏の批評するような「復原力の弱さ」とか、「死者の声を描かぬ」などという言葉では到底正さるべくもない恣意があることに注目しなければいけない。

唯物史観は意志を描くことが出来ない。所謂歴史的必然の論法の中で、意志なくして歴史を描くことの出来る安易さが、敗戦虚脱の人心に迎合なれている事実を忘れてはなるまい。唯物史観の問題は決して一史観の問題ではない。それは人間の基本的生き方の問題であることを與々も考えていただきたいのである。

社会主義文学理論の検討

若松高等学校教諭 山田輝彦

戦後の荒廃を克服する具体的政策に於て、民族の将来に対する確信に於て、その政治的節操に於て、現在の保守政党は青年の期待に於ては望まない。されば現実に絶望した青年が漠然と社会主義革命を待望し、歴史の未来に社会主義社会の天国を幻想しつゝある現状を背景として、マルクス主義文化の全領域に激しい勢いで浸透しつゝある。今茲に問題を芸術、特に文学の面を中心に、その文学理論の骨格と、それが創作、批評、研

究の各方面に及ぼしつつある影響を概観して見たい。

マルクス主義文学理論の基礎には上部構造論がある。これは史的唯物論の当然の帰結として、経済的の下部構造に歴史発展の指導原理を認め、イデオロギー、就中芸術や文学を上部構造と見る考え方である。この土台と上部構造との関係については、一九五一年六月にスターリンが言語学に於けるマルクス主義についてという論文で、土台というのは「そのあたえられた発展段階に於ける社会の経済制度」であり、上部構造とは「社会の政治的、法律的、宗教的、芸術的、哲学的な見解と、これに照応した政治的、法律的その他の機関である。」と定義した。ここで土台といわれているものは「生産手段の所有形態」を意味する。上部構造は土台の消滅とともに根絶し、消滅するけれどもそれは一方的に土台に規定される受動的なものではない。既にこの点についてはエンゲルスも触れているが、スターリンは更に上部構造が一旦成立すると、それは古い土台をこわし新しい土台を育てる「最大の能動的な力」となることを強調する。マルクス主義の図式によれば、社会の最基底に経済制度があり、その上に国家機構と法が、更にその上に宗教、哲学、芸術が置かれるのである。その論理に従えば、階級社会の文学は、その能動的な力によつて資本主義を資本家に奉仕するものであり、新しい思想と文学は、それらの古い土台を絶滅し、社会主義を強化するものである。つまり階級斗争の鋭鋭な武器となるのである。

芸術や文学についてのこのような基本的な考え方は、ソ聯に於ては「社会主義リアリズム」と名づけられた。この呼称は一九三二年スターリンによつて初めて使われたものである。一九三四年五月九日プラウダ紙上で社会主義リアリズムは次のように規定されている。「社会主義リアリズムはソヴェトの芸術文学ならびに文学批評の基本的な方法であつて、それは現実をその革命的な発展において、正しく歴史的に描き出すことを芸術

家にもとめる、その際、芸術的な描写が正しく、歴史的に具體的であるということ、勤労者を社会主義を精神として思想的に改造し、教育するという論題とは結合されねばならない。」つまり革命的であること、手法としてリアリズムを用うること、思想改造に役立つこと、の三点が一貫して強調されるのである。こういふ立場から具體的創作方法として反映論（現実を反映している程度が価値の基準となる）や典型論（典型的状態下の典型的性格の再現）が出て来る。特に後者は一九五二年十九回党大会でマレンコフが強調したところであつて「典型性はリアリズム芸術に於ける党派性顕現の基本的な領域である。典型性の問題は政治的問題である。」として、何を典型として選ぶかによつて、作家の政治意識が問われたのである。こういふ立場からすれば、作品の中でも積極的典型（社会主義に献身する者）は強調されねばならぬし、否定的典型（社会主義に對して懐疑的であつたり、反対であつたりする者）は、作品の中で大きな比重を占めさせてはならぬのである。

又一九五四年第二回作家大会に於けるコルネイチエークの発言のように、「ソヴェート諷刺文学では、主人公を通じてソヴェート社会の制度そのものに諷刺がむけられるのではなくして人間の意識のなかにある資本主義の残滓にたいしてそれがむけられる。」とすれば、制度自体に對する批判の自由は全く認められていない。このような強力な統制基準のもとで創作せねばならぬ作家は、当然無葛藤性理論の如き笑うべき誤謬を犯すに至る。因みに無葛藤性理論とは、一九五〇年前後に於けるソヴェートの支配的論調であつたらしく、それは、ソヴェート同盟の社会においては敵対的階級が既に消滅しているので、善と悪の葛藤はなく、善いものと、より善いものとの間の葛藤があるのみだという理論である。こういふ理論から人間を感動させるドラマが生れる筈はない。この誤謬は勿論訂正されたけれども、ソヴェート体制自体にこのような奴隷的理論を生み出す原

因があることは明白である。

民族文化の問題については、スターリンの「内容の点ではプロレタリア的、形式の点では民族的——社会主義が目ざして進んでいる全人類に共通な文化はかくの如きものである。」という言葉から察せられるように、マルクス主義者の民族文化とはプロレタリア文化と同義である。彼らはレーニン「の資本主義のなかには二つの文化、ブルジョア文化とプロレタリア文化が存在する。」という見地から、民族古典の評価のし直しを要求する。敵対階級を打倒することによつて、プロレタリアの手に文化を奪回するという明確な意志がそこにある。かくして文学史の積極的な書きかえ、階級斗争の歴史としての文学史の再構成が精力的に進められつゝある。

マルクス主義文学理論が、理論としてドグマに満ちたものであるにかゝらず、それが強力に浸透して行くのはその背後に当然マルクス主義者の革命的意志が存在するからである。それは「作文の会」や「生活記録」の運動や職場演劇、読書サークル、学校教育等を通じて広汎に組織的に青年や婦人層に、マルクス主義的思考法を浸透させつつある。近代主義やヒューマニズムの立場にあつて、政治的に反マルクス主義陣営にある人々も、文学の中心にエゴイズムや性を置く限り、この極端に政治的な文学論には、倫理や実践の面で主導権を奪われるのである。社会主義リアリズムを標榜する「新日本文学会」からすぐれた作品が生れなかつたという指摘と、それが社会主義文学の啓蒙に果たした役割とは別個に評価する必要がある。今や文学批評の基準は、作家の思想が進歩的であるかどうか、とりあつかわれる題材が社会的なものであるかどうか、その手法がリアリズムに合致しているかどうか、に置かれる。批評家を動かしているものはマルクス主義的進歩の概念である。国文学者の大半を含む「日本文学協会」や、岩波の「文学」には既にこのような傾向が顕著に見られるのである。例えば万葉の評師では、

憶良の貧窮問答歌は古代農民斗争と結びつけられ、防人の歌は古代天皇制権力への呪咀とされる如き解釈が、進歩という名の下で公然と発言されつゝある。これは戦争指導者が、古典を恣意によつて戦意昂揚の手段として利用したことの裏がえしであつて、古典が国民感情と民族精神の形成に果す独自の、積極的役割が、すべて階級的立場を擁護する政治的目的に利用されつゝある。そこではイデオロギーが実感に、階級が国民に先行する。ソ聯に於てさえ、その作家同盟の規約に、ソヴェート国民の愛国の感情をつよめることを義務として謳つている現状で、日本の知識人のマルクス主義に対する寛容と媚態と、いわゆる善意の人々の批判力の欠如が、国家生命の破壊と人間性の荒廃を促しつゝある事実が改めて直視されねばならない。すぐれた文学のもつ超階級的、超民族的な普遍人間性を、ブルジョア学者の妄想と否定するときマルクス主義者に対しては、単なる論理的批判は全く無力であり、自由と人間性を防衛する明確な決意こそ、すべてに先んじて必要である。

民族的抒情の回復を阻むもの

修猷館高等学校教諭

小柳陽太郎

○ 近代における人間像の衰頹

現代の日本にはどうして民族的な幅と広がりや、豊かにたれた抒情詩が生れ得ないのだろうか。私達の周囲にあるものは、どうしてあのように、個人的な生活の中に溜息の様に吐き出される弱々しい抒情ばかりなのだろうか。かりに、それが激

しい意欲に満ちたものであつても、自己の生命を我と我が身で焼きつくして行くとも言ふ様なたましい敗残の姿が疑々と私達の抒情の世界をぬりつゞびてしまつてゐるのである。

勿論、私は抒情詩の中に国家とか民族とかとという言葉を要求したり、激しい戦闘的な意欲を盛り上げなければいけないなどというつもりはない。その様な表面に現われた觀念の問題ではなく、個人生活の末端を描いても、それが深々とした民族のなつながらの中に生きてゐる、その様な抒情詩が我々の周囲に、何故にこうも枯れはててしまつたか、私はそれを問ひたいのである。

何故私達はこんな様な抒情詩を生むことが出来ないのか。それには幾多の要因が入り交り、からまり合つてゐると思ふが、その中で私が日頃思つてゐることの概略をのべてみたい。

芸術が、政治、道徳、その他凡ゆる羈絆から解放されて、それ自身の目的を確立したところから近代が出生した。これが一般の通念である。たしかに近代とはその様に定義づけることが出来よう。では一体このようにして独立した近代の芸術は古代よりも更に偉大な、更に進歩した人間像を生み出すことが出来たのだろうか。或は又近代の思想を特徴づけるものは、大まかに言つてヒューマニズムという言葉なのだが、その言葉によつて示される人間性は果してそれにふさわしく、発展し、向上し得たのだろうか。勿論、物質的、経済的面での飛躍的進歩は誰一人疑うものはない。だが物質的進歩のかけに、日一日と人間の精神は稀薄化し、衰弱して来たのではあるまいか。

例えば飛鳥島、白鳳仏に描かれた古代の人間像は、それが仏像であるにもかかわらず、現代の如何なる彫刻に比しても、何と豊満な、逞しい生命を湛えていることだろう。それは人間の本来の姿はここにあるとも言ひたい程の犯すべからざるきびしさをもつて我々に迫つてくるのである。或は今昔物語と、それを素材にして描いた芥川龍之介の作品とを比較してみることがい

民族的抒情の回復を阻むもの(小柳)

い。我々は芥川と同時代に生きる者として、そのいたたまれない程の自意識の苦痛に共感することは出来るし、そこに近代的な魅力を感じることも出来るけれども、それでもなお今昔物語の原文に漲る大らかな民衆の発想に接するときに、その健康にあふれた古代の面影に比して、近代のもつみじめきに面をそむけたくなるほどのおもひにかられるのは私一人ではあるまい。これと同じく、近代の抒情詩は万葉集のもつ、あの荘大な神の歌声を完全に喪失した。とくに歌壇未流の動きに至つては、小市民的感情の中にいら立つ神経だけが露骨に表現されて、その行くところを知らない。

もとより私は日本だけを責めようとするのではない。ウエドレイはその著「芸術の運命」の中で次の様に述べている。

「一千年以上にもわたつてキリスト教的ヨーロッパの芸術は固く宗教的生活に結ばれて、解きわがちがたいものであつた。(中略)芸術家は単に「キリスト教会」のために働いたのではなく「キリスト教会」において働いたのであつた。彼は単に神の礼拝の必要を充たすというだけに當まるものではなかつた。彼は礼拝に参与した、というのは彼が自己の作品を大地に打ち建てることはすでに、そのままで一個の礼拝行であり、またその作品が成熟してゆくということは、そのままですでに一連の祈りであつた。」(深瀬基寛訳)そして彼は近代については次のように断定するのである。「それはすべてのものを持つてゐる。持たないものは世紀の魂たるべき統一だけである。」(同)この言葉に示されるような近代に対する懷疑と中世に対する憧憬は二十世紀に入つて、西欧の思想の流れの中で、もはや動かすことの出来ない力を占めてゐるようである。(クリストフ・ドゥソン「進歩と宗教」、ベルジアエフ「現代の終末」参照)しかるに日本人は何故にこの深刻な、まさに日本人自身の直面したこの問題を、自分のものとして真剣に考えようとしな

私達は「近代」の意味をもう一度たしかめなければいけない。そして明治以後の日本の思想史を、この様な世界的な視野の上に立つて、もう一度検討し直さねばならない。それこそが現代の日本に課せられ、解決を迫られている最大のテーマではあるまいか。「近代」という言葉に甘えている限り、我々は永久に偉大な人間像を描くことは出来ないであろう。

○ 科学的思考による判断の主体の喪失

では「近代」は何故に人間像をかくも貧弱なものにしてしまったのだろうか。

いう迄もなく近代的思考の基礎をなすものは科学的思考であり、所謂客観性の重視である。君の考えは非科学的だとか、主観的だという言葉は現代に生きる人々にとつては正に殺し文句になつてしまつた。しかし科学の残した功績はともあれ、科学は常に判断の主体である自己を空白な状態におくことを要求するのは疑うべくもない事実である。それが「科学」の正しいあり方か否かは別として、人々は科学をその様なものとして受けとつていたのである。かかる通念に描かれる科学的思考の中には、判断の主体、即ち歴史を荷い、現実の悲喜の中に生きていく生々しい視点はすべて拒否されてしまつたのである。それは如何に科学の世界を追いつめて行つても、私達はどこにこの身を置いて生きて行つたらいいのか、という一番大切な問題に対しては科学は遂に答えてはくれないといふことに外ならない、科学がそれに答えてくれないのはそれでいい。しかし大切なことは現代には、その科学以外に思考の型がないといふことだ。科学にまつてとらえられない問題は一人一人の胸の中に鬱積されたまま放置されているのである。

私達は生きていく。更にその背後には私達を無意識の中に包んでいる民族的連帯感情がある筈である。それは分析することの出来ない事実であり、逆に言えば、生きるとはかかる分析を

超えたものを一人一人が持つていくことに外ならない。しかしその生きる地点が、科学的思考によつて締め出されてしまったために人々は物事を考える場合はあく迄も客観的と呼ばれる空白の一点を固執しようとするのだ。

○ 歴史的生命的の涸渇―「鑑賞」ということ

このような場所から過去をふりかえる時には、歴史とはただ物理的な時間に沿つて空しく羅列された過去の畏望に外ならないし、ただその中を因果の糸筋が手品のように張りめぐらされているにすぎない。人々の歴史に対する関心とはただ歴史のからくりを説き来り、説き去る説明の鮮かさには魅了されるというだけの話である。唯物史観のごときその典型的な姿を示している、といえよう。

これに反して古代の人々の描いた歴史像は一体どのようなものであつたらうか。芭蕉は弟子許六に与えた柴門辞の中で次の様に述べている。

「予が風雅は夏炬冬扇のごとし、衆にさかひて用ふところなし。ただ釈阿、西行のごとばのみ、かりそめに云ちらされしあだなるたはぶれごとも、あはれなる所多し。後鳥羽上皇のかかせ給ひしものにも、これらは歌に契ありて、しかも悲しびをそふるとのたまひ待りとかや。さればこの御ことばを力として、其細き一筋をたどり失ふことなれば」

彼にとつてその「細き一筋」とはまさに彼の生が依拠すべき究極の地点であつた。彼の思考はそこをなれては、もはや一歩も外にふみ出すことは出来なかつたし、それ故に「細き一筋」であり得たのである。即ち釈阿、西行、後鳥羽院から流れ來つた精神の承譜の上に彼の独自の歴史像を描き、それ以外は一切の歴史事象を借しげもなく切り捨てることが出来たのである。芭蕉には現代の中学生程度の歴史認識もなかつた。しかしそのことは、芭蕉にとつて一体何だつたのだろうか。彼は所謂科

学的、近代的思考の彼方に僻やかに歴史を描いた。現代に生きる私達はこれ程大胆に、肉太な筆で、一気に歴史を描くことは遂に不可能であるかに見える。

人々は過去の作品を鑑賞はする。しかし、それから決定的な打撃をうけることは出来ない。現代ではすべての偉大な作品は解説され、鑑賞され、そして時代順に突然とならべられたまま頭の一隅にしまいこまれる丈である。教養は高まつただろう。しかしそれに伴つて生きてゆく活力は目に見えて衰弱し、歴史を描く人々の手つきは、職人の手つきになつてしまつた。

○ 民族的連帯感情の分裂と「私小説」の世界

このような空白化した科学的思考によつて一人一人が自己の生きて行く地点を見失つた結果、はなやかなジャーナリズムの動きの裏側では、真実の人と人とのつながりは分断され、風雨にさらされているのである。例えば私達は議論を好む。議論の果に共通の思想を認め合おうとしているのだが、議論の終つた後の白々しい雰囲気の中で、かかる知的認識が人々の心をつなぐことに、何の役割も果し得ぬことを、いやという程思い知らされるのである。こうして人々は空しい社交の術に浮身をやつすのだ。だが心のつながりとは、すでに論理以前の、処世の術以前の問題である。(問題はむしろ逆なのだ。心のつながり―共通の地盤―それを私は民族的連帯感情と呼びたいのだが―その連帯感の喪失されたところでは一切の努力は虚妄であることに気附かなければならない。)

こうしてただ僅かに残された職場や、家庭や、友人の間におけるささやかな共通感情の中に人々はその心の安らぎを求めているのが偽りのない現実の日本の姿である。ここに所謂「私小説」の世界が生れて来るのだ。

しかしながら、詩とは本質的に無限の拡大を欲するものである。宇宙になりひびくべき詩情がこのようににみじめに寸断され

民族的抒情の回復を阻むもの (小柳)

た生活感情の中で、どうして生きのびることが出来よう。人々はこの様な重苦しい壁を所謂封建制度の為だと考え、之を破る為には西欧の近代的市民社会の出現こそ何にもまして大切なことだと考えているようである。しかしこの様な分析の仕方の中からは、「私小説」が明治末期から文壇を風靡した理由を説明することは不可能であろう。「私小説」の世界は明治末期以来の知識階級に見える民族的連帯感情の分裂が生んだ必然の姿として捉えられなければならない。

○ 連帯感情に言葉を与えるもの

正に生命は「個」の中には宿り得ぬのである。それは「個」を支え、それを目に見えぬ糸によつて他と結ぶ連帯感情の中にのみ宿るのである。従つて個人的な感慨に耽つたところから生れる抒情詩は、その華やかな発想によつて一時の流行を示すこととはあつても、遠からずしてそのはかない生命を終るけれども、連帯感情の中からじみ出た抒情詩は、それがいかにささやかなものであつても、いつの世までも口々に語り伝えられ、云い伝えられて永い生命を保つことが出来るのである。私達はかかる作品をこそ古典と呼び、かかる表現をなし得る者をこそ詩人と名付けるのだ。例えば柿本人麿の長歌中、たとえそれが相聞の歌であつても、民族的信仰に挿さしておればこそ、永久に朽ちることのないはげしきで我々の胸を打つのである。ウエドレイの言葉をかれば、彼は神々の世界を歌つたのではなく、神々の世界において歌つたのである。或は又芭蕉の「奥の細道」も亦、旅の路傍に鎮まる民衆の神々に対する祈念で充たれていることも忘れてはなるまい。

かかる神々の世界を無視して人麿の技法を如何に分析し、模倣しても、その域に迫ることは永久に不可能であり、奥の細道に見える洗練された俳文の美しさをいかに讃えても、その本質を捉えることは出来ないのである。即ち詩人の果すべき役割は

美しい詩句を編み出すことではなかつた。それは祈ることであり、祈ることによつて、個人的体験の背後に横たわる不可思議の世界、民族の連帯感情の世界に言葉を与えることだつたのである。

先に引用した柴門辞の言葉によつて芭蕉は「古人の跡をもとめず、古人の求めたる所を求めよ」という空海の言葉を引いて風雅の道も亦これに同じだと述べている。私達も亦この訓えの真義にふれて民族の残した偉大な詩人の祈りを共に祈る以外に残された道はないであらう。

抒情詩論

—万葉短歌を中心として—

亜細亜大学教授 夜久正雄

万葉集の中で、長歌に反歌のついでにものを取りあげて長歌とその反歌とをくらべてみると、長歌の敘事的であるのに対して短歌形式の反歌が抒情的であるものが多い。万葉集の短歌を記紀歌謡の中の短歌にくらべてみると、全体として、前者が抒情的で、後者が敘事的である。そこで、大ざつぱに云つて万葉集の短歌の特質は抒情性にあるということが出来る。この特質は、古今集の短歌とくらべると一層つきりする。古今集の短歌は、理智的傾向が強く、抒情性は稀薄である。少くとも表面にあらわれない。間接的である。(正岡子規は、万葉集と古今集とを比較して、万葉短歌の抒情性を短歌の本質とみてそこに価値判断の基準をおいたから、古今集の短歌の特質を「理屈」と喝破し、「くだらぬ歌集」と罵倒したのである。古今集の文学的価値については別に思うところがあるが、筆者はこの正岡子規の短歌本質論に賛成である。)

さて、この万葉短歌の抒情性というのはどういふのかというと、柿本人麿の「近江の海夕浪千鳥ながなけば心もしぬに古おもほゆ」という懐古の情、恋愛、追悼の、「去年見てし秋の月夜は照せれどあひ見し妹はいや年さかる」、旅情の「天さかるひなの長路ゆ恋ひくれば明石の門より大和島見ゆ」等々、山上憶良の親の子をおもふ家庭感情、「憶良らはいまはまからむ子泣くらむそのかの母も吾を待つらむぞ」、山部赤人の自然鑑賞、「田子の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ不二の高峯に雪はふりける」等々、万葉集の代表的作品は今日のわれわれにもじかに通ずる感情の主観的表白を中心にしてゐる。

万葉短歌の作者たちの生活を支配していた宗教的観念は古典神話に通ずる諸観念で今日のわれわれの世界観とは非常に違つた観念である。今日の人々が迷信といつてゐる観念が当時の人々を支配してゐたことは、万葉短歌をその信仰の方面に注意してよめば、すぐわかる。天孫降臨の神話は、人麿の長歌の中に生きていたのである。人麿がその神話的信仰を長歌の中に歌つて、抒情的な短歌を反歌としてつたのは、神話的信仰が稀薄となつて、観念が遊離し感情が皇室崇拜の国民感情として持続したことを示すのではなからうか。「大君は神にしませば天雲の雷の上にいほりせずかも」は、神話的観念が敘事的に表現されているから、感情の直接性が薄く、普遍的価値が乏しい。それに比べて、「久かたの天みごとく仰ぎみし皇子のみ門の荒れまく惜しも」は、神話的観念が稀薄で感情の表白が強いから、今日のわれわれもじかに共感できるものもある。

さて、万葉短歌を人麿を中心として時代順にみると、その前は、斉明、天智、天武朝で、後は奈良朝である。人麿の前には額田王があり、後には、旅人、憶良、赤人たちがあむ。人麿の長歌短歌をみると、敘事的な長歌と抒情的な短歌との対比が鮮明で、万葉短歌の抒情的性格を確定したのが人麿であるように

挽歌

山田輝彦

——海軍少尉和田山儀平に捧ぐ——

わだつみのうしほとどろと鳴るところ母體と洗みしあはれますらを
黒の瀬戸のしぶくうしほに真向ひてうたひし友よ今はいづくに
柿の葉にかよふ月のかげ見づ語りし面輪忘れせぬかも
物言はずただに黙して胸内のさかまく思ひ告げて征ぎにし
いざ征かむさらばと握る手のその手の力忘れじとはに
別るにかたみにくみし濁り酒再び君とくむよしもなき
波の穂のさわ立つきはみ瀟潮の雄叫ぶ海は君がおくつき

病中吟

山なみは今し暮れゆく山襲の青々として寒き片かけ
山の秀に化風吹きあれてむら雲の脈かふ見ればまうらがなしも
いざ言妹日暮れはかなし枕辺の青磁の瓶に花は挿すべし
花やげる色はなけれど水仙のそのすがしきをともしむわれは
蕾なれど水仙はよしふぶく日の夕かたまで匂へ幽かに
若草の妹はまがなし面伏せてさしくむ見ればいよゝいとしき
鳴りどよむ吹雪は晴れてまさやけき月渡りゆく遠き天路を

怒濤

くぐもれる思ひことごと消え失せよひびきの灘のしぶくうしほに
底ごもるうしほのひびき息の緒に妹恋ふ血ろともなりするかも
さくなだりたぎつうしほに真向へばすがすがしもよ生くるこの身は
磯波のうねりたけしまかがやくさつききの海の潮鳴りの音
見はるかす六連の島回速潮に傾き走る発動機船

さえ考えられる。憶良、赤人ら奈良朝前期の歌人は人層からの分化で、さらに抒情性が濃く、万葉短歌の抒情性はこの時期に定着した。万葉後期の家持は、人層を復活しようとしたのである。人層がらうど万葉短歌の出発点で、神話的観念の叙事的表現と国民的感情の抒情的表現との並行したのが彼の長短歌であるが、この叙事的の長歌は衰えて短歌全盛の奈良時代になる。長歌は平安時代に物語に席をゆずった。

さらに歴史的にみると、人層が熱情をこめてうたつた壬申の内乱の英雄は天武天皇で、天武天皇の時代に日本の神話体系は完成したとみられる。その前の天智天皇の時代は聖徳太子の時代からつづく大陸文化移入の時代で、国家生活の指導原理は、大ざっぱに云えば、神話から大陸伝来の思想に移行しつつあったのである。それ以前は、神話的信仰の支配力が優勢であつたにちがいない。万葉短歌の成立した時代は、国家生活の原理としての神話的信仰が薄れて、仏教的信仰と儒教的倫理の優勢になつた時代である。そこでまた人層の歌になるが、人層の長歌には神話的信仰が叙事的にうたわれて、その短歌が抒情的になつたものが多く、神話伝説に対する信仰から抒情詩への過渡期となつていることは、既に指摘したところである。憶良、旅人、赤人などになると、神話的信仰は人層よりもずつと薄く、古今集になるとさらに稀薄で、優勢な智的興味は神話的信仰を排除してしまつたかに見える。

古事記の内容は神話伝説で、国家生活の支柱であつたものだ。この神話に対する信仰が薄れて、個人的感情を表現対象とする万葉短歌に移行した原因

は、大陸文化、思想の移入であるから、外来異質の信仰と伝統的信仰との相剋の間に、普遍的人間感情の表現を見出した日本人の偉業が万葉短歌の成立と見られる。後代、短歌が抒情性を本質とすることによつて、社会思想の変遷を貫くことができたのはこの理由によるのであらう。

万葉短歌は、日本人の生活感情の基礎を確定したかとまでおもわれるほど、その表現が豊富多彩である。作者は天皇、貴族は勿論民衆の末端に至るまでに達している。その広範囲にわたる作者が、同一の形式で、同一の価値判断の基準のもとに、その感情をうたつたということは全日本人が歌いあつた、ということと同じで、万葉短歌というものは、日本人がそれぞれのおもいを通じあつた、そのあとともみられる。それぞれの作者にとつて真実であつた感情というものは、個々の生活環境と結びついたものであるから、抒情詩の発想は個人的なものである。この個々のおもいが、単純な形式によつて、素朴な表現技術によつて、うたいかわされて国民全体感情の表現となるところに万葉短歌の国民生活に占めた重大意義がある。個人的抒情詩として確定した万葉短歌が、神話的觀念に代つて古代日本国民生活の精神的の紐帯となつたのである。万葉集は、日本民族の連帯感情の表現であつた、といえる。しかもその内容が普遍的の人間感情である、という点において、日本人の感情の質を正しく定着し、今日のわれわれにもじかに通ずる古典となることのできたのである。

万葉の復活というものは、この短歌の抒情性の復活であつて、それは、政治的社會生活の統一の要求とむすびついたのである。國家生活の統一の原理を、普遍的の人間感情ヒューマニティーに基礎づけたのが、短歌の歴史的使命で、短歌は皇室の伝統ともなつた。代々天皇の御歌は、大局から見て、短歌の抒情性を失うことがなかつた、この点が重大である。政治的対立を調和するものがなければ、國家生活は分裂して滅びるが、その

調和を、天皇によつて維持してきたのが日本の歴史であるというなら、その天皇の、思想の根底は、短歌表現にあつたので、それは同時に、国民全体の連帯性の中に個人を没入することにはかならない。

かくして、詩は史と相昇降す、ということばも生れるのである。抒情詩などというものは繊細可憐で経世愛民の志とは別のものだと考えて、感情粗雑な人間が政治家として威張つてゐるのは日本の興隆はおぼつかない。明治以降、そういう傾向は非常に強くなつた。

こゝろみに歴史をかえりみてみると、平安末期から鎌倉への動亂の時代に、源実朝や西行が生れ、新古今集は古今集に比べれば抒情的である。これが、いわば第一期の万葉復活で、第二期は戦国末期の武将たちのうちで、謙信、信玄、秀吉、蓮如などという英雄豪傑が立派な抒情詩をよんだことも、国民の連帯感情の復活とみられよう。芭蕉の俳句をこの期に入れることもできよう。第三期は幕末。第四期は明治三十年代の抒情詩興隆時代で、短歌では正岡子規を先頭に、連作短歌が勃興した。

そして、現代というところになるが、私は、現代を代表する最大の抒情詩の一つとして、今上天皇の御歌をあげたいとおもふ。今上天皇の御歌を時代順にみると、戦後の御歌が戦前のものに比して特に抒情性を強くしているので、そこに国民生活の分裂——イデオロギーの相剋斗争に对照する抒情詩の復活をみとめることができる。抒情詩によつて国民の連帯感情に基礎を得て國家は復興しうるものであると信じる。御製については別のところに書いたので、それを読んでいただきたい。

今上御製研究（抄）

夜久 正雄

（この論文は昭和二十八年より三十年にかけて「新公論」誌上に発表されたものであるが前掲の論文を補足する意味でここに掲載した。——編者註）

「天皇歌集みやまきりしま」を手にして、はじめて次の御製をよんだ時は、まったく驚嘆した。

奈良にて

大き寺ちまたに立ちていにしへの奈良の都の
ほひふかしも

この御製の「大き寺ちまたに立ちて」といふことはつかひの何といつたらしいのだらうか、自由な、大胆なものの本質をずばりととらへた、簡潔な表現のすばらしさに驚嘆したのである。単語のひとことひとことは実に平明なことばである。「大き」が「大きな」、「ちまた」が「市街」の意味であることは辞引を引くまでもない。単語のひとことひとつは日常使ひなれたことばがもとになつてゐるので、現実の感動が生きてゐるのだから、さうかといつて、口語そのままではない、古代語を活用してゐるから、感動の深さを充分に表現してゐる。日常語のもつ現実的な感じと、古代語のもつ深い情緒の表現力とを、実に自然に調和させて使つてをられる、不思議なおことばがかひである。「いにしへの奈良の都」をしのばす「大き寺」と、近代の市街「ちまた」との際立つた対照は、「大き寺のちまたに立ちて」といふやうに助詞をもつて接続す

今上御製研究一抄（夜久）

ることをせずに、短歌形式のリズムにあはせて、「大き寺ちまたに立ちて」と直ちにつづけて、ことばの対照と、「大き寺」と「ちまた」とを対照的に感じた作者の心もちとを完全に一致させたので、われわれは、この一語から、作者が受けた感じをそのままにうけとることができる。ここに作者の清い鏡のやうな心をもっているののである。「ちまたに」といふ「に」、もすばらしい。全体として、「町なかに大き寺立ちて」といふことばとくらべてみれば、これは死んでゐるが、御製の句が生きて動いてゐることよくわかるであらう。また、かういふ歌の場合に、短歌の一、二句は、以下の三、四、五句に対しては、説明的になつてしまふのが普通だが、この御製の場合には、一、二句も、前にのべたやうに、生きてゐることばが心の動きとともに生きて動いてゐるやうにさへ感ぜられるので、一首のはじめから終りまで、くまなく、作者の感動がゆきわたつてゐるのである。つまり、完全な表現である、といふ他はない。古代奈良のほひ深い近代奈良の本質は、この一首にをさめられたといつても言ひ過ぎにはなるまい。同じやうなおどろきを次の一首にも感じる。

○

和倉にて

月かげはひろくさやけし雲はれし秋の今宵のう
なばらの上に

この一、二句。ことばが平明だからちよつとみると誰にでもうたへさうだが、かうずばりとはうたへないものである。うたをよむといふ意識がもつた表現対象がゆがめてしまふことが多いものだが、御製にはさういふくもりがたい。海上にのぼるひろいさやかな月光は、作者の心に

うつつたそのまま、ことばとなつて、そのことばをよむもの目に見えるやうに感じられるのである。(以上新公論第四号より)

○ 貞明皇后をしのぶ二首

いでましし浅間の山のふもとより母のたまひし
この草木はも

池のべのかた白草を見るごとに母の心の思ひ
でらる

第一首。「いでましし」は、古語であるが現代口語を話すものにもたやすく理解できる。非常に具体的な生きたことばである。「浅間の山の麓」の「の」は、音調の上で小さなくるかへしをもつてゐる。「浅間の山の麓より母の」とつづくのである。前にあげた「奈良にて」の御製にもこの「の」のくりかへしがある。

大寺寺ちまたに立ちていにしへの奈良のみやこのにほひ
ふかしも

一般に同じ言葉をくりかへすとその言葉の意味を強めることとなるが、このやうに助詞「の」をくりかへす場合には、主として音調のくりかへしとなつて、一首の中に小さなリズムをおこして、作者の感動の深さをしめすらしい。今上天皇の御製について解説を書かうとおもふまでは、こんなことはかんがへてもみなかつたが、短歌の音調には、五七五七七のリズムの中にかういふさざ波のやうなりズムがあるらしい。

夏草の野崎の崎の浜風に妹がむすびし紐ふきかへす

といふ人鷹の歌にも、この「の」のくりかへしがある。なほ「浅間山麓」といふより「浅間の山の麓」といふ方が、具体的であることも注意してよむべきだろう。「麓より母のたまひし」といふのは、われわれのことばで普通いへば、「麓から母の送つてくれた」といふことばに当るが、この途中の「送る」とかどうかいふ手段をあらはすことばをぬいてしまつて「麓より母のたまひし」と直接につづけるので母が下さつたといふ意味が強くなつて、そこに母の心の直接に作者に迫りくる切実さが、表現されてゐるのである。そして、最後の句は、「この草木はも」と云ひつづしがたい感動を、眼前の草木をさしめすことにこめてある。ことばが、すべて、具体的に実生き生きてゐる。不思議といふ他ない。「たまふ」といふことばは、概括的であるが、しかし感情の上で具体的直接的なのである。結局「はも」は、これも古代語であるが、「は」に詠歎のことばの「も」のついた形とかんがへれば、現代語をはなす者にとつても耳なれぬことばとはならない。日本武尊のをとめのとこのべにわがおきしつるぎの太刀その太刀は

や

の「はや」とは少し意味の上でもちがふらしいが、この日本武尊のみうたの「はや」が、そこにないもの、ふたたび手にとることのできないものに対する強い詠歎のことばとなつてゐるのとくらべあはせれば、この「はも」は、眼前に存在するものに対する同じやうに強い詠歎のことばである。

万葉語が現代的感覚によつて実に適確につかはれてゐる。万葉集に多彩豪華な表現力をあらはした日本古代語の生命はここに再生したかに見られ、この点今上御製は源実朝の歌とならぬ、和歌史上の双壁といふことでもできやう。万葉語をそのまま模倣した歌は結構いくつもある、普通万葉調の復活などといつてゐるのは、さういふものだ

が、今上御製では、万葉語が現代に再生されてゐるので、万葉模倣のアナクロニズムにおちいらず、現実的感覚が生きてそのことばにあらはれて、古語から現代語まで一貫する国語の生命力が奔騰活躍するのである。

第二首。後の御製は一首全体が話しことばのやうな単純さをもつてゐる。「池の辺のかた白草を見るたびに母の心が思ひだされる」といへば、それは、話しことばのなかから切りとつてきたことばのやうになるが、御製は、この話しことばの生々しさを失はずに、それを短歌の音調にとかしこんで、永久化するものである。「母の心の思ひいでる」といふおことばづかひよ。お心のうごきそのままにそうたはれて、一切の作為を加へられない。心の動いてゐるのままにことばになつてゐる。その一瞬の眞実のことばであつて、二度とくりかへされぬことばである。これ以上に眞実の表現といふものはかんがへられない。これは、人生無常の痛感が深ければ深いほど、現実一瞬の感動が深く味はれるためなのであらうか。

室戸にて

室戸なる一夜の宿のたましだをうつくしくと見
つ岩間岩間に

この御製の「一夜の宿のたましだを」といふ痛切なしらべは作者の現実の人生に対する深い感想——詠歎と愛情とを語るものであるが、ことばにあらはすことのできないやうなほかない一瞬の心のゆらぎに心をかたむけるのは、現実の人生に対するこの深い愛惜であつて、それは人の生命ははかなく、無常であるといふ痛感によつて生れるやうで

今上御製研究一抄（夜久）

ある。人は死ぬものであるといふ人間の運命を痛感するとき、このほかない人の一生を現実の世界にむすんで、家庭、隣朋、社会、国家、国際人類の歴史的開展に協力義務の生をささげることによつて、ほかない一生が人類無窮の生の進展につながるといふ信仰に達するのである。だから生命がはかないと痛感することには、享樂にはしつたり隠遁におちいつたり人生を蔑むことにならないで、現実の生活を尊ぶことになり、それは個体の生命の尊さをおもふことにもなる。人生無常の痛感が人生の愛惜と裏表し、永久の生命をおもふおもひが現実瞬時の生命を尊ぶのである。「母の心の思ひいでる」といふゆらぐがごときことばのしらべは、「一夜の宿のたましだを」と心をこめてうたふ作者によつてはじめてうみ出された稀有のしらべであつて、それは作者の内面生活の稀有の信にもとづく表現であるとかんがへられる。無心の独白にも似た「池の辺のかた白草」の御製をくりかへしてよみあじはへば、人は、この歌がいいとかまづいとかいふことをこえて、直ちにめいめい自分の母を、母の心をおもはずにあられないであらう。（以上新公論第六号より）

雲仙嶽にて

高原にみやまきりしま美しくむらがりさきて小
鳥とぶなり

この前、本誌で御製について感想を述べたとき、どうも云ひ足りないところがあつたやうな気がして、気にかかつてゐたので、少し付け加へたい。それは「文章概論」（新潮社）といふ近刊書の中の白石大二氏の論文「日本語の修

「辞」の一節をよんでみて、ふと気づいたことなのである。その一節といふのは、石川啄木の

東海の小島の磯の白砂に

われなきぬれて

蟹とたはむる

の歌について、白石氏が「だんだん取材が小さくなつてゐる」と指摘し、源実朝の

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄

る見ゆ

大海の磯もとどろによする波われてくだけてさけて散

るかも

は、「たたみこんでゆく表現の中に、対象がだんだん小さくなつてゆく。」と述べた一節である。この一節をよんでみて「高原にみやまきりしま」の御製を謹解する手がかりをえたやうに思つた。

この御製は、明らかに、白石氏が例にあげた啄木、実朝の歌と同じ傾向の修辭法を示してゐる。語の順序が、「高

原」「むらがり咲くみやまきりしま」「小鳥」と、だんだん小さいものにうつつてゆく、そこでその小さな、しかもすばやい動きを示す小鳥のとぶのをはつきりと心にしるして、この作者は「小鳥とぶなり」とうたつたので、「なり」といふことは生きて、ひろい「高原」と小さな「小鳥」との対照をくつきり浮き立たせるのであらう。「高原」「みやまきりしま」「小鳥」とだんだん対象が小さくなつて、その小鳥のとびゆくさは、無限の世界に消えてゆく思ひがする。しかし、なほ、その小鳥のとぶのは眼前の事実である。現実の生活は無限の中に消えてゆくが、しかしそれは、人間にとつてかけがへのない、たしかな人生である。この現実の生活を通して以外には無限の生を味はふことはできないといつたやうな氣をおこさせるものがある。この歌の豪華と云つても足りず、清澄といつても足りない、深い宗教的味はひは、この辺にあるのではなからうか。(新公論第一〇号より)

日本政治の再建のために

小田村寅二郎

(一) Spirit of Liberty と Liberalism

三日間に亘るこの合宿で、最後の講義を私が担当することになった。今日迄の色々な講義、自由討論を通して、皆さんの一人一人の心の中には、現在の学校生活の中で、到底得られない複雑な体験が積み重ねられたと思われる。しかしながら昨夜皆さんが床に就かれた後、夜おそく迄行われた主催者諸先生の御意見の交換を伺つてみると、猶且つ皆さんの心の中では色々な問題がまだ割り切れないままに残されているようである。

それには色々な理由があると思う。しかし皆さんの心の中には、これが正しいと知つてもそれに徹底することの出来ない現代学生々活の雰囲気、或は自分の生活と自分の学問とを一つに統一しようとする努力を忘れて、すべてを知的に割り切つたところから出発しようとする習慣が根強くはびこっているのではあるまいか。若しそうだとするならば、皆さんはここで痛切に自己をふりかえつていただきたい。そこには何か非常に大切なものが欠けている。それは一体何であるうか。私をして言わしむればそれは、スピリット (Spirit) という言葉に示される根源的な人間のエネルギーである。

そこで私は、先ず皆さんにこのスピリットを持て、と申したい。スピリットとは意志でもあり、精神でもあり、また魂と申してもよいであろうが、西欧の学問の感化を強く受けておられる学生の皆さんには、スピリットという言葉を用いることが、一番理解し易いと思うのでスピリットを持てと申すのである。スピリットは人間の部分を統一するものである。知識も情意も、

日本政治の再建のために (小田村)

更に肉体をもふくめて、それを統一あるものにとのえるものをいうのである。皆さんが三日間の合宿に参加して、多くの理論と知識を受け入れたにしても、理論として頭の一角にしまつてしまふにとどめるならば、その理論は依然として、知識の一つであるにとどまるであろう。

逆に皆さんがスピリットを持つてこの合宿に参加しておられたならば、あらゆる合宿の体験は単なる理論の累積にとまらずに、皆さん自身のスピリットの問題として受けとめられ、そこには必ずや生命的な燃焼が体験された筈である。そうではなく依然として一つの理論を教えてもらった、という丈に止まるならば、皆さんの学究態度、ひいては人生態度そのものに分裂があるからであつて、その様な行き方が繰り返される限りは、いつまで努力しても、永久に統一されたスピリットを自分のものとする事は出来ないのである。意志ある人間、スピリットある青年、それはその人間、その青年自らの決意によつて生れ出るものであつて、理論体系以前の問題であり、学問探究以前の人生態度に出づるものである。この合宿を計画された国民文化研究会の諸先生は、現代学生が理論からすべての問題にはいつてゆく傾向を洞察されて、この合宿も理論展開を中心として営まれたと思う。そのことは現代学生にとつて、この上なき親切であり、懇切な心の配り方であつたと思ふが、その為にもつ皆さんにして、スピリットの重大な意志、情意が人生にもつ役割に目覚められることなくしてこの合宿を去られるならばこの合宿が意図する最も重大な意義は、半減、乃至それ以下に減ぜられるほかはないと思われる。

私がこれからお話ししようとする政治及び天皇制の問題もこのスピリットということが一番大切な眼目となるので、現在の合宿の体験を通してこのことを特に皆さん方に訴えたいと思つて主題にはいる前にお話ししたわけである。

(一) 自由の意志と自由主義とのちがひ
 (二) 民族独立の問題と、中近東、東南アジア各国の独立の内面的諸問題

(三) 経済自立意志と中小企業の意義、並びに大学卒業生就職問題と中小企業の把握の仕方

(四) ブロレタリア国際主義と愛国主義を一致させようとしてゐる日教組

(五) 革命の結果に於ける刑法の予想

(六) ロシヤ刑法に於ける罪刑法定主義と罪刑不遯及主義の否定

(七) 保守政党的健全な在り方としての保守二大政黨論

以上(二)乃至(七)の講義は紙面の都合上ここでは割愛し、「天皇制」に関する分を全体的に掲載します。

(八) 「真理の探究」の態度と「事実の認識」の問題

さて天皇制の問題を述べる前に、その心構えとして、しばらく現代の思想のもつ基本的な二つの問題についてお話しすることを許していただきたい。

皆さん方、今日の学生諸君にとつては、日本の国体とか、天皇制といふことについては、それは遠い昔のことであり、現代的な価値のない封建的な遺物であるという考え方が一般になつてゐると思うが、そうした方々には先ず次のことを考えていただきたいと思う。

第一に申し上げたいことは、日本が大東亞戦争で敗北する迄、即ち今から十一年前迄は、日本の国民の大部分は無条件で日本の国体を尊いものと考え、また天皇を政治の中心といたたくことを世界に比類のない尊いことと信じ、それ故に天皇陛下万歳を叫んで戦死して行つたという、「事実」を確認してもら

いたいことである。全国民の間には一糸乱れぬ信念としての国體観があつた。それは今日言われているように、単にだまされたものであつたり、国民の迷言の所産としては、余りにも統一の儀に、首尾一貫したものであつた。この「事実」を諸君はどの様に把握しておられるのであろうか。天皇制とか国體は古いと云つて、頭から毛ぎらるゝされる方々は、どちらかと云えば真理の探究を叫ばれる方々である。だがい迄もなく「真理」は「事実」をはなれては探究出来るものではない。それ故に戦後の流行思想に禍されて、一概に封建的だ、古い、と言いつつてしまふ前に、当時の全国民が、何故に、あれほどまでに統一的な天皇観、国體観を持つていたのであろうか、ということを一応の疑問をよび起されるのが、真理探究を標榜される学徒にふさわしい学究態度ではなからうか。自分達の親や、自分達の兄貴たちが、かく迄に信じていた道を、謙虚に回顧し、その時代の国民の基盤に一度は立返つて研究する学徒らしい真摯な態度を是非とも学生諸君に求めたいと思う。そして私が諸君にそれを求めること自体決して無理なことではないと思うし、真理探究を尊しとされる諸君も亦、それを認めて下さるにちがひない。

私は過ぎ去つたものを徒らに復活せよと申すのではない。私は学究の域をはずれた独善的な一方的外来思想の信奉によつて価値あるものでも、無価値なものとして葬り去つてしまつたことはないか、敗戦の混乱の中で貴重なものの値打も知らずに屑籠の中に捨ててしまつたことはないか、を考へて見たいと切に念するのである。世界の各国、いずれの国の国民も、いづれの国の青年も、学徒も、如何にして自国、自民族の伝統と矜りを再発見しようかと努力してゐるいまのこのとき、日本だけがいつまでも伝統の全面的否定をもつて、得々としてゐるのが如き、それこそ世界の人々の笑い草でしかないことに気付かねばならぬと思う。

(九)「日本人であるよりも先に人間である」ということ

第二に申し上げたいと思うことは、日本国民としての自覚と人類の一員としての自覚との関係についてである。「日本人であるよりも先に人間である」という現代学生の通用語を、もう一度深く反省していただきたいのである。国民であるよりも先に人類の一員だということはそれ自体、決して誤りだとは思わないが、それが今日の流行思想として、言論界や大学の教壇や、学生諸君の間で使われるときは非常に淺薄に解釈されているのである。即ち国民と人類という言葉はそこでは、概念的な単語の羅列からくる、数学的大小の関係として解釈されているにすぎない。即ち人間とか人類と云へば大きく、日本人とか国民といへば小さくて、部分的であるという印象が流行している。しかし、それは大きな矛盾を含んでいるのであって、実際には日本人であることによつて、世界人類にはじめて貢獻するという現実的把握が、きわめて不注意に等閑に附されたまま放置されているのである。

自らの民族を大切に思い、祖国を正しく守護しようとする意志は、同時に人間個人としての自己の尊貴を認め、他の人間の生命を尊ぶ心と直結していることを知らなければいけない。自己が日本人であるということは、先に考えるとか、後に考えるとかいうことではなく、自己そのもののこの世におけるスタンダードポイントであり、自己を人間として意識することと、日本国民として意志することは離すこととの出来ない関係に立っている。日本の風光、自然の美と離れては我々個人の意思も、情操もないと同じく、ここにある人間は、日本の伝承の中に生れ出ている人間でしかあり得ない。もとより、理想をもつために、現実を否定することは正しいであろう。夢に生きるために、現実にとらわれない努力も必要であろう。しかし人間は母の胎内にから生れることが否定し得ない事実であるように、われわれが

日本政治の再建のために(小田村)

日本という国土の黒土の上に、生育した以外の人間でないことは、否定すべくもない「事実」である。

ここで皆さんに強くはつきりと心にとめていただきたいことがある。それは「現実を否定すること」「事実」を否定することとは、根本的にちがうことであるということである。「現実」は変革し、否定することが出来る。しかし「事実」は否定することは出来ない。即ち否定すべからざるものを我々は「事実」と呼ぶのである。従つて我々は時々の政治、政府に反対することの自由は持つているけれども、日本国民であることを否定したり、それを第二義的なものとして規定することは、為すべからざる不可能のことであつて、それを敢えてなそうとするならば、そこに生れ出るものは理想の世界ではなく、概念的幻想の世界にすぎないのである。人間生長の夢ではなく、人間の頭脳の中で空転する幻影なのである。

マルキシズムが労働階級の解放を叫び、つづいて国民全体を人民解放と名づけて革命に進む場合、一見いかにも「国民であるよりも先に人類の一員たれ」という命題に忠実であるかのごとく見えるけれども、やはり現実にはソビエトロシア、ソビエト中国という、一国の具体的政治勢力の扶植伸長の枠外には出ていないことを忘れてはいけない。いかにも理想もスローガンも、国家という政治体の力を抛り所としなくては、具体化され得ない現実の事実を見のがしてはならない。

私がこれからお話ししたいと思う天皇制の問題についての考察も、皆さんがあくまで自分自身を、抽象的仮空な人間という立場に固執して聞かれようとするならば、私の申し上げたいと思うところも伝わることは出来ないであろう。皆さんは動かすことの出来ない自己の「事実」、歴史的に民族的に自分がふまえて立つている地点を確認して、先に申した自己のスピリットの問題としてこれからの話を聞いていただきたいとお願ひする次第である。

(三) 天皇制存立に必要な基本的二要件

天皇制、日本国体の政治形態は、生物に之をたとえれば、最も文化程度の高い生物の構造と申してよいであろう。私はそう思っている。例えば生物のうちで最高のレベルにある人間の体を考へていただければよいと思うのだが、人体は他の生物に比して、非常に微妙な相関関係をもつた構造からでき上つていゝ。肉体だけが強健であつても役に立たない。又虚弱な体ではいくら頭脳が明晰であつても役に立たない。要は健全な心と身体とが一つの調和を保ち得ているときに、はじめて人間の人間たる価値が遺憾なく發揮されるものであろう。これに似て天皇制という政治形態は、嘗て日本国氏がそれを認めていたように、事実それ自体は世界に比類のない形態であつて、断じて今日世に云われる様に野蠻な、封建的なものではないのである。しかし高級な生物である人間は、下級動物に比してはるかに病魔にもろく斃れてしまうのと同じく、天皇制も亦之を支える精神にひびがれば直ちに国家国民の破滅を招かぬとも限らない不幸なものを、その中に孕んでいるのである。

具体的に云へば、天皇制の根幹には、二つの基本要件——天皇の国民に対する太御心と、国民の天皇に対する忠誠心との二つ——が必要である。もし天皇制の下において、このうち一つが欠けたり、不徹底であつたりするときは、天皇制のもつ文化的高度の価値が發揮されなくなり、逆に先般の大東亜戦争における敗戦の如き、国家悲運の事態を現出するに至るものである。それ故に、日本が何故大東亜戦争に敗れたか、の問題についても、今日では、天皇制という封建的制度の下における日本の帝國主義的行為が、その原因であつたと片づけられていゝけれども、実は天皇制に絶対必要な国民の忠誠心——一般国民のそれではなくむしろ、高位高官の政治家、軍人及び学者の忠誠心——の欠如が天皇制の運営を不自然、且つ政略的なものとし

たために、かかる結果になつたというのがその真実の姿であつた。即ち敗北の原因は、かの戦争の運営自体に直接的原因をもつていゝにせよ、遡つて滿洲事変、上海事変以来の軍部の政治擧断——即ち軍人は政治に関与すべからずと示された忠誠の道をふみたがえたこと、更に又軍部をして道を誤らしめるに至つた政治の腐敗にあるといつてよからうと思ふ。

更に、軍人や政治家がその道をふみたがえるときに、それを正しく導くのが学問の眞の使命であることに思いをいたすならば、こうした時代に於ける學者達の任務——學者達の忠誠心の欠如が、殊更に重大な意義を持つていたといわなければならぬ。即ち、注目を惹つてならない点は、政治家、軍人の思想をかくの如き方向に至らしめた言論、學者層の所謂、文化人の犯した誤りである。明治末期以来、大正、昭和に至る文化系の大学教授の思想、新聞雑誌の論調の多くが「忠誠」の何たるかを明らかにせず、むしろそれに輕蔑の態度を以つてのぞんだところに、重大な禍根が介在していたのである。例えば戦前の東京帝大法学部をはじめ、いわば言論指導の本山とも云われる大学文科系の講義の中では、憲法第一条、第四条という基本条項の講義を略し、憲法の講義といへば、国会法を中心として行ふのが常であつたし、また政治学の講義にしても、天皇制の解説への努力はきわめて微々たるものであつたばかりでなく、多くの學者が天皇制のもつ政治学的意義の究明を避け、それは政治以前のものであるかのごとく触れずにしたことを想起せざるを得ないのである。

大東亜戦争における敗北、日本国体の破滅は、決して天皇制自体のもつていゝ欠陥によるものではなく、天皇制を生かすことを怠つた、文化的、思想的原因にその根源を求めなければいけないのである。皆さんはあの時代は全國民が天皇制という機構の中で齒車のように動いていたと考えられるかもしれないけれども、実は天皇制の本質はその時代において、いかにアイマ

イになつておつたかということをよくよく考えていただきたいのである。勿論目に見える形式の上では天皇制は敵として行われていたし、国民感情の中にも国体は生きていたけれども、意志と感情を素朴に統一し得ていたのは、一般国民の層であつて、有名人達は、例え感情的に忠誠心を持つていたにしても、彼らは忠誠を貫く具体的な道を求めた意志——スピリットを喪失してしまつていたのである。意志なきところ、スピリットなきところ、天皇制という制度の如きは何の意味も持ち得ないことを銘記してもらいたい。

(二) 統治者对国民の対面形態と

統治者・国民の並列形態

さて話を前に戻して、天皇制の政治的に高度な意義と、天皇制の根幹をなす二つの基本的要件について若干述べて見たいと思ふ。

御承知のように天皇は文武——即ち政治力、軍事力に亘る一切の大権を掌握しておられた。このことだけについてみるならば、日本の国体は、外国でいう専制君主制の最も典型的な形態と同一であるように見えるであらう。しかし、これは西欧の政治史を学んで、そこに日本の国体と類似した政治形態を探し出し、西欧では、それを専制君主制とか、封建的政治機構と稱しているから、日本の国体もそうであると判定した皮相な見解であつて、形態の外面、しかも、一部の共通性を発見して全般を規定するという非学問的態度に外ならない。

しからば西欧の専制君主制と天皇制との根本的な相違はどこにあるか。思うに、西欧では君主には政治的君臨の体制はあるけれども、君主自身の人間性向上に関する体制は必ずしも必須条件とはなつていないようである。云わば君主对国民という対面関係だけがあつて、君主と国民が一つの道德的宗教的目標に対して並列する形態は見出せないのが通例である。ただ例外的

に君主が国教を信奉する場合に、国民と共に礼拝する形態が見出されるけれども、それも宗教国家としての場合に限られてゐる。

しかし日本の天皇の場合は、国民統治の大権の施行は、日本国民の祖先を祀る祭祀の敵修と、分けることが出来ないものとして行われているが、今の学生諸君には、そうした言葉は理解され難いと思われるので、次の様に申したらよからうと思ふ。即ち天皇は国民を統治するに當つては君臨の体制——前述の対面形態——を示すが、他方国民は天皇の祖先と国民自らの祖先を祀つており、天皇も亦、国民と同じ態度で祖先を祀ることが伝統とされていたのである。ここでは祖先の御霊の前に天皇と国民は並列の体制をとつてゐるのである。このように対面形態と並列形態をいずれも不可欠の要件として成立してゐるところに、天皇制の他と異なる本質が存するのである。

更にこれと関係して、神社は宗教なりや、という問題にもふれなければいけないと思ふが、ここで一言だけ述べておきたい。即ち神社組織は宗教的組織と申して差支えないのであるが、神社の御神体は国民の祖先であり、そこに祀られる神々は、一般に宗教々々義における教祖という性格を持つてゐないのである。それ故に、天皇制、国体の下において云われて来た皇祖皇宗の神霊というものは祭祀の対象である点では宗教的なものではあつても、いわゆる教義をもつ教祖でない意味に於て宗教の一つではないのである。日本の神々の中には善神悪神の区別なく、祖先をまつつと云うことで神としてまつられてゐる点も、一般宗教と大いに異つてゐる面であらう。日本国民の長い伝統の間で「神を祀る」と云いならざれた風習の中に生きる神々は、所謂教祖ではなく「亡き人々」「われらの国土に生死した先人」という意味をもち、我々の

過去を象徴するものとして祀られて来たということをはつきり認識してもらいたいと思う。

(三) 近代天皇制の形態の真価

かかる天皇制のもつ独自の、味わい深い内容は一体どの様な文化的高度性を我々に約束してくれるか。一言だけふれておきたい。

専制君主制や、封建的君主制という形態は君主側の権力が維持されている限り、その命脈を保つものである。従つて、その政治は、君主の行ふところが正しければ正しくありうるし、君主の誤りはそのまま政治に強く反映する。これに反して天皇制においては、天皇と国民との関係には、前に述べたように、対面形態と、並列形態とを本質として持つてゐる所から、天皇は天皇の行ふ政治の内容を、国民に深く問われるのであつて、所謂「輔弼」の責務は、天皇政治施行の上で不可欠の条件である。もとより専制君主制においても輔弼ということはあるけれども、それは特定の少数人に限られていたのに反し、天皇制、殊に近代天皇制、即ち明治憲法によつて定められた所によれば、天皇の下に、軍事、政事は峻別され、行政と司法とは分離され、立法は独立して、輔弼行為が国民全般に及ぶように定められていたのである。それ故に天皇制の内容を仔細に検討してゆくときは、この政治形態は封建的な、古風なものであるどころか、三権分立のデモクラシーシステムよりも一歩高度の政体を持つていたことに気付きうるのである。なぜならば、三権分立の政体においては、大統領は行政府の当事者であり、同時に軍事の総括者であるが故に、三権は分立し得ても、政事、軍事の峻別は、ただ大統領の良識に俟つよりほかにないことになつてゐる。しかるに天皇制においては、陸海の參謀総長、軍令部長による軍事の輔弼と、内閣総理大臣による政事の輔弼とが、両々並立して各々の全権を持ち、その両者の対立の場合は、天皇の御前

会議において決裁されることになり、審議に一段の深さが用意されるという形態をとつてゐる。即ち天皇政治においては独裁ということもあり得ず、輔弼の対峙の際の決裁が天皇によつてなされることがある程度で三権分立の理想もかえつてよく行い得る性格を持つてゐると云えるのである。

(三) 天皇制のもつ高度性と悪用化性

しかしながら精密な構造を持つてゐる天皇制は冒頭に述べたように、一方天皇の国民に対する統治態度の中に大御心という精神的基幹が要請され、他方国民の天皇に対する輔弼臣徒の態度の中には、忠誠心といふこれまた精神的基幹が必要とされる。それはデモクラシーにおける知的な良識をもふくめた、生命的宗教的性格をもつ高次の良識と申してよいかもしれない。とにかく忠誠心が国民に欠けるときは大変な危険性を孕むものとなることは、充分に注意しなければならぬ。即ち武力を背景にもつ軍部が、政治に関与してはならないという勅諭規範を守らないときは武力の故に政治家を押し、そこでは政事、軍事のけじめによる輔弼そのものを不可能にしてしまふ。更にすすんでは、天皇の御名において一切のことを押しすすめるために国民の純真な忠誠心を濫用する結果、天皇をロボット化してしまひ、形式的にのみ天皇制があつて、内容的には、愚劣な政治権力の横行だけが残る、ということになる。それは最初に述べた今次大戦の教訓がまさまざと我々に物語つてゐるのである。

このことはデモクラシーにおいても、国会議員は主権者国民の代表であるから、もし国会議員に良識が欠けるときは、やはりデモクラシーは危険に晒されるのであつて、同類のことと考へてよい。ただ天皇制の場合は「天皇の名において」ということが濫用される点、その危険性が多いことも認めねばならぬが、それ故にこそ、思想的な謙虚さがより強く要請

されなければいけないのである。

天皇制を支えるものは唯一つ、忠誠の意志であることを最後にくりかえし申し述べたい。意志とは人間の生命を統一して生れ出るものである。されば表面に忠誠を誓い、天皇を神格化し、天皇という言葉が出れば、直立不動の姿勢をとるほどであつても、それが概念化すれば天皇制の实体は失われてゆくのである。意志は二つに使いわけるとは出来ない。一方忠義的動作をくりかえしながら他方立身出世の権化のごとく生きて来た軍人がいかに多かつたか、それは天皇制を支えるものであるどころか、むしろ内部から之を崩壊せしめる重大な凶兆であつたことに気付かねばならぬのである。

(一四) 天皇制の形式的復活の危険と 憲法改正の安易性排除

私は天皇制についてこの様な考えをもつてゐるものであるが、それかと云つて現下の日本に天皇制復活を呼号しようとは思わない。最近の憲法改正の議論の中に時々出てくる様な、天皇制復活論のごときには、むしろすすんで反対の立場をとるものである。それは何故であるか。

先に申ししたがごとく、天皇制が誤りなく政治制度として運用されるためには、何よりも国民の忠誠意志が要件であるに拘らず、敗戦前の天皇制時代においても、あまりにも不徹底であり墮落してゐた国民の忠誠意志は、戦後、腰減に近いほどの変貌を遂げていたのであつて、かかるさなかに、いかに形式的に天皇制を復活しようとも、国民の天皇に対する感情が意志的に統一的に誤りなく発揮されうとは思われなからである。即ち天皇制そのものの意義を認める点では、天皇制復活論者に決してひけをとらぬものであるが、その実現の資格は、今の日本にはないといふ資格を得ないのである。国民にその資格なき所に

日本政治の再建のために (小田村)

高度な文化形式を与えれば、再び、三たび、少数の権力者が、天皇制の悪用と私用を考えるに至るのである。痛恨極りないことではあるが、共産革命ですら、日本に於ては、或段階では、天皇制を利用しないと限らないとさえ思はれるのである。今日の日本では、天皇制を方便的に利用することを考へる者は多くとも、天皇制のもつ意義を正しく解するには、余りにも文化のレベルが低下しすぎていると云えないであらうか。即ち天皇制施行のために何よりも大切な一事は、天皇制を方便化し、利用しようとする意志を、粉碎しようとする、より強い意志、国防護の意志の奥存が、先決問題であるということである。そして、そのことが一般国民大衆の中だけではなく、政治、学問、経済の主導権を握る人達の中に奥存するか否かが、その一大要件である、ということである。それが用意されずに、形式的に天皇制の復活が云われることには、きわめて大きな不幸が将来に残ることを予感させられるのである。

これに関連することであるが、憲法改正論については、私は次の様に考へている。これも亦、右の問題と同じく国民の民族的矜持も、祖国に対する愛情も、この様に稀薄化してしまつた現代の精神状況では、自主的に憲法を制定するには、まだ機が熟していないと考へるのである。憲法といふものは、あく迄も国家の基本法であり、時々折々にやたらに改正すべき性質のものではない。従つて占領下の憲法を、自主的な憲法につくりかえようとするのは正しいが、国民全体が日本国民としての自主的意志を持つてゐる時でなければ、その改正は後刻再び改正を呼ぶことになる。そういうことを繰返すことは憲法そのものの、權威を失ふこととなり、ひいては国内に政治的変革を次々に招くことになり易いものである。あれを考へ、これを考へ、憲法改正といふことばのもつ意味を、もつと慎重に考へるべきだと思ふのである。今の憲法に対して

は実はこれは憲法と呼ぶべき性質のものではないので、「占領政策基準法規」とその名称を変更して、準憲法制的のものとして皆で解釈することも出来るのであるから、この点も深く考へる必要があるであろう。ただ一言つけ加へたいことは、憲法改正反対を叫んでいる人々の所論のことであるが、この人々の云う平和憲法擁護とか、再軍備反対などといふスローガンの中にかくされた革命意志は、するどく追究すべきであつて、この人々こそ憲法改正に反対してはいるけれども、実は現憲法を自分に都合よい面だけを部分的に取上げていただけで、現憲法に忠実であるどころか数々の不法を犯して来ている人々であることを指摘しておきたい。

(三) 天皇制の課題

色々のことをお話ししたが、最後に申上げたいことは、二十年か五十年後かしらぬが、いつの日にか、天皇制は必ず復活すべきものであるということ、即ち、天皇制は政治形態として、アメリカの大統領制、ソ連の書記制等の現代各国の政治形態に比して、決して遜色のない政治形態であるということ、否むしる高度のものでさえある故に、学生、皆さん方も、政治学の研究対象として是非共これをとりあげ、把握していただきたい、ということである。そして天皇制の下においてあるべき国民の精神状況がいかに文化的に高度なものが要求されているかもあわせて知つていただきたい。またそのために、日本の文化についても、伝統についても、それとの関連において真剣に取り上げて研究していただきたい。若し、天皇制そのものではなく、天皇制の必要條件の欠如が日本を敗戦にみちびいた、ということが明かなれば、終戦後十一年間の日本国内の変革についても、大きな問題が投げかけられるにちがいないであろう。又もし日本民族が、本来の素質を再び發揮するときがあれば、その時は天下を挙げて再び天皇制を慕いあこがれる時であること

も予想されるであろう。しかしその意義を考えると同時に天皇制という政治形態は、その精神的内容によつて維持されうものである故に、形式が先に復活してはならないこともあわせて知つていただきたい。天皇制を保ち望む国民の気運が生れ出でて後に、しかも可成りの年月を経て、その熱情を内的に練磨し得た後に、天皇制ははじめて政治制度として復活することが出来るのでありますまいか。その日が一日も早く来ることは日本文化が世界に貢献するにそれだけ早いことを意味し、世界人類の福祉の一端を担うべき日本民族の眞の使命を正しく顕揚するために、学生諸君に再び三度び、真摯な努力を願う次第である。

(四) 保守政党的意義目標を明かにせよ

現実の政治の混乱は、やはり私達に取つて何とか打開しなければならぬ問題である。殊に社会党は統一したけれども、その間に見られる右派左派の内部混乱、総評の容共的性格の濃化、日教組の政治活動の活潑化などにかんがみ、保守政党的も、いつまで安眠をむさぼることが許されなくなつているとみななければならぬ。

ここで多くをお話する時間は持たぬが、ただはつきりさせなければならぬ一事がある。それは「保守」という意義を、積極的に国民に理解させなければならぬということである。即ち「保守」という言葉が革新に対する保守とか、進歩に対する反動的保守とかいう意味に追いやられつつある現実を、我々は強く打開しなければならぬ。もともと保守主義——コンサーバティシヨン——ということばの持つ意味は、決してその様なものではないのである。

「保守」とは「経験の持続」という意味をもち、事実の累積を人知の努力によつて修理固成する、という意味である。人間世界の進歩は、すべて「経験の持続」に正しく対処して来たと

ころに生れている。その意味で「經驗的現実」を理念的独断で中斷し、否定して立つのが「革命」である。

次に「保守」とは「蕭々な進歩」という意味を持ち、つづいて「不漸の創造」の意味を含んでいるものである。こうしたいはば進取的、改良的、創造的のことは一切が、革新革命思想家や政治家に完全占領されているところに、今日の保守政党の無力さが暴露しているといえよう。保守政党人も真に心を国家悠久の先にいたして、今こそ積極的に「保守」の意味を天下に表明しなくてはならないと思う。それが、いかに多くの善良な国

家や、純粹な愛国的人々の心に待たれていることであらうか、と私は切に思うのである。

学生諸君にスピリットの乏しいこと、その實の一端は明かに保守政党の負うべきものである。学生諸君の多くがマルキシズムに流れているといわれる事実に對しても亦、保守政党は深くその原因を自覚しなければならぬと思うのである。保守政党自身に積極的スピリットの欠けていること、思想的自立意志の欠けていること、その及ぶ所の少からざることこそ、現下日本の悲しい事実に外ならない。

国民文化研究会會員名簿 (五十音順)

氏名	職業・勤務先	現住所	出身校
青砥 宏一	旅館経営	島根県	徳島高商
石村 暢五郎	福岡大学教授	福岡市	神戸商大
江副 英敏	旭高校教諭	佐賀市	台北高商
小泉 一也	三菱造船勤務	長崎市	長崎高商
岡棟 猛	木材業	広島市	山口高商
岡本 直正	長崎大学医学部講師	長崎市	長崎医大
小川 幸男	都城中央病院長	都城市	熊本医専
加藤 敏治	米穀商	八代市	九大経済学部
川井 修治	鹿児島大学文理学部助教	鹿児島市	東大文学部
古賀 秀男	佐賀県庁教職員課	佐賀市	／
木幡 研司	肥後銀行勤務	熊本市	山口高商
小林 国男	香椎高校教諭(社会科担当)	福岡市	九大法学部
小柳 陽太郎	修猷館高校教諭(国語科担当)	／	九大文学部
佐伯 悟	中学教官	広島県	山口高商

己れの永遠不滅を信じないものは愛の何たるかを
知らず、従つて祖国をも愛し得ぬのである。承けつ
ぐべき祖国を有せざるものは憐む可きかな。

——
フイヒテ
——

国政研究会よりの寄稿

本研究会は私達が巻頭において述べました決意を、その「発議」の中で再び繰り返しているように、同じ念願を以て東京において動きつつある友好研究会です。ここに併せて紹介させていただくことにしました。

— 国民文化研究会 —

国政研究会趣意書

現下日本の内政、外交および教育各方面に刷新すべきものが余りにも多いことを痛感します。国内各界においてもこれらの対策に鋭意努力されておられることと思えます。しかしながら祖国の将来必ずしも樂觀を許さぬものがあります。

われわれは社会各層におのおの奉職し、日々多忙な用務に忙殺されておりますが、このさい微力を顧みず、国政研究会を設立し、広く国を思うものの真情を結集し、国政全般の諸問題を研究し、以て今日の時代においてわれわれに負荷された責務を果そうとするものであります。

本研究会の全員は概ね社会的地位および財力に欠けるものが多いのでありますが、国を思う真情につながる一点において、従来の研究会、懇談会の行き方とその本質においてかなり異なるものがあります。

われわれが今後為さんとする諸事業はすべて志ある方々の御支援、御協助をまつ他ないことは残念ながらやむを得ない所でありますが、賛助各位の御支援を得ることにより、時々適宜に事業を遂行したいと思えます。すなわちたまざる研究の成果を世に問い、あるいは政財界等各界有志との懇談会、時局講演会等の開催、印刷出版その他あらゆる方途を講じ、本研究会の目的達成に努力いたします。

もとより微力のため大を為すことができぬかも知れませんが、国運の前途を打開するため力を合せ心を一にするこ

とによつて、時代の誤りの急所を匡ふことができれば、われわれの喜びこれに過ぐるものではありません。

昭和三十一年九月二十三日

国政研究会幹事

小田村寅二郎

浜田收二郎

島田好衛

會 則

- 一、本会は国政研究会と称する。
- 二、本会は特定の政党に所屬せず、政治、經濟、教育各般の問題を研究し、総合的見地から国政刷新の方策を検討することを以て目的とする。
- 三、本会はその目的を達成するため次の事業を行う。
 - (イ) 政財界等各界有志との懇談会開催
 - (ロ) 一般青年層並に学生の思想啓蒙運動
 - (ハ) 各種集會、研究会の開催
 - (ニ) 印刷物、パンフレット等の刊行
 - (ホ) 各種研究資料の収集、整理
 - (ヘ) その他本会の目的達成に必要な事業
- 四、本会はこの趣旨に賛同する会員を以て構成し、入会は会員の推薦によるものとする。
- 五、本会に会員のほか賛助員を置くことを得。
- 六、本会の運営のため幹事若干名を置く。
- 七、本会の経費は、集會の場合はその都度実費を徴收し、通常の通信費その他経費は有志の負担とする。
- 八、本会の事務所は当分の間、東京都世田谷区上馬町二丁目三十五番地（電(41)二五八三）（浜田牧二郎宅）に置く。
- 九、本会の会計年度は一月より十二月までとし、二月に總會を開き決算報告を行う。

国政研究会 発議

流行語「平和と独立」の誤りを指摘し、その言葉の本義を明らかにする。

革命陣営並びに進歩派と自称する学者・文化人らは、「平和と独立」のスローガンをほしいままに天下に喧伝している。この言葉に彼ら一流の意味づけをしながら、更に「平和と独立を守る運動」の名のもとに、現実には、徐々に赤色革命の基盤を築きつつあると見られるが、この見方は果して是をはずれているであろうか。

また国民の少からざる人々が、老若男女を問わず、このスローガンの美しさに心を惹かれ、背後の恐るべき意図に気が付かず、不幸にもその術中におとし入れられようとしていると見られるが、この憂いも、また果して一片の杞憂であろうか。

国民の大多数が、従来その心の中に祈つてきた「平和」や「独立」なるものは、実は常識的な意味における「平和」や「独立」であつたのであつて、それはいま世間で云われているような、「人民解放による民族独立」などという意味の「独立」とか、「国防護の軍備を平和に反するもの」などという意味の「平和」では、断じてなかつた筈である。

われわれは国民の大多数が考へてきた「平和」や「独立」は、決してそのようなものではなかつたことを信するが故に、「独立」と「平和」という二つの言葉を、再びここに常識的な意味の言葉にとり戻さなければならぬ。何故ならば、この二つの言葉は、決して革命のスローガンであるべきではなくて、健全な国民生活の、厳粛かつ重大な指標であるからである。

次に、革命陣営や自称進歩派の文化人らは、「平和と独立」のスローガンを勝手気ままに使つて
いるが、完全な「独立」のない所に、果して真の「平和」が達成できるであろうか。世界の現実
は国家の完全な、名実共なる「独立」が達成されてこそ、はじめて世界人類の「平和」に対し寄与
が可能ななるわけであつて、このことは、世界各国（自由・共産・中立いづれの陣営を問はず）
の共通かつ明確な事実であつて、その例外となる国は一国もないからである。それ故に静かに考
えてみれば、今日の日本において流行語のように安易に使われている「平和と独立」というスロー
ガや、「平和と独立を守る運動」などの言葉は、その単語の配列自体に問題を含んでおり、その言
い方が流行している所に、思想の混迷の重大な一端があらわされている。すなわち、正しくは「独
立」あつての「平和」であるから、「平和と独立」ではなくて、逆に「独立と平和」とこそ表現す
るのが、自然であり正確である。また「平和と独立を守る運動」といつているのもおかしく、真の
独立が出来ていない今の日本であるから、「守る」ではなく「達成する」でなければならぬ。こ
こで使われている「守る」などという表現は、一つのナンセンスにすぎない。

われわれは日本国民の唯一最大の悲願である「独立」と「平和」という至高の言葉を、今こそ、
革命陣営並びに自称進歩派の文化人らから、徹底的に奪回して、この二つの言葉に、まことの生命
と内容を盛り込もうではないか。（三一・一〇・一）

日教組問題研究大綱

全国五十万余の教職員を擁する（日本教職員組合）は資金面からみても、自由民主党、社会党の比ではな
い程に歴大な力を持つている。その上中央執行部の思想傾向は全く共産主義的であつて、その運動方針及び
教育指針は、単に生徒児童にとどまらず、父兄、母親、青年層にまでその触手をのばしている。かくて今日
の日教組はすでに単なる職員組合とみるには、あまりにも強大な政治勢力になつてきており、教育の専断、
政治への介入はすでに黙視するにたえないまでに至つている。

かかる現状にかんがみ東京に在る国政研究会は、日教組問題こそが現下日本の最大の政治問題の一つであ
ると判断し、目下これについて総合的な研究を進めている。ここに一文の寄稿を本書に寄せるに当つて、あ
えて「日教組に関する研究項目の大綱」を發表し、大方諸賢の御批判と今後の御協力を求める次第である。

(三三、一〇、一)

一、日教組設立以来の組織上及び思想指導方針の変遷

イ 特に第八回定期大会（昭26）第九回定期大会（昭27）及び第十回定期大会（昭28）のもつ転換的意義、並びに
その内容の分析

ロ 昭和二十六年以来行われている教育研究全国集会（教研）の内容、及び同集会が日教組の運動に占める意義の
正確な把握

ハ 日教組の倫理綱領（昭27）の原理的批判

二、日教組の政治活動の実態

その一 日本民主教育政治連盟（日政連）と日教組及び日教組議員団との三者の相関関係の中に

秘められている諸問題

- イ 日教組は果して政治活動を行つていないと断定できるか
- ロ 日政連と日教組との極端なまでの不即不離の關係の分析
- ハ 日教組出身の国会議員は果して日教組だけの利益代表でないといえるか。即ち同議員団は国会議員としての自主性を没却してまで、日教組の指示に従う体制にあるのではないか

その二 日教組の政治的地位及び労働運動における現実的地位

- イ 日教組と社会党、労働党、及び共産党との關係
- ロ 日教組の日本労働組合総評議會（総評）において果している役割
- ハ 日教組と全日本学生自治会総連合（全学連）との關係

その三 日教組の現行憲法に対する態度——表面憲法改正に対し反対の態度を表明しているが、例えば天皇のあり方について果して現憲法を忠実に遵守した教育を施しているといえるか。その他、憲法遵守上の諸問題

三、教育行政における日教組の介入状況

その一 文部省と日教組の現段階における諸關係

- イ 日教組は文部省を単なるサービスマンとして棚上げし、文部行政を専断しようとしているのではないか
- ロ 文部省は日教組の勢力に動ぜず、教育内容の是正に対してその職責を充分に果しうる体制にあるか

その二 教育委員会と日教組の諸問題

- イ 教育委員は教職員の任免その他的人事権の執行並に教育課程、学習指導等に関する職務権限の行使に當つて、日教組側の反対を拒絶し、自主的に断行し得る体制にあるかどうか。これについて地域的に見られる特殊状

況の把握

ロ 日教組教員のうち、教育委員の人事権を無視してきたものについての全国的実態調査

四、ソ連中共と日教組との結びつき

イ 世界教員会議（昭28、於ウイーン）における日教組系代表団の発言、及び活動内容の調査

ロ 李徳全、梅蘭芳の来日による日教組の受益内容の究明

ハ ソ連、中共の有力筋は日本赤化の為、社会党、総評にもまして日教組の役割を期待している節々の究明

五、日教組の経済面の実態

イ 賃金内容とその使途方法の真相調査

ロ 学校生活協同組合（学生協）の果している経済活動の実態

ハ 教科書販売権について日教組の実質的独占が行なわれているのではあるまいか

ニ その他日教組の商業的諸活動についての調査

六、日教組の思想的背景の調査

イ 日教組の思想指導の本拠と見られる岩波グループ、民主主義科学者協会（民科）等の実態の把握

ロ 教育科学研究会全国連絡協議会（教科研）及び教科研全国日共グループ会議等が日教組の思想指導に果している

地位役割

ハ 所謂日教組講師団グループの組織、思想、活動等の調査研究

ニ 学術会議委員選出における日教組と民科グループの諸活動

七、日教組の教育内容の批判

その一 教科書問題の総合的検討

- イ 恣意にもとづく歴史歪曲の実態
- ロ 階級史観の無反省な採用状況
- ハ 生活綴方教育に対する思想的批判
- ニ その他各種教科書にひそむ諸問題

その二 偏向教育の具体的事例に関する各事例毎の系統的調査研究

- イ 旭ヶ丘中学事件
- ロ 山口県夏休日記事事件
- ハ 滋賀県冬の友事件
- ニ 北海道武佐中学事件
- ホ その他教育全般にあらわれた政治的偏向

その三 現下青少年の頹廢的現象と日教組の教育方針との内面的關係の究明

八、〃丹頂鶴〃の意味するもの

- イ 中央本部、都道府県単位組合、一般組合員のつながりの実態
- ロ 日教組本部、及び支部役員の選出方法は果して民主的であるか、形式上民主的であるにとどまってはいるかないか
- ハ 日教組の資金内容、及びその用途を五十万組合員は知っているか
- ニ 日教組本部の動きに対して一般組合員はどの程度反撥しているか、また組合員の疑惑は果して解明されているか

九、反日教組勢力の全国的調査

- イ 山口県教団連、東京都教団連など、日教組を離脱した組合の実態
- ロ 学校内部における反日教組の潜在的勢力の動向
- ハ 教育界以外における日教組批判勢力の現状
- ニ 全国高校教職員組合（全高教）その他中立的教職員組合の実状

(附)

一、文部行政全般に対する再検討

二、教育制度改善に関する調査研究

イ 六、三、三制の再検討（旧制学制における長所の再検討を含む）

ロ 男女共学制に関する問題

ハ 新制大学における職業教育の徹底（職業専門大学設立問題を含む）

ニ 入試、学区制の刷新、合理化

三、教育内容全般に対する再検討

——完全なる自主独立国家としての日本の再建及び日本国民育成のための教育の本義を明らかにすること——

(1) 占領治下、強行された教育内容の根本的是正

イ 歴史、地理、徳育教科目の確立（社会科教育の改訂）

ロ 日本歴史の正確な史実に基づく教育の樹立、（唯物史観に基づく日本歴史観の払拭）

ハ 現行教科目の授業時間の配分に関する再検討（高等学校における選択制度の問題をもふくむ）

ニ 豊かな情操教育の確立

(2) 諸大学における教育学部（教育者養成機関）の教育並びに教科目の再検討

イ 現代教育の背景であるヒューマニズム思想の正確なる把握（日本の伝統的愛国心並びに民族精神とヒューマ

ニズム思想の両立の確認）

- ロ 階級闘争思想に対する徹底的批判力の養成及びそれに代る国民相互信頼感による思想の涵養
 - ハ 諸外国における愛国精神教育の実状把握
 - ニ 国家興亡及び盛衰についての世界的、普遍的事実に関する確なる把握
- 四、教科書編纂——現行教科書の根本的検討
- 五、正しい教職員組合のあり方についての研究
- イ 教職員の倫理の再確認——教職員は教育労働者と呼ぶべきではない
 - ロ 組合の組織方式、運営方式の健全なあり方についての研究
 - ハ 政治活動との完全なる分離——組合が政治的に自由な立場を確保するための方途
 - ニ 右の諸点について諸外国の組合運動との比較研究
 - ホ 徴収会費の減額方法
 - ヘ その他の諸問題
- 六、教職員及び教育者の社会的、経済的、地位安定向上に関する基本対策の確立

昭和三十一年十一月七日

頒布価格 一五〇円

(学生頒価 一〇〇円)

熊本市池田町九九九

発行所

国民文化研究会

(振替熊本三一九九)

福岡市長浜町四ノ一三

印刷所

大宮印刷株式会社

電話④一五二九番





